

障害のある子どもの教育に馬の特性を活かす

— 自立に向けた心身一元的な指導に焦点をあてて —

平成 15 年 3 月

独立行政法人 国立特殊教育総合研究所

肢体不自由教育研究部

目 次

はじめに

研究の目的と方法 1

第 I 部

馬の特性を障害のある子どもの教育に活かす 滝坂 信一 5
障害のある子どもの教育素材としての「馬」がもつ可能性 加藤 守松 13
馬を用いた取り組みにおいてより良い馬との関係を作るために 川嶋 舟 17

第 II 部

Aさんの乗馬コース初挑戦 笹本 健 25
「馬」のもつ魅力と子ども達の活動 當島 茂登 29
ポニーを用いた特殊学級の子どもたちへの指導 飯島 友子 35
地域交流活動の一環としての乗馬 宮林 文代 41
馬を用いた活動導入の試み 鈴木 卓郎 45
養護学校における在来馬とのかかわりを活かした学習の試み 安川千壽子 51
馬を用いた指導の開始と充実した展開のために 滝坂 信一 71

第 III 部

大洋村におけるポニー活動事業 深野 聡 89

第 IV 部

教育にとっての動物の存在の意味 滝坂 信一 111
盲・聾・養護学校における動物とのふれあい 滝坂 信一
—全国調査の結果にみる実態と展望— 笹本 健
當島 茂登
徳永亜希雄 117

今後の課題と展望 129

* 本報告書中の写真は関係者の承諾を得て掲載しています。

はじめに

これは、肢体不自由教育研究部が平成11年度から13年度までの3年間に、各地に様々な協力者や協力機関を得て取り組んだ「障害をもつ子どもへの馬の特性を利用した指導に関する研究－自立に向けた心身一元的な指導に焦点をあてて－」のまとめです。なお、本報告書では研究課題にある表記「障害をもつ」を「障害のある」に変更しています。

近年、「乗馬セラピー」や「ホースセラピー」と呼ばれて、障害のある人々に対する教育や療育が社会的な注目を集めています。しかし、我が国の現状では「馬」と障害のある人々の教育や療育を関連させて想像してみることは、まだ決してたやすいことでも一般的なことでもないように思います。

この研究を企画した際も、実際に行っている過程でも、「なぜ馬なのか」「そのような一般的でない内容を扱うことが日本全体の障害のある子どもの教育に果たして役立つのか」という意見が内外にありました。しかし、この研究をすすめるなかで、この内容を取り扱うことが障害のある子どもの教育に関する考え方や方法のこれまでを振り返るいくつもの視点や、今後の在り方を模索するヒントやアイデアを非常に多く含んでいるものであるという見通しを少しずつ持つことができるようになりました。現在この領域に多くの人々が関心を持ち、この10年の間にいくつかの地方自治体がこの領域を取り上げるようになりつつあるのも、関係者のこういった実感が背景にあるのではないのでしょうか。

1950年代以降、ヨーロッパやアメリカ文化のなかで「草の根」的に始まったこの領域は、今、障害のある人々の教育ではプールの指導や音楽を通じた指導とともに欠くことのできないものとして定着しつつあります。かつて日本にはたくさんの馬が飼育され、生活の場とともに暮らしていました。柳田國男の「遠野物語」や「遠野物語拾遺」をはじめ、昔の日本人の生活を扱った話には馬がここに登場します。そして今も毎年1万頭以上の馬が日本では生産されています。そして、日本には現存する在来種が8種類あり、保存育成されています。しかし、馬と私たち現代人との距離は遠く隔たってしまっています。これは、特に戦後日本の社会が農業の機械化や効率化を目指してきた反映とも言えます。

本研究の主題は、「障害のある子どもへの馬の特性を活用した指導に関する研究」というものですが、馬はモノではありません。生きた存在です。その意味からすれば、本研究は、馬は子どもの学習のパートナーといっても良い存在であり、それを指導者がどのように活動全体として組み立て、豊かな内容にするかということについて取り上げたと言うことができます。

本研究は、馬に関する専門家や馬のいる機関、この領域を実践する学校等のご協力を得て実施したものです。ご協力いただきました皆様方に心から感謝いたします。特に調教師である高橋公正氏には多大なご協力をいただきました。

この成果は、「指導のねらいと評価」という次の研究内容へと引き継がれ、実施の途上にあります。ご忌憚のないご意見、ご感想をお寄せください。

平成15年3月

肢体不自由教育研究部

研究の目的と方法

I. 目 的

近年各地で、乗馬を通じての障害のある子どもに対する指導や療育が注目を集めている。これにともない、障害のある子どもの教育の領域でも指導の一環として乗馬や厩務作業を取り入れる養護学校ができてきている。また、これらの実践を通じ、運動に障害がある子どもに対する運動・動作の改善やコミュニケーションに困難のある子どもに対する馬を媒介とした学習の有効性が報告されている。今後、この領域は学習指導要領にある「自立活動」、「総合的な学習の時間」での取り組み、また障害のある人々の余暇活動など生活の質の向上に資する内容としてさらに広まっていく可能性がある。

しかし、近年、関係者から寄せられる本研究に対する実践方法や理論に関する問い合わせの内容から、この領域に関する指導法の開発や有効性などについて指針が求められていることがわかる。企画者らはこれまで部分的に検討を行ってきたが、さらに実践において得られた資料、各地の実践資料、諸外国の資料の収集・分析を行い、本領域の枠組み、特徴及び技法についての指針を得ることを本研究の目的とした。

II. 方 法

1. 手 続 き

以下の5つの方法で研究をすすめる。

- (1) 研究所における馬を用いた指導の実践と検討
- (2) 研究協力機関における馬を用いた指導の実践と検討
 - ① 所内分担者が直接に指導実践を行う
 - ② 研究協力者が指導実践を行う
- (3) 国内各地の馬を用いた指導実践に関する資料の収集と分析
- (4) 国外の馬を用いた指導実践及び理論等に関する資料の収集と分析
- (5) 研究協議会における関連資料に関する協議

2. 研究期間

平成11年度から同13年度までの3年間。

研究成果は平成14年度にまとめる。

3. 研究組織

(1) 所内研究分担者

笹本 健 (肢体不自由教育研究部)

滝坂 信一 (肢体不自由教育研究部；研究の企画・推進)

當島 茂登 (” ”)

徳永亜希雄 (肢体不自由教育研究部；平成14年1月から)
落合 俊郎 (知的障害教育研究部；平成12年3月まで、
現在広島大学)

徳永 豊 (肢体不自由教育研究部；平成13年10月まで、
現在知的障害教育研究部)

(2) 研究協力者

飯島 友子 (茨城県鹿島郡大洋村立白鳥東小学校・教諭)

加藤 守松 (愛知県立三好養護学校、現在愛知県立名古屋養護学校・教諭)

川嶋 舟 (東京大学大学院農学生命科学研究科獣医学専攻博士課程・獣医師)

高橋 公正 (芝山カントリーファーム・代表)

深野 聡 (茨城県鹿島郡大洋村、現在社団法人東京乗馬倶楽部・職員)

三輪 俊治 (社会福祉法人南高愛隣会感性療育研究所・所長)

安川千壽子 (長野県木曾養護学校・教諭)

(3) 研究協力機関

青森県立第二高等養護学校

石川県立錦城養護学校

茨城県鹿島郡大洋村

富山県立富山養護学校

長野県木曾郡開田村

長野県木曾養護学校

III. 結 果

研究成果である本報告書は、4部から構成されている。第I部は、障害のある子どもに対する馬を用いた指導とはどのようなものか及びその意義について、諸外国や国内の歴史的な経緯を概観した観点から、獣医師の観点から、そして障害のある子どもにかかわる学校教育の観点から述べている。第II部は、研究所での実践及び研究協力機関である特殊学級、養護学校で行われた実践と教育課程への位置づけや実践上の課題に関する事例及び実践の際に配慮された事項について述べている。第III部は、本研究部がかかわって一つの村が行った、障害のある子どもの教育に馬を取り上げて継続的な指導の経緯を事例として取り上げた。最後に、第IV部で本研究で扱っている「馬」を含めた教育のなかで動物を取り扱うことの意義について、及び障害のある子どもの教育において動物がどのように取り上げられているか、馬を用いた指導の認知度や実施の実態に関する調査結果を取り上げた。

第 I 部

馬の特性を障害のある子どもの教育に活かす

滝 坂 信 一

障害のある子どもの教育素材としての「馬」がもつ可能性

加 藤 守 松

馬を用いた取り組みにおいてより良い馬との関係を作るために

川 嶋 舟

馬の特性を障害のある子どもの教育に活かす

滝 坂 信 一

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

障害のある子どもに対する馬を用いた指導はまだ我が国では一般的ではないために、「なぜ馬なのか?」「どうして犬や猫、あるいは牛ではダメなのか?」といった質問を受けることが少なくない。また、犬や猫などの小動物と触れ合った個人的な体験から、心理的な「癒し」に集約してその意義が語られることも多い。本稿では、馬の特性とはどのようなものか、そしてそれを教育に活かすとはどのようなことなのかについて、文献や実践をもとに検討する。

1. 「治療的乗馬」「障害者乗馬」とは何か

我が国で現在「乗馬療法」や「乗馬セラピー」と呼ばれているものは、外国では

＜障害者乗馬＞ Riding for the Disabled

あるいは

＜治療的乗馬＞ Therapeutic Riding

と呼ばれている。いずれも、障害のある人々を対象とし馬を用いて行われる

- (1) 医療対応の一部として行われる治療や訓練
- (2) 教育・心理的対応
- (3) スポーツやレクリエーション活動

をその内容としている。これら三領域やそれぞれの効果は相互に排他的なものではなく、むしろ重なりあうことで相乗的な効果が期待される³⁾。また、対象者の状態やニーズによって他領域へ移行することもできる。

2. 「乗馬療法」の歴史^{1), 2)}

馬に乗ることの身体への影響に触れた最も古い文献はヒポクラテス(紀元前460-377)による乗馬のもたらす「健康によいリズム」に関する記述だといわれている。

専門家による健康や治療への寄与を目的とした馬の使用は、ヨーロッパでは16, 17世紀から行われ始める。筋運動への影響など生理的な側面そしてうつ状態の改善など心理的な側面への寄与の側面から、治療を目的とした馬の活用がウィーン医学学校創設者の一人であるVan Swietenによって取り上げられ、運動療法の一つとしての萌芽が見られるようになる。18世紀になると、馬に乗ることが身体機能の活性化に非常に効果があるとされ、運動的な側面

やリハビリテーションの側面からの効果が注目されるようになる。18世紀には既に「乗馬を通じての健康作り」と題した書籍がドイツで出版されている。また、19世紀末には、乗馬による毎分180回の揺れが交感神経系を刺激することが指摘されたり(Zander, 1980)スウェーデンで治療目的に機械仕掛けの馬が作られている。

3. 専門領域「治療的乗馬」の成立

しかし、馬に乗ることが人間の心身にどのような影響を及ぼすかが実証的に検討され、「治療的乗馬(Therapeutic Riding)」と呼ばれて専門の領域として成立してくるのは1960年代以降のことである。特に、イギリスとドイツ語圏で実践的な検討や理論化が図られていく。イギリスでは障害者のレクリエーションやスポーツなど、障害者の社会参加という観点に重きが置かれボランティアの育成法も含めて方法論が開発されていく。他方、ドイツ語圏では医療(理学療法)の一部としての乗馬、心理的な対応及び教育の一環としての馬の利用、障害者スポーツとしての乗馬、というようにそれぞれの専門領域における馬の活用というかたちで方法論が開発されていく。1974年にはこの領域初めての国際会議「乗馬を通じてのリハビリテーション」が、(1)身体障害のためのリハビリテーション、(2)知的障害のためのリハビリテーションをテーマにパリで開催されている。そして、1977年には、現在のこの領域の基本とされている冒頭に述べた3領域が示される³⁾。

現在は、先にも述べたように障害のある人々や心理的な課題をもつ人々に対する(1)医療、特に理学療法からのアプローチとして、(2)心理・教育的なアプローチとして、(3)障害者のスポーツ・レクリエーションとして世界各国で取り組まれている。障害のある子どもの教育領域で馬を用いた指導は、欧米をはじめインド、シンガポール、香港、オセアニア地域、ロシア、メキシコ、などの国々において、プールでの活動及び音楽の活動とともに必須の内容になりつつある。

この領域の質的な向上と学術的な交流を目的とした国際組織として「国際障害者乗馬連盟」があり、3年に一度世界大会を開催している。2002年2月現在で、加盟はフルメンバー(障害のある人々に対する馬を取り扱った活動を行う非営利組織)が31カ国44機関、フルメンバー組織に属さない個人資格でのアソシエイトメンバーが41カ国256

名となっている。次回第11回大会は2003年、ハンガリーのブダペストで開催される予定である。

4. 我が国の歴史

我が国において障害のある子どもの教育における馬の活用は、既に1970年代、東京都立町田養護学校が当時町田市にあった財団法人ハーモニーセンターのポニー牧場において実践を行っていた記録がある。この他にも、手元に記録はないが、恐らく教育一般や障害のある子どもの教育における馬の活用はずっと以前から行われていた可能性がある。

障害のある人々への馬の活用が一つの領域として我が国に紹介されたのは、1980年代の半ばである。脳に中途障害を負った八木一明氏が自身のイギリスにおけるリハビリテーション経験から「日本身体障害者乗馬連盟」を設立し、各地の馬場を借りてボランティアとともに活動を始めた。この団体はその後「日本障害者乗馬協会」と名称変更するとともに組織変更を行い、現在乗馬クラブ等馬事関係者を中心に特に障害者スポーツとしての乗馬に取り組み、パラリンピックへの選手派遣を行うなどの活動を全国に展開している。

他方、これとは別に、ドイツの研究者と障害のある子どもの教育に関する共同研究を行っていた国立特殊教育総合研究所の滝坂、笹本らが、1990年から障害のある子どもの教育における馬の活用に関する試行を開始した。このグループの特徴は、障害のある子どもの教育に関する専門家と馬の調教の専門家とが連携して内容と方法論とを開発しているという点にある。このグループのスタイルは、ドイツ語圏で発展してきた考え方と方法とに共通性をもっている。

先に述べた(財)ハーモニーセンターの活動はその後、東京都葛飾区が設置した「水元公園ポニースクール」に引き継がれ、東京都立水元養護学校教育活動や個別の活動に利用されている。さらに「日本乗馬療法協会」という組織をつくり、葛飾区の外長崎雲仙地域などで活動を行っている。なお、青少年の健全育成を主目的として財団設立された同センターは、青少年を対象にした活動の中核にポニーにおいて事業を展開している。

また、「日本身体障害者乗馬連盟」や「水元公園ポニースクール」でボランティア活動を行っていたグループがイギリスのRDA(障害者乗馬協会)日本支部というかたちで東京、神奈川で活動を続け、現在NPO法人RDA Japanとなって各地の活動を支部として位置づけ、障害のある人々のレクリエーションやスポーツとしての活動を行っている。

近年、地方公共団体が関与して障害のある人々や地域の人々に馬との触れ合いや乗馬の機会を提供しようという動

きが各地に見られる。宮城県は県立知的障害者施設「船形コロニー」にポニー牧場を置いて全県派遣事業を行っている。また、在来種保存会のある市町村のなかで、長野県木曾郡開田村、愛媛県今治市では、地域の養護学校や小中学校の教育活動に馬の活用を推進している。この2地域を含め、歴史的に馬と深い結びつきがある全国39市町村で作る「全国市町村ホースサミット連絡協議会」は1998年の大会で「乗馬療育」を推進していくことを公式宣言している。この他、各地で行われている障害のある子どもの乗馬活動に対し補助金を交付する市町村が数多く出てきている。

この他、乗馬クラブやボランティアが独自に立ち上げた活動が各地で展開されている。現在、団体間の交流を目的とした組織として「全日本障害者乗馬協議会」がある。

また、県や市が障害児・者を外国派遣しているところでは、外国での活動に「乗馬療法」を取り上げているところがある。福島県は「ふれあいウィング県民の翼」事業のなかでドイツのケルン市への県民派遣を行っており、そのなかで治療的乗馬施設を訪問してセッションを受けている。また、兵庫県宝塚市は、在住の障害がある中学3年生全員をアメリカ合衆国コロラド州デンバーに派遣する事業を毎年行っており、このなかに3日間の「乗馬セラピー」プログラムを位置づけている。

5. 「治療的乗馬」の実際

—教育・心理的アプローチ—

以下、本研究にかかわる実践及び資料から、障害のある子どもたちに対する馬を用いた教育の特徴について述べる。

(1) 活動の主な構成要素

この領域を考える場合、「馬」という存在そのものに加えて、その周辺環境を教育にどのように活かせるかという視点が重要となる。この点から子どもたちに提供できる活動として次の5つを挙げることができる。

1. 動物を飼育・世話する
2. 動物とふれあう
3. <馬>という大型動物のもつメンタリティとの交流
4. <馬に乗る>
5. 様々な他者と共に活動する(仲間、指導者、馬に関わる専門スタッフ)

次に、指導のねらいの観点からみて、その形態は以下のように整理できる。

1. 個別的な治療的(治療教育的)な目的から行われるもの(自己像、他者の認識)
0歳から(早期教育としての)
肢体不自由
運動機能の開発

コミュニケーション能力の開発

2. 小グループでの治療教育的な目的で行われるもの（外界、他者との調整機能）

4～5歳から

社会性、協調性の指導

3. 小グループで、作業学習や総合的な学習の時間の取り組みとして行われるもの

4. 大きな集団での活動

異年齢

5. 余暇活動：外乗、キャンプ

6. スポーツとして行われるもの

- ・軽乗
- ・ドレッサージュ
- ・武範運動
- ・ドライビング

(2) 主な「効果」に関すること = 馬を活用することのねらいとする内容

- ・肢体不自由の改善に関する学習（特に、立位、歩行に関すること）
- ・身体機能の向上
- ・関係障害の改善に関する学習（社会性の育成）
- ・集団における調整力の育成、対人関係調整力の育成
- ・生活意欲の向上
- ・情緒、心理状態の安定
- ・自己調整能力の向上に関する学習
- ・活動に対する意識の集中に関する学習
- ・身体の生理的活性化と鎮静化
- ・自己表現力の向上

(3) 特徴

- ① 内発的動機に基づくものであること：他の指導や訓練との最も大きな違いの一つ
 - ② 総合的な内容をもつ方法であること
- ・「総合的な体験として」行うことができる（部分的、抽象的でない）
 - ・様々な学習への展開が可能である
- ③ 心理的な側面と生理学的な側面の双方を同時に扱うことができる。

障害のある子どもの教育活動・指導に馬を用いる場合、他の素材を用いるのと大きく異なる点は、馬が感情や好みなどをもった一個の生きている存在であるということである。これを実際の場面に即して言うと、馬と子ども、指導者そして馬の専門家（馬の専門家と指導者は同一者である場合がある）の4者（3者）は相互にやりとりをしながら実際の指導が進むということにはかならない。

状態像別にみた期待できる学習内容

1) 「脳性まひ等による姿勢制御の困難、歩行の困難のある子ども」の場合

- 馬にのる：不当な反射や緊張の解除、崩れている左右前後のバランスの改善、主導感、達成感、適切かつ適度な運動、

馬と親しむ：心理的な解放

馬の世話をする

2) 「自閉症等、関係障害のある子ども」の場合

- 馬と親しむ：他の存在との言語以外の手段によるコミュニケーション

- 馬にのる：意図の明確化と相手への伝達の経験、一体感の体験、他者との協力

- 馬の世話をする：関係を形成し、自己調整の経験

- 指導者、介助者とのコミュニケーション（馬、指導者との3者関係）

3) 「不登校、集団不適応などによる自信の喪失にある子ども」の場合

- 馬に親しむ：心理的な安定（共感性）

馬にのる：主導感、達成感、共感、他者との協力、主導感、達成感

- 馬の世話をする：保護意識、共感、他者との協力

6. 指導の場面の実際

障害のある子どもがふれあう、乗ることを前提に調教された馬を使用。品種は、中半血・ダッチブレッド・クォーターホース・ポニーなどである。

対象となるのは、自閉症・知的障害・肢体不自由・盲聾、あるいはその2つ以上の障害を併せもつ子ども達である。

心理・教育的アプローチでは、騎乗するだけでなく、馬のいる場所に出かけていく、馬と接する、世話をするといった広範な内容を重視する。例えば、初めて馬を見る子のなかには、遠くから見ていてだけで終わる場合もある。保護者や担任教師は「恐くないから」と乗ること自体を重視して子どもに強いる傾向が見られるが、このような関わりは避ける。乗ろうとしないのは恐怖心があるかで、その事実を重視する。子どもに恐怖心だけがあるとなればその子は馬のいる場所から去るはずであり、そうでないとすれば、同時に「近づきたい」「乗ってみたい」という気持ちが存在すると考えられる。このように相反する両方の気持ちが同時に存在することを重視し、尊重することが子どもの主体的な活動にとって欠くことができない。この過程が心理・教育的アプローチでは非常に重要である。

指示や強制されるのではなく自分の意欲の具体化として馬に接近したり触れる、乗るといったことが次のさらなる意欲的で主体的な活動への基盤となる。

(1) 馬に自分の身を任せる – 身体を通じての信頼関係 –

馬の背にまたがるということは、高い位置で地面から足を離し馬に自分を預ける事を意味している。このような経験を持ったことがない場合、また、相手が見知らぬ馬であった場合、恐怖心を抱くのはごく自然なことである。子どもが怖がる様子を見せたときに無理に乗せることをしないことが原則である。子どもが自ら馬に近づこうとしたり、馬のいる場から離れようとしめない場合、それは子どもの中で怖いという思いと触れたい、乗りたいという願いが同居していることを意味している。指導者はその葛藤を尊重し、それを理解していることを言葉に出して子どもに伝えてやることができる。これを通じて子どもは自分の葛藤が認められている人を知り、その人を馬に近づくための心理的な媒介者を選ぶことができる。そして、子どもの意欲に基づく安全の確認がすすみ、触れたい、乗りたいという願いが勝ったとき、子どもは最小限の援助で馬に触れたり乗ることを実現する。このような過程を経て、自分の意志で馬に触れ馬に乗った子ども達は、馬に対して信頼を寄せ、馬に自分の身体を預けることができる。

私たち人間の気持ちは、無意識にそのまま身体に表出するものとしてある。身体だけをあずけて気持ちをあずけないということはある得ず、その逆もあり得ない。こうした身体を通じての交流の体験や信頼の実感は、父や母に抱かれる子どもの体験や愛し合う同士の抱擁を除いて得ることはできず、犬や猫のような小さい動物では決して得られない。



(2) 馬に自分の意志を伝える – 自己決定と自己表現 –

子ども達により乗馬に対する意欲を引き出すため、馬に動いて欲しいならば自分で合図すればいいということを教える。自分の体を動かしたことが馬にとってどんな意味があるかを知ってもらうのだ。そして、前に馬を引っ張る人がいないロングレーンという方法で馬が操作されているため、より自分自身の合図で馬に意志を伝えていることを実

感させることができる。

このように自己決定に重きを置くため、子どもが背中に乗ったとたんに馬を動かしてしまっただけでは意味がなくなってしまう。また、動かしたくてもなかなか合図を出せない子どもに対しても、何十分かかろうとも不動で待機するように馬も調教されていることが条件になる。

(3) 馬とコミュニケーションする – 共感する体験 –

何回か障害を持つ子ども達が馬に乗っているのを見ると、子ども達が馬上で口をあけている情景がよく見られる。これは、普段、自分の力で動きまわること風を感じることができない子ども達が、馬上で、口に風が入ってくる感じを確かめたり、たてがみがなびいているのを見たりして風を感じ、馬と一緒にいるんだという共感を得ているのだ。そうした一体感を感じた子は、降りた後、馬に「疲れたでしょう？」と声をかけたりする。

こうした馬とのコミュニケーションを大切にしているため、騎乗だけではなく馬を引いてもらうことも行う。馬と一緒に歩くということは、馬の歩調に合わせなければならない、すなわち他の存在に自分が合わせるという活動である。初めは小さなポニーから始めて、大きな馬でできることを目標にする。このなかで馬が糞する場面に遭遇することもあり、この体験から馬に対する親近感をもつ子どもも多い。実際、この馬糞に強い関心を示す子ども達は少ない。

(4) 様々な活動に挑戦する

– 意欲の具体化と自信の獲得 –

何回か馬に乗ると、今度は速く走りたいとか、子どもによっては背中に立ってみたいといったように、様々なことに挑戦したいという意欲が出てくる。乗るということ自体が、大きな挑戦であるが、乗った後の活動も一つ一つが本人の挑戦であり、それを経験し、成就感をもつことが大きな自信になっていく。自立歩行の困難な子が、馬に乗り馬が歩行することによって自分で歩いているのと類似した経験をすることができる。この活動体験を通じて、自分で動く実感を得ることができる。

馬に乗ることに関して、大きな馬を自分が支配して動かすという実感が、喜びと自信につながるという考えもあるが、支配・非支配の関係でとらえることが子どもと馬との関係にどのように影響するかについては検討が必要である。自分が体を預けている相手に共感性をもつという側面が重視される必要がある。

(5) 他者と助け合う、協力する – 社会性を育てる –

他者と助け合うという体験をさせるため、乗馬の活動のなかにそうした場面を意図的に工夫していくことができる。

例えば、二人の子どもを馬の上に乗せて、後ろの子に立ってもらったり、馬の上で前と後ろと入れ替わったりする。これを行うためには、前の人の肩に捕まったり、お互いの体を支え合ったりして助け合わなければならない。日常では協力的な態度がとることが難しい子どもも、馬に乗りたい、馬の活動をしたいという意欲を強い動機として、相互に協力する行動をとり、そのうえでの達成感を共有することができる。

このことは、馬上だけでなく馬にかかわる様々な作業をする上でもいえる。馬糞を一輪車で運ぶ場面において、一人では困難なことも複数で協力してやれば簡単にできる。

(6) 指導場面に見られる様子

上述したような考え方のもとに指導場面について、実践をもとに述べる。ポニーを用いた実際場面については、末尾の参考資料に掲げた。

<対象>

- ・脳性まひによる肢体不自由のある子どもたち
- ・自閉症といわれる子どもたち
- ・知的障害があるといわれる子どもたち
- ・筋ジストロフィー症の子ども

<結果>

- 1) 子どもによって緊張の様子が違う。
 - ・はじめから緊張を示さない子
 - ・特に、肩と下肢に緊張を示す子
 - ・足首を馬の腹部に巻きつけるようにする子
 - ・両足を前に突っ張って、馬の首を締めつけるようにする子
- 2) うまく乗っていようとする（気持ち良く乗ろうとする、落ちまいとする）ことから、馬の動きと同時に馬上にある自分の身体に意識を向け、自分の身体の状態や動きを調整することに意識を集中するように見受けられる。教育の領域で子どもたちを指導する立場の人間にとって、このような経験こそさせたいと思う内容であるが、他の活動ではなかなか難しい。
- 3) 常歩で約200 m程で身体にみられる緊張がかなりほどけてくる（自分で解放する側面、結果的に解放される側面、介助によって解放される側面とがある）これは、足首、大腿部下（膝頭の上）を介助してやることで円滑に実現できることがある。
- 4) 常歩で100～150 m移動する間に「ボーっとするような全体に弛緩した表情になる」子と、「笑う、独り言を話しはじめる」子がいる。これは、心理的なリラクゼーションと身体的なリラクゼーションが同時に実現していくことによっていることが考えられる。
- 5) 子どもの状態像によって馬体の大きさを選択する必要がある。また、歩様を調整する必要がある。

6) 乗ることの楽しさと課題化とをどのように組み合わせるかの判断が重要となる。指導する側がたてた課題の実行にとらわれれば、乗りたいという子どもの意欲は逡減するし、乗りたいという意欲を放置して本人の活動に任せれば、活動は行き詰まって、その意欲自体も結局逡減したり喪失してしまう。特に、身体の動きに気づいて制御する、馬の動きと自分の身体とを統合的に調整する、また他者と協働して取り組むといったことについての課題は、指導者が子どもの意欲の具体化として意識できるような活動をどのように提案し組み立てるかが重要になる。馬に乗ることを中心的な活動にしたセッションの組み立てでは、馬との出会いから騎乗、馬を感じる、課題を行う、休息を取る、課題を行う、馬・セッションのプロセスを振り返る、馬から下りて馬を感じる、といった要因を子どもの意識の集中の度合いや身体の疲労度を見ながら組み合わせることが重要である⁵⁾。

7. 指導上の留意点

(1) 「最小限で最大限の援助」

もっとも大切にしなければならないのは、子ども達、本人のもつ「馬に近づきたい」「触ってみたい」「乗ってみたい」「動いてほしい」「もっと速く歩く馬に乗りたい」といった行動への意欲である。これを、子どもの手を引いて馬のところに行き、身体を持ち上げて馬の背にまたがらせた場合、本人は乗せられたと感じるだけである。本人が願い、自らの意志で乗ったことを実感する機会にするためには、子どもに対する援助は最小限のものでなくてはならない。もちろん、援助が足りなければ本人は意欲に基づく行動を達成できない。従って、援助は最小限であると同時に最大限でなければならない。この、最小限で最大限の援助のラインをどう見つけるかが、子どもの意欲に基づく学習を最大に重視する心理・教育的アプローチにおいて重要なポイントになる。

(2) 「乗りたい、もっと乗っていたい、また乗りたい」

「馬と一緒にいたい」「馬に乗りたい」という気持ちは、乗る前日あるいは、馬のところに行くということを子ども自身が知ったときから始まっている。従ってこの意欲をどのようにより膨らませるか、逆に萎縮させてしまうか、教師や保護者ら周りにいるおとな達のかかわり方にかかっていると良い。また、「もっと馬と一緒にいたい」「もっと乗っていたい」という気持ちは、実際に馬と接していたり馬に乗っている間にどのような体験をし実感をもっているかにかかっている。そして、また「この馬のところに来たい」「またあの馬に乗りたい」という気持ちは、これらの多くは指導者の考えと具体的なかかわり方に拠っている。

不適切であれば、子ども達は飽きたり意欲を失って嫌になってしまう。意欲は、それ自体は教えることができない。子ども達が自分の行った活動に対して達成感を感じ、再びやりたいと感じたりもっと先のことへ挑戦したいと願うためには、援助と活動をどのように組み立てるかを工夫し、実践を振り返ることしかない。

8. 馬という動物のもつ特性

攻撃力を持たない集団の動物である馬は、一頭が感じた危険性を他の馬たちは即時に感じ取り、外敵を回避する行動に移す必要がある。すなわち、他の個体の感情の動きに対して非常に敏感で繊細にできている。この馬の特性、メンタリティが治療的乗馬を行ううえで大きな意味を持っている。

9. 我が国での課題

実際に馬を用いた指導を受けたり乗馬の体験をした子どもの保護者に感想を求めると、日常には見られない活き活きとした子どもの表情が見られる、他の訓練では得られないような身体がリラックスする結果が見られた、他の活動では見ることが希な他者と協力する様子が見られたなどの記述が多く見られる。学校外の活動として現在各地で馬との触れ合いや乗馬を展開しているグループの多くが障害のある子どもの保護者の主催や支援によるものである。この領域はいずれ少しずつ日本に広がり定着して行くと考えられるが、我が国でこの領域が普及していくことに関する現時点での課題は、

- (1) この領域を取り扱う専門家の育成
- (2) この領域に用いる馬及び調教者の育成
- (3) この領域を展開していくための場所の充実と拡大
- (4) この領域に関する社会的な理解

の4点に集約される。今後この4つの課題が解決されて実践が行われる地域で質の高い内容が開発されること、各地で行われる実践に関する情報や知識・技術が交換される場が工夫されること、学術的な検討が行われていくことを通じて全国に広がり定着していくことが期待される。

またこの馬を用いた対応は、障害のある人々だけでなく、社会的な不適応の状態にある人々、高齢者や精神性疾患のある人々に対する実践と効果が確かめられ、発展・普及していく可能性を持っている。

【引用・参考文献】

- 1) Riede, Detlev: Therapeutisches Reiten in der Krankengymnastik, Pflaum Verlag Muenchen, 1986
- 2) Kluewer, Barbara: Der Einsatz des Pferdes als

Medium Selbsterfahrung im Kontext psychomotorischer Entwicklung und Therapie, 1994

- 3) Heipertz, Wolfgang: Therapeutisches Reiten - Medizin, Paedagogik, Sport-, Franckhs Reiter - bibliothek, 1977
- 4) Strauss, Ingrid: Hippotherapie - Neurophysiologische Behandlung mit und auf dem Pfeld, Hippokrates, (al.) 2000
- 5) Schulz, Marietta: Reituebungen mit paedagogisch relevanten Inhalten (in.) Partnerschaftlich miteinander umgehen FNferlag der Deutschen Reitlichen Vereinigung, 1997

【参考資料】

ポニーを用いた指導の進め方

○ どのような子に乗せるかですが、馬の体高と子どもの身長・体重を考慮することが大切です。ポニーの歩幅がせまくテンポが早いと、子どもによっては身体的な緊張を来します。そしてこれは、心理的な緊張をも引き起こす結果ともなります。

また、ポニーの背中が尖っていたり狭い場合も同じです。もちろん鞍が不安定でも同じことが起こります。

○ 子どもが自分からポニーに近寄り、声を掛けたり触れるのを子どもに無理がないように援助してやります。

○ 「子ども自身が馬の背にまたがる」ということを尊重しましょう。「乗せてもらった」あるいは「乗せられてしまった」と感じるのと「自分で乗った」と感じるのでは、成就感が大きく異なります。そして、その後の活動に対する意欲も大きく異なってきます。

○ 馬の背にまたがったときというのは一種独特の感じが沸き上がってくるもので、それを子どもが味わうのを大切にしています。子どもによっては、鬣を撫でたりおしりのほうに手をやる子どももいるでしょう。すぐに発進させようとせず、子どもが馬の背を味わう様子をしばらく様子を観察してみるとよいと思います。

○ 子どもが発進したいという気持ちになっているかどうかは、様子から窺い知ることができます。それを確かめ、出発の合図を教えます。私たちは「ハイ」と声を掛けるよう教えています。ハイと言える子もいれば言えない子どももいますが、本人の中に言おうとしている様子が感じられる場合にはそれを待ってやり、不明確ではあって

もそれらしい様子の変化が感じられた時には、こちらが「ハイ」と言ってやり、発進します。言えない子どもの場合でも、何らかにそれに変わる仕草なり何なりをするものです。これを待ちます。どのぐらい、どう待つかは、指導者の感性が問われるところです。

○ ポニーの大きさによっては、子どもの安定した姿勢を保ったり、スムーズに不要な緊張が解けて行くのを支援するために指導者が足首を手で保持してやるのが、高さからして困難です。心理的な緊張から足を前に突っ張ってしまうような状態であれば足首を持ってやるのが援助になりますが、おおよそ、膝に手を置く(膝の内側から支える)のと腰に手のひらをあててやるのとで十分な場合が多いように思います。

○ 初めて乗ることを経験する子の場合、ポニーが歩き始めると、揺れに対する不安から脇についている指導者に上体を預けてくることがあります。さらに、指導者の首にしがみついてくることもあります。このような場合は、不安から子どもが降りてしまうということがなさそうな限り、そのままポニーをゆっくり一定速度で動かし、子どもにはするがままにさせます。きちんと調教された経験豊かなポニーであれば、合図によって必要に応じた速度を選んだり身体を指導者側に寄せてくれます。そのほうが安心すると思われるのであれば、子どもの腰やウェストの辺りを抱いてやってもいいと思います。多くの場合、40～70mの距離で本人に不安が無いことがわかり、

しがみついていた手をゆるめてくるものです。この時も無理に手を離さず、指導者の身体を馬の背中の中心に近づけることによって本人の姿勢を立て直してやります。そして、本人の様子を感じながら、少しずつ両手で子どもの体幹部を支え、同時に指導者とは反対側の手からサドルやサドルホーン、ハンドルに移していきます。

○ 子ども自身が、乗っているという実感を確かめるためには本人が鞍に馴染んだ少し後に馬を止めてみるという方法があります。この場合も、「あの角を曲がって少し行ったところで一度止まってみようか」と提案して見通しを伝え、本人に気持ちの準備をしてもらいます。馬が止まった時、子どもは指導者ほうを見つめるかもしれません。その時の表情から、子どもがどんな感じで乗っているかを感じ取ることができます。

○ 乗っている子どもの様子を観察し感じ取り、不安感がなくなってポニーの振動を感じて楽しめるようになってきたことが感じ取られたら、一旦休憩してみることをすすめます。もしもう少し乗っていたいという希望を表わすようであれば、あとわずかな距離を行って戻り、休憩することを提案します。これは、馬に乗っている感覚について明確な意識が向けられた状態を、馬から下りて休憩することを通じて一度確認し、その感覚をもう一度確かめたい(乗りたい)という動機づけとなることをねらいとしています。疲れるまで乗ってしまったら、この感覚を確かめることは難しくなります。

障害のある子どもの教育素材としての「馬」がもつ可能性

加藤 守松

(愛知県立名古屋養護学校)

はじめに

私は、大学時代の四年間に馬術部に所属していた。さらに、就職し知的障害養護学校に赴任した後もたびたび馬場に通り後輩の指導にあたってきた。結果として約10年の乗馬経験であったが、馬術部での活動を通して馬場馬術や障害飛越の技術、馬の飼育管理等についてそれなりに知ることができた。

平成5年に国立久里浜養護学校に赴任し、隣接する国立特殊教育総合研究所で取り組まれている「乗馬療法」にかかわるようになった。自分の経験からすれば、初心者で馬術を始めた場合常足から駈足まで含めて二蹄跡運動を一通り自分でこなせるようになるまで大学生でも3年間はかかる。当初「乗馬療法」なる言葉も知らず、高度にバランス感覚の要求される、複雑なスポーツとしての馬術しか知らなかった自分は障害のある子どもがどのように馬に騎乗するのかとても興味をもった。

ここでは、乗馬の経験者として、また、障害児教育にかかわる者として「馬」がもつ可能性について考えたい。

1. 「乗馬療法」の取り組みと自分の役割

国立特殊教育総合研究所での馬を使った指導にあたっては、中半血種の大型の馬一頭（体高約150cm）と小型のポニー（体高約110cm）の二頭を中心に行っている。また、必要に応じてさらに違う馬を用意する場合がある。活動場所としては、約45m×約20mの平地での角馬場を想定し、各隅角にポイントを置いて運動の際の目当てとする。

中半血種の大型の馬には軽乗鞍を使用し、ロングレーン



(長手綱)による後ろ手綱によって馬を制御する。指導者は、騎乗した子どもの左右にそれぞれ一名ずつ馬と平行して歩行する。そこで、子どもの状況に応じて手をつないだり、足を支えたりしながら課題を提案していく。私は、ロングレーンを持ち、馬の直後に立って馬を制御していく。

子どもに提案される具体的な課題は、左右を平行して歩く指導者から口頭であるいは、身振りなどでやり取りされる。馬の制御者としての私は、指導者からの要請により、必要に応じて歩度を変えたり、巻乗りをしたりして馬に運動を指示していく。

活動は、土曜日と日曜日の二日続きを基本として行い、子どもたちは自分の予定された騎乗時間に保護者と一緒に馬場に集合する。一人の騎乗時間は、一日2セッション（間に休憩を入れて二鞍）全体で一時間は越えない。一回のセッションは、20分程度を目安に行われ、①馬との出会い、②騎乗および運動、③騎乗後の馬とのかかわりにより大きく構成される。

(1) 馬との出会い

馬との出会いでは、子どもが馬に注意深く近づき、馬の肩や胸を手で触り言葉をかけながらあいさつをする。顔を近づけて匂いをかいだり、馬の目を覗き込んだりする子どももいる。馬の大きさに驚いてなかなか近づけない子どももいる。指導者は、馬との出会いでは、子どもの気持ちをその様子から読み取りながら主体的に活動できるように静かに見守る。また、こうした時間をかけた馬とのやりとりと触れた子どもの体から子どもの騎乗に対する意欲やその日の体調などを読み取っていく。もちろんその場限りの実態把握にとどまらず、その子の過去の騎乗経験との比較、その場にいたるまでの生活の様子までを保護者からも聞いて把握しておく。

馬の制御者としての私は、ここで以下のような配慮をしている。まず、馬をその場で動かないように留め置くことである。子どもによっては、声を上げたり、急に駆け寄りたりして馬に近づく場合がある。また、不用意に馬の斜め後方から接近することもある。指導者が馬と子どもの間に入って配慮していても、突然の物音や周りの人の動きに馬がまったく動じないとは言えない。前足で地面を掻いたり、腹についたアブを追い払おうとしたりすることもある。体重800kgを超える馬体であり、馬に悪気がなくてもそのわずかな動きに子どもが接触したら大変である。いつでも子

どもたちが安心して馬に近づけるように、特に馬の足もとの動きには目を離さず、足を踏みかえることすらないように細心の注意が必要である。また、長時間の活動に馬が集中力を失わないように絶えず言葉かけをしたり、尻を愛撫したりして励ましている。

(2) 騎乗および運動

騎乗および運動では、子どもが指導者により抱き上げられて馬の背にまたがる。自分から軽乗鞍のハンドルを持ち半ばよじ登る子もいる。特に股関節が十分に開かない子には、足首や膝頭などに指導者の手をあてて時間をかけて馬体になじませていく。次に子どもの発声や挙手により馬を発進させる。運動は、角馬場内の蹄跡を常歩で前進することを中心に直径8mの小さな円を描く巻き乗りや停止、斜め手前変換や半巻き乗りなどを行う。さらに、子どもによっては、速歩も部分的に取り入れる。こうした運動をしながらも子どもたちは、馬の背中でおお向けに、後ろ向きに、横向きにさまざまな姿勢変換を行い、両手をハンドルから離し水平に広げたり、平行して歩く指導者と手をつないだりとさまざまな課題に取り組む。

馬の制御者としての私は、ここで以下のような配慮をしている。まず、発進にあたっては、子どもからの合図を受けてゆっくり丁寧にまっすぐ馬を進めることである。特に初めて馬に乗る子どもについては、緊張感が強いのでゆったりとリラックスして進めるようにする。その後は、子どもの側方を歩く指導者から馬に与えられる指示を的確に馬に伝えることが大切であり、必要な速さでタイミングのよい運動を馬に求めていく。基本的に馬の後方から子どもの背中を見る位置にいる私は、子どもの左右への傾き加減を一番知り易い。また、馬によって揺さぶられる体幹部の様子からその子の緊張具合を読み取ることができる。そうした情報は、素早く指導者に知らせることも必要である。また、子どもの様子を見ながら歩度を次第に伸ばして、できる限りいつもリズム感のある馬の反動を提供できるように心がける。蹄跡行進や円運動については、直進性やゆるやかな減脚や停止ができるように配慮が必要である。

(3) 騎乗後の馬とのかかわり

指導者の援助によって子どもたちは、馬上でたてがみや、首すじをなでたりしてから下馬する。子どもたちは、騎乗する前と同じように自分なりの方法で馬の体に触れてその労をねぎらい、保護者のもとに帰っていく。

馬の制御者としての私は、ここも騎乗する際と同様に子どもたちが安心して馬の周りにいられるように配慮をしている。こうした、一回のセッションを一人につき二回、一日8人程度を二日間行う。十分調教された馬ではあるが、馬にも感情があり、体調もある。したがって、馬のしぐさ

や歩様を十分観察し、言葉かけや手綱による指示への従順さを絶えず読み取りながら馬を制御する。できる限り馬を疲労させないように、また、甘えさせないよう時には厳しく接していくことが大切である。

2. 馬の特性

今までに「乗馬療法」の取り組みとロングレーンで馬を制御する自分の役割を中心に述べてきた。しかし、こうした療法的な馬の活用以外にも障害者乗馬やスポーツとして馬術がある。いずれにしても一般的に馬術といわれる馬の調教と飼育管理が基本にあり、その上で乗馬療法や障害者乗馬などのジャンル分けができると考えられる。そこで、馬の調教と飼育管理について考えることで、馬の特性を明らかにし教育素材としての可能性を探ってみたい。

(1) 馬の種類と調教

馬術とは、人間の何倍も体重や力のある馬を自分の意思のままに操ることである。競技としては、決められた規定運動をこなす馬場馬術や障害を飛ぶ障害飛越、さらに両者を組み合わせた総合馬術が主にある。それぞれ馬の調教の程度や騎乗者の技術により各競技とも難易度に差異があり、より細かな競技種目が競技会において設定されている。騎乗者と別な意思をもつ生きた馬にまたがり、ある時は助けられ、また、ある時は励ましながらもいわゆる人馬一体となって運動をこなすことに馬術の面白みや楽しさがある。

そこでこうした馬術で大切なのが、まず馬の種類であり、馬の調教程度である。馬の品種の分け方については、いくつかあるが、おおむね軽種、重種および在来種などに分けられる。軽種には、競馬に使われるサラブレッドやアラブなどがあり、重種はベルシュロンなどの大型の挽曳馬がある。在来種には、木曾馬や対馬馬などがあり、他にもいわゆるポニーとよばれる小型の馬もいる。それぞれに体の大きさや足の運び方、気性に品種としての特性があり、乗馬に適するものも限られている。したがって調教により、歩様や馬体の柔軟性がより伸長したり、改善されたりはするが、その馬の本来の持って生まれた天分はある。馬場競技に向く馬もあり、障害飛越競技に向く馬もいる。

乗馬療法においても、騎乗者の体格や技術にあった従順な馬が一番に求められる。つまり馬の体高や馬体の幅、歩様による反動の違いは、騎乗者の股関節の開き具合や求める課題に大きく影響する。さらに、乗馬ともなれば、馬の調教の程度によりこなせる運動が異なってくるが、脚や拳の動き、さらに騎座による複合的でより高度な扶助が騎乗者の技術として求められる。

(2) 馬装と基本的な運動

馬に乗るためには、鞍を置き、水勒などの馬具をつける馬装を行う。鞍や勒なども馬の大きさ、求める運動などによりさまざまな種類があり、必要に応じて組み合わせで使用している。いずれにしても、馬装の前には、馬体にブラシをかけて毛並みを整え、鉄爪で蹄底に詰っている異物を取り除くなどの準備が必要であり、運動をした後の手入れも同様である。さまざまな道具を蹄や馬体の部位に応じて扱っていく。また、馬にもさわられて不快な箇所もあり、馬の挙動を絶えず読み取りながら、言葉がけをしながらかわっていかなければならない。

馬場馬術における基本の運動としては、常歩、速歩、駈足の歩度の変換、発進、後退、停止などの移行、半輪乗り、輪乗りがある。さらに肩を内やハーフパス、後肢旋回などの二蹄跡運動、踏歩変換などより高度な運動もある。これらの運動は、調教として適正な衝撃による屈とうと馬体の柔軟性、前進氣勢の養成をめざして行われる。また、こうした運動を基本にして障害飛越などの運動につなげて行く。その他にも徒歩で行う引き馬や調馬索運動もある。

これらの活動は、馬の調教として行われる側面と騎乗者の技術習得の側面とがある。また、教える側であり、教えられる側の関係を越えて馬と人が互いに相互作用を及ぼしている。そこでは、単に技能的な扶助のやり取りだけでなく、情動を含めた感情的な意思のやり取りが騎乗者と馬との間でなされている。

(3) 馬の飼育

馬術を広く捉えるならば、適切な調教と厩舎での飼育管理を含めることができる。馬が、生き物である以上毎日の水与や飼付けなどの厩舎作業、病気やけがへの対処などの馬体管理も大切である。馬を制御する技術ばかりでなく、馬の生理や習癖を十分知って不必要な事故やけがが起きないように互いに快適な関係を作り出すことも大切である。

厩舎作業では、馬が馬房の中で快適に過ごせるように馬の糞を取る（ポロ取り）や寝薬を干したり、あるいはおが粉を入れたりをしなければならない。引き馬や放牧など適切な運動と清潔な馬房環境は生き物である馬には欠かせない。馬が馬房内にいる時も絶えず声をかけながら蹴癖や咬癖に注意しながら行わなければならない。疝痛や跛行など馬がかかりやすい疾病についても日々の生活の中から事前に把握し、獣医師や装蹄師と連携をとりながら対処していく。

3. 教育素材としての可能性

ここでは、自分の経験を踏まえて障害のある子どもたちにとって馬がどのような可能性をもっているのかを考えたい。

(1) 肢体不自由のある子どもにとって

不規則に揺れる馬上では、適切な指導者の補助により、腰を中心に体幹部をバランスよく自分で支えることが求められる。乗馬療法としてかかわる馬には、バルーンや固定遊具、感覚遊具では味わうことができない前進氣勢のある加速度を伴った前後左右の揺れを利用することができる。さまざまな大きさの馬を用意することで子どもの体格や股関節の状態に合わせることができる。常歩や速歩などのリズムカルな反動や巻き乗りや半輪乗りでの遠心力、停止や発進の際の加速度を組み合わせる運動することは、まさに生きた馬でしか体感できない。馬上で無理なく楽に乗れる正しい姿勢は、歩行動作の上肢のバランス感覚に近いと考えられる。馬に乗っていたと思う子どもの気持ちを育てることで結果として姿勢動作が変化してくる。適切な指導により股関節の緊張を軽減したり、こう縮した足首をゆるめたりすることができる。

指導者から子どもへの課題は、提案として言葉や身振りにより伝えられる。子どもは、馬上で揺れに対処しながら自己決定し、課題をこなそうと身体各部を意図的に動かそうと努力する。こうした馬の動きを介したやりとりは、子どもと指導者、子どもと馬との関係を通してコミュニケーション能力の向上にも結びついている。重度で肢体不自由のある子どもたちにとっては、特に乗馬療法としての丁寧な馬のかかわりが有効ではないかと考える。

(2) 知的障害のある子どもにとって

知的障害のある子どもたちにとっては、馬に騎乗するばかりでなく、馬装や厩舎作業などのかかわりも場合によっては有効である。前述のように馬術には、調教以外にもさまざまな作業場面が展開される。大型動物としての馬を扱うため配慮や制限はあるにしても、生き物の世話をすることは有意義であろう。特に、自閉症といわれるコミュニケーションに課題のある子どもたちにとっては、馬とのかかわりにより新たな側面をひきだす可能性がある。すなわち、馬に騎乗することが感覚遊具としての楽しみを含むこと、人でも物でもなく、愛着関係の対象として馬にかかわることができるからである。えさを与えたり、ブラシをかけたりするさまざまな場面は、うさぎや小鳥などの小動物の飼育と変わることはない。しかし、その背中にまたがることができ、手綱や脚などの扶助を通して複雑な運動までこなす事ができるのは馬でしかできない。馬に乗りたいという意思や馬への愛着関係は、すべて馬にかかわる指導者を通じて騎乗場面や厩舎作業場面で育てることができる。具体的で目的をとらえやすい馬にかかわる活動は、知的障害のある子どもにとっても取り組みやすいのではないかと考える。

4. ま と め

自分の経験を通して教育素材としての馬の可能性について考えてみたが、障害のある子どもが馬に乗るためには解決しなければならない課題も多い。まず、どこで馬に乗るかであり、指導者はどうするのか、金銭的な問題はどうかである。現在では、乗馬クラブの数も多く、RDAJapanの援助を受けながら障害のある子どもを馬に乗せることに取り組んでいる所も少なくない。しかし、それぞれにふさわしい適切な調教を受けた十分な頭数の馬をそろえられる乗馬クラブは少なく、試行錯誤の中で馬に乗せている所も多い。障害のある子どもたちを十分理解し、馬の特性を知った上で補助や指導ができる人も乗馬クラブではまだまだ少

ない。

学校として馬に乗る活動を取り入れているところも出てきている。騎乗する場面から厩舎作業までの多様な馬にかかわる活動のどこの部分を利用し、教育課程の中でどのように位置付けていくのかも各校独自に工夫をしているのが現状である。

馬にかかわるためには、解決しなければならない課題が多い。しかし、障害のある子どもにとっての「馬」は、いくつもの可能性を秘めている。今後も、地域の乗馬クラブをうまく活用していくことで障害のある子どもが家庭で、あるいは学校で馬にかかわることができる機会が一つでも増えていくことが望まれる。

馬を用いた取り組みにおいてより良い馬との関係を作るために

川 嶋 舟

(東京大学大学院農学生命科学研究科)
(獣医学専攻博士課程・獣医師)

はじめに

私たち人間が動物と付き合い良い関係を持つことによって私たちの生活やその質の向上に良い影響がもたらされていることは、今までに動物と付きあったことのある人であれば想像する事は難しくはない。ペットとして犬や猫を飼っている人たちにとり、犬や猫が生活をともにしてくれていることで私たちの生活が豊かになり充実したものになっていることは紛れもない事実である。

馬においても同じような効果があるのではないだろうか。しかし、現在の日本における馬の存在は、犬や猫のように決して身近な存在ではないことを考えると、初めて馬に接する人と馬とが良い関係を持てるようになるには、馬との付き合いをはじめの際に馬との良好な関係を築けるように配慮する必要があるだろう。

筆者は馬を対象とする獣医学の立場から障害のある子どもに対する馬の活用について関心を持ち、国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部の行う本研究に関与してきた。

本稿では、馬をhorse therapyをはじめ様々な取り組みに利用する際に、馬との付き合いをはじめの人が、馬とのより良い関係を築くために配慮すべきと思われることについて本研究にかかわって実施された実践を通して考察した内容の幾つかについて述べる。

1. 馬を理解し、馬との関係を深める

今日の日本において、馬との付き合い方や馬に対する認識や理解の程度は、人によって大きく異なる。馬という動物を全く見たこともない人・競馬中継をテレビで見たことがあるだけの人・観光牧場での乗馬体験がある人・乗馬クラブ等に通っている人など多種多様である。その中で、多くの日本人にとって「馬」というものを想像するときには、ほとんどの場合「競走馬」であることを忘れてはならない。また、現在の日本では、馬というものを実際に見たり触ったりしたことのある人は決して多くないのが現実で、大部分の人にとって馬という動物が身近な存在ではないことをしっかりと理解した上で、馬と付きあうことを考える事が大切になってくる。

馬を用いた取り組みをする際には、馬からさまざまな働

きかけを受ける人が、馬と良い関係を築き、馬を理解し、馬が好きになる事が大切である。初めて生きている馬と付き合いあはじめる人にとって、馬の大きさは、たとえポニーであってもとても大きく感じるであろうし、「いななき」などのちょっとした馬の動作もその大きさと存在を改めて実感させ、怖さや恐れなどを抱かせるきっかけとなりうるだろう。一般に、馬と付きあったことのある人の多くは、馬を好きになることは簡単であると思う傾向にあるが、はじめて付き合いをはじめる人にとっては必ずしもそうではない。馬を理解し安心して受け入れるようになるまでにはある程度時間を要するものであり、その段階をしっかりと経験する事がとても大切な事なのではないだろうか。馬をすぐに受け入れる事ができる人もいれば、様々な葛藤がありなかなか受け入れられない人もいる。周りの人は、その気持ちや十二分に汲んで対応する必要があり、決して無理強いをすべきではない。彼あるいは彼女にとって、自分の意思で馬との付き合いを納得しながら経験していくことが、これから馬と時間を共有していく際にとっても大切なことになるだろう。

2. 取り組みの日までに

取り組みの日の馬との関わりあいは、取り組みを行う前から始まっている。「今度のお休みにお馬さんに乗りに行こうね」とか「馬に会いに行こうね」などというきっかけづくりを御両親がしている事が多い。参加者も、あと何日で馬と会うことができるのだということを理解し、各々「馬」というものに対するイメージや気持ちを育み、取り組み当日の朝を迎えている。馬を目の前にする当日、参加者の持っている馬に対する様々な気持ちを解きほぐし、本人が納得した上で、馬との付き合いが始められるように、取り組みを行う関係者は心がける必要がある。

この取り組みに参加する参加者の多くが、年に1, 2回の活動であることや初めての参加者の方であることから、取り組みの当日に必ずしも全員が馬を受け入れられる状態であるとは限らない。馬との関わりあいがどのような段階にある参加者であっても、毎回安心してその人なりの馬との関わりあいができるようにする事が大切となる。いかにして参加者と馬との良い関係を作ることができるかが、その日行える取り組みの内容を決めてしまうことになる。

また、これから馬との付き合いをはじめ人の両親や兄弟をはじめとする関係者の方が馬に恐怖心を持っていると、不安な気持ちは確実に参加者に伝わり、参加者は素直に馬の魅力を感じることが出来る。したがって、もし両親等が馬に怖さを感じているのであれば、まずその抵抗感や恐怖心を取り除き、馬に親しみを持ってもらい、馬を好きになってもらおう事が大切である。

3. 取り組みを行う場所の環境

参加者にとって馬に関わる取り組みを行う活動の場所は、普段多くの時間をすごしている場所とは、異なった環境であることを留意すべきである。スタッフにとっては当たり前前の場所であっても、取り組みの参加者にとっては、なじみのない場所であることが多く、たとえ普段慣れ親しんでいる場所での取り組みであったとしても、全く知らない馬とそれに関係するスタッフはじめ多数の見知らぬ人がいることによって、異質の場所になる。私たちが、新しい環境に遭遇した時には、好奇心に刺激をされて興奮するとともに、未知の世界に対する恐れといった恐怖心も同時に心に持つことを想像できるだろう。また、未知の場所に警戒する気持ちが、馬に対して警戒する気持ちに置き換わらないように心がける必要がある。さらに、未知の場所をなるべく警戒させないような配慮をすることも大切である。

多くの参加者にとって、生きている馬たちを間近に見るのは、馬との取り組みを行う場所が初めてであろう。その人なりの馬に対する様々な気持ちを持って取り組みを行う会場に来た参加者をどのようなさりげなく迎え入れることが出来るかが大切なことである。そのために、取り組みを行う場所の雰囲気作りがとても大切となる。

参加者と馬との付き合いは、取り組みの日、馬のいる場所に着いた時から始まっている。参加者が会場に来たときに近づきやすく和やかな雰囲気であれば、参加者も緊張することなく、会場の中に自分の居場所を持つ事ができる。取り組みに関わるスタッフや見学者が、近づきにくい雰囲気を作ってしまうと、それだけで、様々な気持ちを持ってこの場所にきた参加者には、余計な不安要素を与え、馬に対する興味を失わせるきっかけとなりうるものである。会場に参加者が居場所を見つけやすいように心がけるとともに、参加者自身が他の多くの人に見られていることを意識させないように会場をつくることも必要となる。

4. 馬との関係を自分のペースで深める

この取り組みの参加者の多くは、馬に関わることははじめてであることが多く、実際に馬を見た時に、「とても大きい」とか「怖い」などの反応をすることが多い。

人は誰でも、新しく触れる動物に対して、最初は遠くから見つめ、だんだんと近づき、触ってみるという行動をとるものである。相手がどんなに調教しておとなしくしていても、はじめて接する動物に対する気持ちと行動は誰もが同じであろう。馬に対する恐れをまだ持っている時に無理に触らされたり乗せられたりしたら、どのような気持ちになるだろうか。結果的には笑顔をみせたとしても、少なからず心にわだかまりが残るものだろう。そんなわだかまりを持つことのないように参加者が馬との良い関係をつくるのが、理想的な結果をもたらすことになるであろう。

どんなにスタッフが馬に乗ることが楽しいことであることを知っているからといって、参加者が馬を受け入れてなくても馬に乗ってしまえばその楽しさがわかるはずだ、そして馬が好きになるだろうという気持ちで参加者に無理を強いることは避けるべきである。

つまり、本来時間をかけて行い自分自身で納得しながら次の段階に進んだ経験と、外部からの働きかけによって途中の段階を飛ばしてしまった経験とは、最終的に同じような結果を得られても、その後の成果には違いが出てくるものだ。

これから馬との関係を持つようとする参加者に対しては、その段階を一つ一つ経験することが大切なことであり、馬を受け入れる段階を一つ一つ丁寧に積み重ねることによって、馬を心から信頼し、馬とのコミュニケーションをするきっかけを見つけるのではないだろうか。

5. 馬との関わりあい方

参加者は、馬のしぐさや私たちがどのように言葉をかけて馬を扱っているか、周りの仲間がどのようにすごしているかなど、実によく自分の周りで起こっている物事を見ている。参加者の気持ちがいよいよなところに向いている中で、馬に興味を持ったときに上手に馬の気持ちを彼らに向け、対話ができるようにすることが大切である。

馬と関わりあう事は、馬に乗ることだけが目的ではなく、馬を見ることや接することだけでも十分な場合もある。馬に乗ることの楽しさや面白さを知っていると思わず積極的にその楽しさを経験させたいものだが、必ずしもそれが良いことではない。馬に乗ることを怖がって泣いている参加者を無理やり乗せてしまい、馬から下りる時に笑っているからいいというものでもない。自分の意思で馬に乗りたいたいと思う事、そして馬に乗ろうとするところまでに至る道のりが必要でありその気持ちを尊重すべきである。

馬が好きな人達も、今までに一度くらいは馬などの大きな動物の存在感の大きさに恐れを感じた経験があるのではないだろうか。その時の気持ちを思い出し、決して、無理強いをして馬との関係をつくらせようとする事は避けな

くてはならない。怖がっている参加者を無理やりに馬に乗せて、結果的に馬に乗る楽しさを覚えたとしても、「馬に乗ること」を強制されたという事実が、後ほどのような影響として出てくるのかも慎重に考えるべきである。

また、参加者本人以外の周りの人が馬を信頼して心を通わせていないと、はじめて馬を見る参加者や改めて馬との関係を作ろうとしている人は、安心して馬とのコミュニケーションを図ることができない。参加者に馬とのいい関係を築いてもらいたいのであれば、最初に、そこに関わる人たちが馬と良い関係になる必要がある。

馬の周りにいる人が、馬といるのが当たり前の雰囲気を作り出すことによって、はじめて参加者にとって、馬と良い関係を比較的短い時間で作り出すことが可能になる。大切なことは、決して強制することなく本人の意思や気持ちを尊重しながら馬に対する好奇心を最大限に引き出していくことである。

6. 周りの人の関わりあい方

馬に関わることによる最終的な目標は、「乗ること」や「世話をすること」など様々な内容を対象者に応じ設定することができる。また、それらの事柄を行うことが、本人にとって「楽しいこと」あるいは「嬉しいこと」などの理由で、自発的にかつ積極的に取り組めるようになることが望ましい。その際に、その最初の段階において、馬との関わりあい方を大切にしたい経験や積み重ねていく事が、途中で馬を拒否することなく最終の目標に達することのために必要となる。決して、強制されることなく馬に慣れ親しみ、本人が納得した上で、個々の馬との関わりあえるようにしていかななくてはならない。そして、馬との関係を徐々に作っていく間に、馬にとって気持ちの良いこと悪いことや馬と付き合う時に必要な約束事などを少しずつ過不足なく示唆し、本人に理解してもらうことが必要となる。その中で、参加者は馬を目の前にし、当日までに考えてきた馬と現実の馬との共通する点や異なる点を一つ一つ実感し納得しながら、馬というものを理解し受け入れるものである。その時には、馬が好きになるように積極的に働きかけるのではなく、本人が何をしたいのかを感じ取りその気持ちを尊重できるスタッフ側の心遣いが必要となる。

このことは、保護者の方についても同様である。保護者の方の多くは、馬というものを実際に触れたことはなくても、テレビの映像や写真集、新聞などで見たことはある人が多い。どんなに馬というものの頭で理解していようと実際に馬を目の当たりにすると、恐怖心や遠慮が出てきてしまう人もいる。保護者の方が、少しでもそのような気持ちを持っていると、それは、参加者に伝わり、参加者も馬に対して、同じように「怖い」などのネガティブなイメージ

を無意識のうちに持ってしまうことが多い。これは、馬に関わらず、他の動物との付き合いでも同じような例があることから分かる。参加者を安心させるためには、御両親をはじめ周りの関係者の方に馬を好きになってもらう事が必要である。

参加者は参加者なりの馬との付き合い方を見つけ出していくようになる。それが、馬に乗ることであったり、馬の手入れをすることであったり、引き馬をすることであったり、何でも良いのではないだろうか。彼らが、馬の存在を受け入れ、納得した付き合い方ができれば、その日一日の生活に満足し、それからの生活に深く関わるようになる。そして、次の機会により密接な馬との関わりを持ち、馬を前より受け入れられるようになり、前回できなかったことが出来るようになっていくのである。大切なのは、決して強制することなく、本人の気持ちを最大限に尊重しながら馬と付き合う環境を作ること、そして、スタッフがどの段階の人であっても、適切に馬との係わりあいを持つ事ができるように対応することである。

最終的には、馬に関わる人ともコミュニケーションをとる事ができれば良いが、最初は、その人なりに馬と付きあうことが目標となるであろう。得てして、このような取り組みを行う時には、馬よりも馬の周りにいる人の存在が目立ってしまうことが多く、これは良いことではない。これらの取り組みでは、参加者と馬が主役であって、あくまでスタッフは脇役もしくは黒子に徹しなくてはならない。それは、参加者が会場にきたときから始まっている。会場に来たときに馬よりも先に多くの人の存在が目に入らうだろうか。その人たちの目が自分に注いだらうだろうか。喜ぶ人もいるかもしれないが、不快感や不安を感じるの方が多だろう。いかに私たちが、さりげなく彼ら参加者が入りやすい雰囲気や環境を作れるかが大切である。

馬を用いた取り組みを行う際、参加者が会場にやったら優しく挨拶をしてむかえ入れることが大切である。参加者本人は普段と違うことをするので、少なからず緊張していることが多い。その緊張を感じさせないためにも、挨拶をして迎え入れることが大切である。取り組みに関わる関係者が多くと会場の雰囲気が悪くなり、後からやってきて会場に入ろうとする参加者にとって、非常に抵抗感を感じさせるようになってしまうことがある。会場に入る前から緊張したり嫌になったりしてしまえば、その日の取り組みが無意味になってしまう可能性もあるため、そうならないように配慮することが大切である。また、はじめて会ったときに挨拶をして気持ちをかけることも大切である。これを行うことによって、参加者が会場に入りやすくなり、より良い取り組みが行えるようになるのである。

関係者は、決して自己主張することなく、しかし、必要などときには必要なだけのサポートをすることが要求される。

場合によっては、参加者と馬との関係を上手に取り持ち、なんら積極的に働きかけることなくただ見守ることのできる暖かい気持ちと行動が必要になる。また、参加者が馬とのコミュニケーションをとる際には、傍観者であってはいけないが、積極的にしかし目立ちすぎることなくその場に関わる必要がある。

7. 無理することなく馬を受け入れる

馬と接する事が初めて人に対して、馬と仲良くなってもらう時には、その取り組みの関係者の多くは馬に乗ったときの楽しさを知っているためからか、得てして、本人と馬との関係が十分に出来ていなくても、無理に馬に乗せてしまう傾向がある。これは、馬に乗ったときに乗れたことを結果的に喜んで楽しんだとしても、馬という大きな動物に対する恐怖心を十分に解消していないため、突然馬や動物に対して拒否反応を示すことになる可能性を作っているのではないだろうか。

馬を直接見たり触ったりするのがはじめての人にとっては、馬を見ること、近づくこと、触ること、そして、親しみや怖さを感じるなど全てがとても新鮮で有意義な経験なのである。その中で一つ一つ感じたことを自分の心の中で十分に納得した上ではじめて、馬との良い関係をつくる事が出来るようになるのではないだろうか。そのプロセスを省くことは、将来、馬を突然受け入れられなくなるなど何らかの不幸な結果が突然出てくる可能性がある。このプロセスを大切にすべき事を、馬を用いた取り組みの場面に関わる人は肝に銘じる必要がある。

「泣いていたけれど馬に乗れて今は喜んでいいからいい」という結果だけがよければ問題がないということはない。馬に乗るまでの段階で、「泣く」「すくむ」など、すなわち、怖い思いをしていて、そのことに対する気持ちが整理は出来ていないままに、乗ることだけの楽しさだけを体験するだけで、馬を心から受け入れられるようになるわけではない。無理して馬に近づいたという経験は、これから関わりあいを続ける際に、馬から学べるはずのものが学べなくなってしまうことにつながる可能性を否定しきれない。これは、参加者にとっても馬や取り組みの関係者にとっても不幸なことである。そのようにならないように、関係者は注意深く配慮して行っていく事が必要である。

8. 二つの事例から

馬を用いた取り組みを行う際に考える必要のある事柄についていくつか紹介してきたが、最後に、私がこれらの取り組みに関わる際に思い出される事例を二つ紹介する。

(1) 馬を受け入れるまでの経過

Aさんは、馬の取り組みを行う前から、馬だけでなく動物に恐怖心を持っていて動物のそばになかなか近づくことが出来なかった。馬を用いた取り組みを行う場所にやってきたAさんは、やはり、なかなか馬のそばに近づくことが出来なかった。

時間が経つにつれて一緒にきた仲間が馬のそばで触ったり遊んだりしているのを見て、徐々に馬のいる場所に近づいてはきたものの、常に馬からある一定の距離を保っていた。仲間が抵抗感を持つことなく馬と接している雰囲気の中、彼は自分なりに納得しながら馬と近づくタイミングを計っていたようだ。自分の意思で徐々に馬に近づこうとするのだがやはり馬が怖くて後戻りしてしまう。しかし、すぐに馬が視野に入る場所に移動して、常に馬の様子を観察していた。しばらく馬の様子を見ていた後、馬のいない馬房の中に入ってボロを興味深く観察しているのが印象的であった。その後、馬房のそばにある丸馬場に繋いである馬のところに、私の呼びかけに応じ、自分の意思で馬の前にやってきた。しかし、馬に興味が出てきているものの、馬のいななきや尻尾を振るなどの動作に怖さを感じ、馬のそばによって触ることが出来なかった。その間も、近くの場所で行われている他の人が馬に乗っている取り組みの様子や馬の世話の様子などをじっと観察していた。しばらくの間、馬に触ることは出来なかったが、馬の様子を柵の間から観察している時に、馬の引き綱を柵越しに渡すと、馬の引き綱を私と一緒にであることを確認して手綱を手にとった。最初は、その場で引き綱を握り締めているだけであったが、こちらから「お馬さんと一緒に散歩してみない？」と呼びかけると、馬場の中に入ることは希望しなかったので、馬場の外から引き綱をもって馬と歩くことをはじめた。Aさんにとっては、そのことがとても馬を身近に感じさせたようで、それ以降、柵越しではあるがエサをやったり触ったりした。そのうちに、馬場の外からではあるが、Aさんが一人で馬の手綱を持つことを意思表示し、一人で引き馬をする事ができるようになった。その後しばらく馬との関わりあいを続けた後、丸馬馬場の中に入って馬の世話をできるようになり、最後には、実際に馬に乗ることもできた。取り組みが終わった後には、馬に対して心を許すようになっていたのが印象的であった。

その間、Aさんの両親は、無理にAさんを馬に近づけ触らせたり乗らせようとしたりする事がなく、また、馬に対して恐怖心を持っていなかったのも、Aさんの前で自然な雰囲気をもって当たり前のように馬と接していた。

本人にとって、周りから強制されることなく自分のペースで馬と付き合う事ができ馬との関係を作ることでできた事が、結果的に、馬に対する怖さが少なくなり馬が好きになって、不安な気持ちを持つことなく心から馬に乗ること

を楽しめたという結果につながったのだと思う。その後の取り組みでも、馬との取り組みをおこなう場所に来てからすぐに馬に触ったり乗ったりする事に抵抗を感じているようで、最初は馬をじっくりと観察して、本人の気持ちの整理がついてからでないと、自分から馬に近づいて触ろうとしないことも、毎回馬に対する気持ちの整理をする機会を作ることの大切さを考える事ときに、いつも思い出される事例である。

(2) 取り組みの際に使う言葉遣いについて

聴覚に障害あるBさんは、動物が好きで、馬に乗った経験もあった。しかしその後は、馬に乗ることを好まず、馬に興味を持つ事がなかった。ある時に本人が、「馬に乗るの時に自分の意思を馬に伝えるために馬のお腹を『蹴る』事が必要だと教わった。とても大好きな馬に乗るのに私は『蹴る』なんていう行為はできない。だから、馬には乗りたくない」と話してくれた。普段、馬と付き合う時に「蹴る」「たたく」などの言葉と行為を何気なく使っている事が多く、馬の取り組みを行う際も同様である。しかし、この

ように言葉に違和感を持つ人がいることも事実であると思う。このような事をスタッフは意識する事は少ないが、馬を用いた取り組みを行う際にこれらの言葉遣いや表現方法にも配慮できるようにする事が大切なことなのだという事を強く考えさせられている。

おわりに

馬を用いた取り組みを継続して行うことは、馬との関わりあいをはじめる人に、自分なりに試行錯誤しながら納得し自分のペースをもって馬を好きになり、馬との信頼関係を築いていく機会を提示することであり、また、馬をきっかけとして様々な事柄を経験することで結果的にその人の生活の幅を大いに広げるものになるのであろう。日本で馬を用いた取り組みが幅広く継続的に行われるようになり、馬が今まで以上に身近な動物になるとともに、様々な種類に馬たちがその活躍の場を持てるようになる日が近いうちに来ることを願っている。

第 II 部

Aさんの乗馬コース初挑戦	笹本 健
「馬」のもつ魅力と子ども達の活動	當島 茂登
ポニーを用いた特殊学級の子どもたちへの指導	飯島 友子
地域交流活動の一環としての乗馬	宮林 文代
馬を用いた活動導入の試み	鈴木 卓郎
養護学校における在来馬とのかかわりを活かした学習の試み	安川 千壽子
馬を用いた指導の開始と充実した展開のために	滝坂 信一

Aさんの乗馬コース初挑戦

笹本 健

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

1990年来、国立特殊教育総合研究所やその他の場所において年間2～3回程度の頻度で「治療的乗馬：乗馬の学習」の実践を行ってきた。近年、研究所における乗馬の学習では対象児・者の状況に合わせ、角馬場（長方形のフィールドにおいて、主として身体的側面や心理・教育的側面に働きかける）での実践と丸馬場（直径約16メートルの柵の中で、乗馬レッスンの形を取り、スポーツや趣味としての乗馬へと向かうかかわり）での実践を行っている。

1. Aさんの馬との出会いと経緯

Aさんは重度の発達遅滞（特に知的側面）があるといわれ、視覚的には近視性乱視と診断されめがねをかけている。歩行は可能であるが少し前屈みで、階段を上がる時や、ものをまたぐときの動きはぎこちなくなる。とても穏やかですなおな性格である。

乗馬の学習には初期の頃（1990年：当時15才）から参加しており、当時からの課題は馬に乗ることを通じて身体のバランス感覚や運動感覚を促進したり、サイドウォーカー（補助者）とのやりとりを通じてコミュニケーション能力の促進を図ることであった。すなわち、Aさんへのかかわりはもっぱら角馬場で行われていた。

初期の頃のAさんの乗馬の様子は、馬に乗せられることや乗っていることには拒否はしなかった。嬉しそうな声を時々出したり顔に当たる風のために少し顔をゆがめたりするが、全体的には、いわゆる乗せられたままの状態であり、表情も余り変化がなかった。

角馬場の各コーナーで方向が変わるたびに重心が外方向へとズレて、そのままにしておく不器用だと落ちてしまうといった状態であった。また、なみ脚（馬がゆっくり歩く歩容）が続くと飽きてしまうのか、自分から補助者に手をさしのべ、身体を預けながらその場で降りてしまうことが時々あった。

自動車に乗ることが好きのため、馬から下りた後は必ず駐車してある自動車へと向かっていった。さらに、乗馬へと誘う順番やタイミングがずれてしまうと、馬には近寄らずに車の方に向かって行くことがしばしばあった。

このようなAさんの状態が乗馬の学習において大きく変化したのは、1996年（平成8年8月）に福島県常葉町檜山

高原で行われた2泊3日の乗馬合宿以降であった。

そこでは、起伏のある斜面を利用して、なみ脚ではあるが変化に富んだ角馬場での乗馬学習や最終日には1キロメートルほどの乗馬トレッキングを行った。この時Aさんはとても楽しそうに馬から下りることもなく課題をこなしたが、特筆すべきは、補助者の声や腰付近に触れることによって注意すると時々ずれてくる重心を自分で直そうとする様子が見えだしたことであった。そして同年9月に国立特殊教育総合研究所で行われた乗馬学習では、角馬場における乗馬中に、ずれていく重心を自分自身で動いて修正することが頻りに現れてきた。

その結果、以前よりも乗馬の時間が長くなり、なみ脚から時々早脚を交えた学習が可能になってきた。早脚の距離は短いものであったが、声を出して笑い、喜んでいる様子が参加者全員に理解できるほどになってきた。

Aさんのこのような成長ぶりと保護者からの要望も配慮し、2001年9月（25才時）に行われた乗馬の学習会において、初めて丸馬場における通常の乗馬のレッスンという形式を取り入れてみた。

以下その様子について詳述する。

2. 丸馬場で起こったこと

Aさんは、この頃になると乗馬の順番を待てるようになり、こちらの声かけから手を持って誘導すると真っ直ぐに自分が乗るべき馬に近づいて行くようになっていた。今回も、いつも角馬場で乗っていたシャイアン（馬の名前）が角馬場にいるにもかかわらず、丸馬場で乗るべき馬（ポコ）へと手をつないで誘導すると、素直にポコへと近づいていった。

丸馬場の外でポコに乗ることとした。乗馬の際は、いつも保護者（父）も援助に加わるが、今回もポコに極めて自然な感じで乗ることができた。ポコにはウエスタンの鞍が装着してある。Aさんにとっては、鞍付きでの乗馬は夏の合宿以来である。ポコは引き馬にして、2人のサイドウォーカーがついた。（写真1参照）

丸馬場での課題は、馬の発進の合図を自分自身で意図的に行うこと（発進してほしいときに自ら馬に合図を送る）であった。同様な課題は、以前には「ハイ」と声を出したり、手を挙げたりすることであったが、今回はじめて両脚のかかとで馬の腹を軽くたたくようにするという動作を取



写真1 サイドウォーカー付きで常足

り入れてみることにした。

以前のやり方は、Aさんが合図を送ると御者が馬を発進させるというように、いわゆる間接的な発進の合図であったが、今回行う合図は、以前とは異なり直接的にAさんの合図(意図)が馬に伝わるという意味合いを持っている。

鞍付きでの乗馬になれるため、丸馬場内でポコを3週ゆっくりした歩調で回らせた。Aさんは心理的な固さもなく、極めて自然な様子であった。4週目に両手を広げてサイドウォーカーにゆだねるということを行った。これは、腰部でしっかりと馬の反動を受け止めながら乗るということを体験するための方策で、日頃乗馬学習でよく行われる手だての一つである。(写真2参照)



写真2 両手をサイドウォーカーにゆだねる

Aさんは「手をください」の声かけに素直に従い、両側のサイドウォーカーに手をさしのべ、そのまま乗馬を続けた。乗馬の状態はごく自然に腰部の動きが出ており、安定感があった。2週ほど回り、ポコを止め、サイドウォーカーをしているSはとて素晴らしい乗り方をしている旨をAさんに告げた。この時の発進の合図は以前と同じく、Aさんに「はい」と合図してもらった。明確な合図ではなかったが

Sには意図が伝わってきたので馬を発進させてもらった。

Aさんは両親の方が気になっているらしく、さかんにその方向に顔を向けるが、馬を下りようとする様子もなく、乗馬を味わっているといった感じであった。

次に、馬を止めてもらって「今度は脚でこうしてここをつつくようにすると、ポコは動き出すよ」と説明し、その脚の動きを両側のサイドウォーカーがAさんの脚を軽く持ち他動的に動かしながら伝えた。それから少し待つとAさんは小さく両脚を動かしたので、「そうそう」と声かけし、御者にポコを発進してもらった。(写真3、4参照)

さらに1周し、馬を止めてもらってAさんの両脚での合図を待った。この時サイドウォーカーにはAさんの脚の動は伝わってこなかった。さらにもう1周の後、Aさんに発進の合図を指示すると小さい動きではあるが、両脚での合



写真3 手を添えて動きを説明



写真4 「どう、わかった？」

図を行った。この時ポコは御者の合図(手綱を軽く引く)ではなくAさんの合図で発進した。

Aさんはポコが発進した直後に、「えへー」と嬉しそうに笑い、両親の方を見た。

この後、このような両脚での合図による一連の発進練習が5～6回繰り返され、いずれもAさんは上手に脚での合図を行うことができた。Aさんは発進の合図の意味を理解したようであった。

しかし、練習も終わりに近づいた時であった。ポコを止めた後、サイドウォーカーはAさんが当然行うであろう両脚での合図の動きを期待しつつ待っていたが、前回のようにはAさんの両脚の動きは出なかった(ようにサイドウォーカーには捉えられた)。そしてポコも止まったままであった。

ポコは耳を後ろ側に立て、合図される部位である脇腹あたりの皮膚を時々細かく痙攣させ、じっとAさんの合図を待っている様子であった。

この時、御者はかるく手綱を引いてみるが、ポコは動かなかった。

暫くその状態(静寂)が続いた。(写真5参照)



写真5 静寂の時間

ずっとポコが動いた(発進した)。

この瞬間、張りつめていた空気が緩み、再び引き馬での乗馬学習が始まった。

3. その状況の意味するもの (前述の点線内で記述されている状況)

当日行われた検討会で、この時起こったことが話題となった。現場に居合わせた全員が、ポコが動いたのは偶然とは言い難いとの見解であった。すなわち、サイドウォーカー等が外部から捉えられなかった何らかのAさんからのメッセージがポコへ届いたというのである。しかし、このことを科学的(客観的)に証明することは残念ながら今の時点では不可能である。

誤解を恐れずに、偶然とは言い難いその状況の背景について言及してみる。

丸馬場でのAさんの課題は、前述したように馬の発進の合図を自分自身で意図的に行うこと(発進してほしいときに自ら馬に合図を送る)であった。サイドウォーカーで指導者でもあったSはその手順をAさんに理解してもらいたいため、再三にわたり説明と実際的な体験を通しAさんに関わり、Aさんもその意味を理解したと思われる。

しかしながら、その状況から、上記のような関わりを機械的に反復するだけでは、実際にはAさん自身がポコに発進してほしいときに自ら合図を送るという課題へと向かうことにはなり得ていない、ということが示唆されるのである。

すなわち、両脚を動かさなかったのは、Aさんの意図(合図をしない：今は動かさない)であった可能性があり、当然Aさんが脚を動かすものと期待していたサイドウォーカーの思惑との齟齬が生じた瞬間であった、と捉えることができる。

私たちは、ともすれば私達自身が組み立てた指導の目標やそのための手順を唯一正しいものとして捉え、対象となる子どもや成人が、意図したことは異なった行動をとったとき、私達自身の見方や在り方を省みずに「偶然」であったかも知れないとか、例えば上記の場面では御者や馬の状態はどうであったか、というように他律的な要素(指導者自身の存在を排除した環境要素)のみを探求しようとする傾向がないであろうか。

乗馬の学習の場合、特に馬と子どもの「ことば」を超越した生の通じ合いの場面を大切にするためには、指導者の存在を指導者自身が常に振り返ってみるという基本的な態度と、それに基づき実際的な関わりから一步引いてみて、子どもの様子や馬と子どものやりとりを静かにうかがうことが重要かつ不可欠なことと思われる。

おわりに

10数年来、Aさんの事例だけでなく多くの様々な障害がある子どもたちとの乗馬の学習を行ってきた。その学習を通して確実に言えることは、全ての子どもたちが馬に対して大きな興味関心を寄せ、触りたい、乗りたいという心を持つ、ということであった。なぜそうなのか、といった探求についてはこれからの研究に譲るとして、このような状況を裏付けるであろう興味深い資料として、イギリスで4歳～14歳の子ども4200人に対して行われた「好まれている動物」に関する調査結果がある。この結果によると「馬」はチンパンジー、一般の猿、に続いてベストテンの3位に位置している(マンウォッチング～人間の行動学～デズモンド・モリスより)。

端的に、私たち（指導者）は馬の持つこのような子どもに対する求心力にすがって教育上のさまざまなアプローチを展開してきた、といっても過言ではないであろう。

さらに、「馬」は単なるコントロールされた「もの」としての教材では決してない、ということも指導上の大きな利点として挙げることができる。それは、「馬」にもいわゆる人格に相当するものがあり、そこに生じる相互交渉が子どもに対しても指導者に対しても関係を作り上げるという

実感をもたらし、指導もこの3者関係の中で成立すると言う点である。

今後、ドイツやその他の障害者乗馬の主要国における知見等も踏まえながら、乗馬の学習に関する具体的な展開の内容・方法についてさらに検討していきたい。

※ Aさんの事例報告および写真掲載については、内容を確認の上で保護者の了承を得ています。

「馬」のもつ魅力と子どもたちの活動

當 島 茂 登

(独立行政法人国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部)

1. はじめに

筆者は、1987年8月チューリッヒにあるてんかん病院(Schweizer Epilepsie Klinik)を訪問した際、案内してくれたDr.Nulerからその病院で乗馬療法を取り入れている話を聞いた。その時以来、乗馬療法に興味を持つようになった。この病院はチューリッヒ湖を眼下にできる丘の上であり、この場所にいるだけで癒されるような素晴らしい環境であった。馬場の中央に大きな木があり、その周りに円形状に大きな柵が設けられていた。あいにく乗馬療法の活動の様子を見ることができなかったのは残念であった。

筆者らは、平成12年度から3年間「障害をもつ子どもへの馬の特性を利用した指導に関する研究」に取り組んできた。この間に国立特殊教育総合研究所のグラウンドで実施された、馬を用いた演習に参加した5名の児童・生徒の活動状況を通して、馬と障害のある子どもとの関わりについて報告し考察したい。

2. 活動の実際

(1) 対象児童・生徒

1) 「スマイルの会」の子どもたち

馬を用いた研究所での演習に参加した4名の児童(平成14年度)は「スマイルの会」のメンバーである。「スマイルの会」は横浜市が行っている地域支援の事業で、保護者が中心になって活動しているダウン症の子どもたちのグループである。筆者は平成10年10月から月1回(土曜日)、ボランティア活動としてスマイルの会で親子ムーブメント活動を行っている。

2) 中学生の美香さん

美香さんは研究部の研究協力機関である中学校の総合学級(肢体不自由特殊学級)に在籍していた。現在(平成14年)は養護学校の高等部に在籍している。彼女は平成12年2月、本研究所の滝坂室長の「乗馬療法;『教育、療育における<馬>、<乗馬>の導入』について—奄美大島での可能性を探る—」講演を聞いた。それ以来、乗馬療法に強い関心を持つようになり、平成13年度に行われた研究所での馬の演習に参加した。

(2) 期 日

1) 平成12年度

- ① 期間：平成12年10月14日(土)、15日(日)
- ② 場所：国立特殊教育総合研究所グラウンド
- ③ 参加：「スマイルの会」として参加したSさん、K君、D君

2) 平成13年度

- ① 期間：平成13年3月26日(土)、27日(日)
- ② 場所：国立特殊教育総合研究所グラウンド
- ③ 参加：「スマイルの会」として参加したSさん、K君、D君と特別参加の美香さん

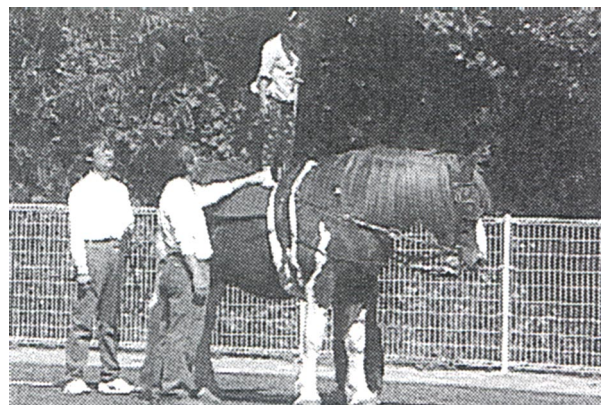
3) 平成14年度

- ① 期間：平成13年9月8日(土)、9日(日)
- ② 場所：国立特殊教育総合研究所グラウンド
- ③ 参加：「スマイルの会」として参加したSさん、K君、D君、J君

3. 活動中のエピソード

1) 積極的なSさん

Sさんは馬が大好きで、初回からやや興奮気味に馬との関わりを楽しんでいた。餌をやったり、馬をやさしくさすったり、話し掛けたりしている場面が見られた。大型の馬(シャイアン)に乗っても同様にやや興奮気味にはしゃいでいた。馬がゆっくり歩くのに飽き足りず、早く歩くように馬上で体を前後に揺らしているのが見られた。しかし、やがてしゃべらなくなり、動きも少なくなった。背中がスー



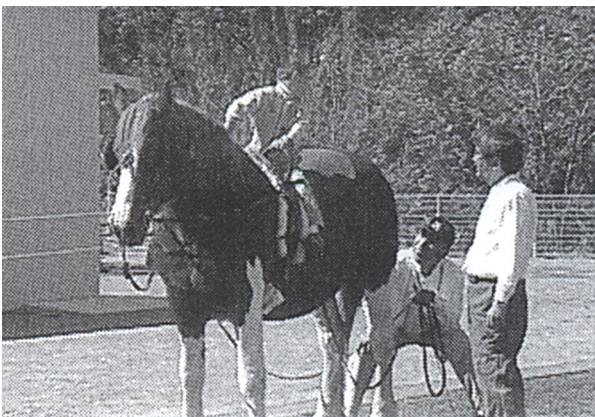
馬上で立位バランスSさん

と伸び、自分の世界に集中している時間があつた。馬上でボールを持ったり、後ろ向きに乗ったり、止まっている馬に立位になったりすることもできた。また、姉と一緒に乗ることもできた。

回を重ねるごとに、馬に乗る時の「あいさつ」が丁寧できるようになり、馬上での馬に対する合図も自分でタイミングよく出せるようになった。Sさんは馬の歩く速度を速くして欲しい時に体を前後に揺らすようになった。馬が早足になると表情が一段と良くなった。少しずつ馬とのやり取りを楽しむことができるようになってきた。馬上で手を上げたり、手を膝の上に置いたり、馬上でのバランスと姿勢(背筋が伸びている)がよくなるなど変化が見られた。

2) 引き馬から始めたK君

K君は最初の内は馬の大きさに驚いているようで、ポニーが入っている柵の外から見ていることが多く、促してもなかなか馬に近寄らなかつた。しかし彼の行動から馬には興味を持っているように見えた。馬との触れ合いや乗馬を初めて経験する時には無理強い禁物であり、指導者は柵の外からの馬との関わりを持たせるように工夫した。そのうち彼は指導者(獣医師)に餌を持たせ、その手を持って馬に餌をあげる場面が見られた。指導者は彼に対して馬に乗せることは行わず、柵の外から引き馬をしたり、柵の中に入って引き馬をするように指導を展開した。引き馬が気に入ったK君は、友達と替わるように促してもなかなかその指示を受け入れてくれなかつた。しかし時間が経つにつれて、次第にその指示も受け入れるようになった。少しずつ馬との関係がもてたK君は、お兄さんと一緒に大型の馬に乗る体験ができた。回を重ねた結果、引き馬や馬に乗る順番を理解するようになってきた。また、馬のことを良く知っているM君と一緒に馬のブラッシングをしたり、乗馬の準備をしたりなどの一連が行動を積極的にできるようになった。さらに、馬に乗る時に馬の正面から「あいさつ」ができ、馬上で手を横に広げたり、馬がコーナーを曲がる時に指示を出したりするなどの変化がみられた。



馬上で高橋さんとかくれんぼK君

3) 牛乳を投げてしまったD君

D君は馬が大好きで、ポニーや大型の馬にも物怖じしないで乗ることができる。D君の体格から大型の馬に乗るのは身体に負担がかかるので、ポニーを多く使うようにした。ポニーの鞍のハンドルにつかまりながら最初のうちは上がり気味だった顎が次第に下がり、「うま」「うま」を連発していた。彼は大型の馬に乗りたいという気持ちを持ち続けていた。シャイアンに乗っているD君の笑顔は最高だった。彼は大型の馬でも鞍につかまりながら上手くバランスを取り、馬上で進行方向にまっすぐに視線を向けて姿勢を保ち、馬に動きを楽しんでいる様子が見られた。彼は大型の馬にお姉さんと一緒に乗ったり、ポニーの引き馬をしたり、馬と様々な関わりを経験した。土曜日と日曜日に研究所の馬の演習に参加したD君は、その翌日も馬に乗りたいという気持ちが高まり、保育園の昼食の時間について牛乳を投げてしまった。彼のこの行動は保育士には理解できなかったようであるが、母親にはそのことの意味がすぐに理解できた。



馬上でリラックスD君

4) 馬に慣れているJ君

J君は研究所の馬の演習の以前に何度も乗馬を体験しているので、馬に対する親近感をもっている。スケジュールの都合で1度だけの参加となったが、馬に乗る前の「あい



馬上でボールを受け取るJ君

さつ」など一連の活動を行うことが確実にできた。馬上では馬の動きに対応した身体の動きが見られ、早足にも身体が順応し、表情も姿勢も良く楽しんでた。馬上で手を放す練習のために、ボールや小さなリングをサイドウォーカーとのやり取りをしたり、両手を横に広げたりするなどの課題にも取り組んだ。

5)「私がコーヒー・・・」と感動した美香さん

美香さんは当時中学校2年生であった。彼女はとても積極的で明るい性格である。彼女は痙直型四肢麻痺の脳性麻痺があり、言葉はゆっくりであるが話すことができる。移動は車椅子を使っている。彼女はワープロを使って文章を書くのが上手である。

美香さんの乗馬は、大型の馬（シャイアン）を用いて行った。初めは股関節を開くのが難しいので、両足をそろえて横乗りから始めた、初日は美香さんを前方から一人、後方から二人で身体を支える形で乗馬を体験した。2日目は自分で身体を支えることが見られたので、安全を確保しながら後方からの支持を少なくした。

初めて乗馬を体験した美香さんは、その時の感動や自分の身体の変化を作文にまとめているので、それを以下に紹介したい。

「馬たちから学んだこと」

畠 中 美 香

みなさんは、馬に対して、どんなイメージを持っていますか。私は、テレビで見ただけで実際に見たり、ふれあったりしたことがなかったので、馬に対しては、足が早い動物、優しくな目をしているけど近よるとこわそうだなと感じていました。しかし、ある研修旅行が、きっかけで、私にとって馬が身近な動物になり、またとても大きな存在になりました。私は、今年（平成12年）の3月、横須賀の国立特殊教育総合研究所での乗馬療法に初めて参加しました。乗馬療法とは、くらを使わないで直接馬に乗り、馬の背中の筋肉や振動を利用して、体にかかる余計な緊張をほぐし、体の動かし方を自然に身に付けられるという身体的リハビリ、そして馬とのふれあいによって心理的な影響もあるといわれています。

研修の初日、私は、不安と緊張そしてどんなことが待っているのか興奮の連続でした。研究所の広場に到着して4頭の馬と緊張の対面をしました。まず、目についたのがとても大きくてがっちりした馬で名前は「シャイアン」、おとなしそうな「エバ」、小屋に入ってさびしそうな「テキサス」、ポニーの「ピンキー」。最初に、背中のとても広い「シャイアン」に乗り、ボールのように体が軽くなり、とても不思議な気持ち、背中に寝た時は、体の中に電気が走るよう

に暖かさが伝わり、体の力がすっとぬけて風にゆれる花のような気分で初めての体験でした。さらに「エバ」に乗った時、私をまるごと受けとめてくれるやさしさ、あったかさを感じました。まるで私がコーヒーで「エバ」はコーヒーカップの特大サイズ。私の不安な気持ちを感じとり、心の準備ができるまで、ひたすらじっと待っています。その後、わたしの声かけで歩きだした姿は、新鮮であり、大きな感動でもありました。動物も感情を持っています。いくら訓練を受けている馬とはいえ、ここまで相手の気持ちを大事に考えてくれます。私たちの人間が、一番学ばなければならないことだと思いました。相手の気持ちなどを無視して、自分だけが楽しければそれでいいという気持ち、自分の欲望だけをみたすために、人を傷つけたり殺したりする今の社会、私は馬たちとの出会いで、乗馬療法を通して、相手のことを考える大切さを知りました。馬は話すことはできない。その馬たちからたくさんのことを学べたのです。

私たち人間は、さまざまなコミュニケーションを通して、相手の気持ちもわかり、自分の気持ちも伝えることができます。その上でお互いの気持ちが理解できたり思いやりの心で接することができるのだと思います。私はぜひたくさんの人たちが、馬とのふれあう機会を作ってほしいと思います。そのためにも一日も早くこの奄美で乗馬療法ができ



乗馬を楽しむ美香さん



馬と一体の美香さん

るように、体験した楽しさ、馬のやさしさ暖かさを多くのみんなに伝えていきたいです。

4. 考 察

3年間で6回行った馬を使った演習に参加した「スマイルの会」の子どもたちと特別参加の美香さんの活動の様子を簡単にエピソードとしてまとめた。個々の子どもたちは最初は、遠足気分に参加していたが、次第に馬との関わりを深めたり、馬に関わることの楽しさを発見したり、自分の身体の動きに集中できるように変化してきた。自分と馬との関係だけでなく、自分と馬と友達との関係ができてきたり、また、馬との関わりを通して自分の気持ちをコントロールすることもできるようになってきている。このような変化について、以下の項目で考察する。

(1) 個々に異なる関わり方

馬に対する子どもたちの関わり方は個々に異なっている。犬や猫などの小動物は苦手だが、馬はなぜか怖がらない子どももいる。演習に参加した「スマイルの会」の子どもたちも、それぞれみんな馬との関わりが異なっていた。K君は馬に馴染むまで時間がかかった。Sさんは馬と積極的に関わっている内に自分の世界に集中できるようになった。D君は大好きな馬といるだけで幸そうな表情をしていた。J君は馬に慣れ親しんでいる様子だった。馬は子どもたちにとってどんな存在なのだろうか。乗って楽しむだけの単なる道具なのだろうか。馬を見ている子どもの表情は生き活きと輝いている。馬の持っている魅力は乗馬だけではなくさそうだ。引き馬から始めたK君は馬との距離を保ちながら、馬や指導者との関わりを楽しんでいた。馬の好物のニンジンあげているSさんの表情は真剣だった。D君は馬を見ただけで幸そうな表情をしていた。馬を用いた演習を通して、個々の子どもが馬とどのような関係にあるかを見て対応する必要があることを知った。決して指導者のペースで関わりを展開してはならない。子どものペースを測りながら個々の子どもの関わりを基盤に据える必要がある。また馬は敏感な動物なので、静かな環境の中で子ども達が自分の身体に集中できるように個に応じた対応が必要であることが分かった。

(2) 馬の人への配慮

馬は乗るための道具ではない。一人ひとり異なる対応を「馬」が行っている。ある調教師から、「馬は乗る人に合わせて良くもなるし、悪くもなる」ということを聞いた。最初その意味が分からなかった。馬の扱いが下手な人の馬は、下手な人のレベルに馬が合わせるようになるということである。常に馬の良い状態を保つのが、調教師の仕事のひとつ

である。子どもたちが馬上で安定した姿勢を保持できるのは、子どものバランス能力に依るが、正しく調教された馬の持っている力に依るところも大きい。馬の背中を通して子どもたちの身体と馬の微妙なやり取りが展開されている。子どもが上手くバランスが取れるように、馬が上手く調整している。乗馬では子どもが楽しみながら、子ども自身の身体の機能（バランス、感覚・知覚機能など）を活性化させている。個々の子どもの変化は身体的機能だけでなく、馬との関わりを通して対人関係にも広がりを見せる。馬に乗る前、ブラッシングをしたり、あいさつをしたり（お願いします、ありがとう）、餌をやったりする中で馬との関係が深まってくる。筆者は子どもたちと共に馬と関わってきて、「馬の人への配慮」を感じることができるようになった。乗馬を通して子どもが「自信」を持つようになるなど、心理的な効果が期待できる背景には、この「馬の人への配慮」があるかも知れない。

(3) 家族が共に参加できる乗馬

研究所における馬を用いた演習では、子どもを中心に家族と共に参加している方が多い。「スマイルの会」の方々も保護者と兄弟姉妹が共に参加した。子どもだけの参加よりも、保護者の方や兄弟姉妹が乗馬と共に経験することによって子どもの体験が共有できる。保護者の方が乗馬を体験すると、子どもの見方が変わってくる。乗馬療法を目的に調教された馬を初めて体験された方々は、今まで体験したことのない「心地よさ」を味わうことができたとの感想を持つ。保護者の方々は、「乗馬は楽しい」「楽しい思いを子どもに体験させたい」「動物とふれあう機会を作りたい」「乗馬によって身体の緊張がとれると聞いたので是非体験させたい」など様々な要望を持って参加している。回を重ねるごとに保護者の方々の演習への参加が変わってきた。最初は演習中の馬上の子どもに声を掛けたり、手を振ったり、遠足気分での参観している方が多かったように思われる。子どもと馬の関係が深まったり、保護者が乗馬を体験したりする中で保護者の観察の視点が変わってくる。保護者は次第に、子どもが馬上で集中したり、引き馬をしたり、馬の世話をしている活動をじっくり見るようになった。子どもと馬の関わりや馬を通した子どもと子どもの関わり、子どもとの指導者の関わりに気が付き始める。保護者の参加の仕方が、「遠足気分」から「体験を共有する世界」に変化する。「スマイルの会」の方々も、兄弟姉妹が共に乗馬の体験をした。D君もお姉さんと一緒に乗馬を体験した。Sさんもお姉さんと一緒に乗馬を体験した。大型の馬に乗ることを渋っていたK君は、お兄さんと一緒に馬に乗ることがきっかけになって大型の馬に乗ることができるようになった。

「乗馬の体験としては少ない回数であったが、馬を通し

て家族が共通の体験ができたことは大変嬉しい。」とある保護者が話された。研究所の乗馬の演習を通して、体験を共有することによって家族の絆が深まりを実感できたのであろう。

5. 今後の課題

「次回の演習はいつですか」、「定期的に乗馬ができるところがありますか」など、問い合わせがある。馬を用いた

演習に参加した保護者の方々からは、子どもの新しい面をたくさん発見することができた経験から、「継続的に子どもに乗馬を体験させたい」との要望があり、乗馬に対する子ども自身や保護者からの期待が大きい。今後の課題は日常的に、継続的に馬と関われる環境づくりをどのように進めていくかである。障害のある子どもとその家族が共に参加できる「専門性の高い乗馬の機会」を提供することが求められている。

ポニーを用いた特殊学級の子どもたちへの指導

飯島 友子

(茨城県鹿島郡大洋村立白鳥東小学校)

1. 大洋村立白鳥東小学校の概要について

本校は、茨城県南東部の太平洋に面した自然豊かな地域である。学区は、南北4kmにわたり、国道51号線に接した交通量の多い地域である。鹿嶋方面の会社に勤務する保護者が多く、農地が住宅地に変わりつつあり、他市町村からの入居者が増加傾向にある。

保護者の教育に対する関心は高く、学力の向上、心の教育の高揚に大きな期待感をもっている。

児童数が185名の中規模校である。学級数は、9クラスある。通常の学級が7クラスで、特殊学級として、情緒障害学級「こころの教室」と知的障害学級「学び方教室」の2クラスがある。子どもたちは、明るく素朴であり、思いやりの心が随所に見られる。草花や生き物を大切に、勤労・奉仕活動へ積極的に取り組む姿が見られる。また、外遊びなどの運動を好み、活動的である。学習面においては、実験観察や体験活動には、意欲的に取り組んでいる。

2. ポニーを用いた指導を実施することになった経緯

平成10年4月より大洋村の健康増進課施設『とっぶ・さんて大洋』の施設内に、ポニー広場の整備を開始し、同年6月に、『たいよう馬の杜』としてポニー事業を開始することになった。これを受けて、平成11年度からポニーとのふれあいや乗馬・世話等とおして、障害をもっている児童が自発的にポニーや人とのかかわりを高め、社会性や対人関係の育成を図ることをねらいとして、実施する運びとなった。

また、専門研究機関である国立特殊教育総合研究所の「乗馬療法」の考え方を受けながら、活動を進めることで、そのねらいとするところの「馬の特性を活かした心理・教育的な対応」を本学級の児童にも味わわせたいと考えた。さらに、余暇活動のひとつに取り入れたり、『たいよう馬の杜』が、地域社会での活動の場のひとつになるようにさせたいと思い、ポニーを用いた指導を実施することとなった。

3. 教育課程での位置づけ

こころの教室の教育課程の中の「小集団の時間(自立活動)」での4単位時間を1回として、カウントしてきた。

その時間を「ポニーとあそぼう」の名称の学校行事として、実施してきた。

4. 「ポニーとあそぼう」の3年間実施期日

(1) 平成11年度(9回)

・5月11日・15日 ・6月5日 ・7月3日
・10月2日 ・11月6日 ・12月4日
・1月12日 ・2月5日

(2) 平成12年度(6回)

・4月8日 ・5月19日 ・6月20日
・10月18日 ・11月9日 ・12月15日

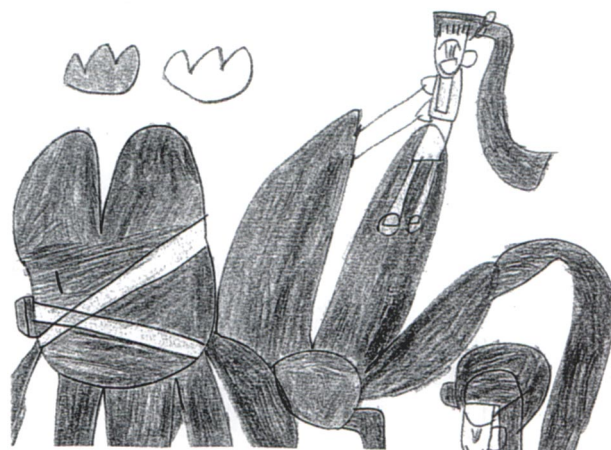
(3) 平成13年度(6回)

・5月11日 ・6月11日 ・7月17日
・10月26日 ・11月22日 ・12月18日

5. 「ポニーとあそぼう」についての実施体制

情緒障害学級担当者が中心になり、知的障害学級の協力を得ながら、実施してきた。『とっぶ・さんて大洋』のスタッフにも恵まれ、『乗馬療法』を取り入れながら、ポニーへの接し方を児童が理解できるように親切に教えてくださった。

『とっぶ・さんて大洋』が学区内にあるという、立地条件も時間のロスが少なく、実施する上で大変都合がよかった。以下の「学校行事計画書」とおりに実施してきた。



絵1

〔資料1〕「学校行事計画書」

- ① 行事名：ポニーとあそぼう
- ② 立案者：飯島 友子
- ③ 参加児童：こころの教室在籍児童 3名
 学び方教室在籍児童 2名
- ④ 配当時間：小集団指導（自立活動）4時間
- ⑤ 実施期日：平成13年5月11日（月）
- ⑥ 場 所：とっふ・さんて大洋
- ⑦ 輸送移動方法：とっふ・さんて大洋のワゴン車
- ⑧ 経 費：0円
- ⑨ ねらい：
 - 継続してポニーに乗ったり、一連の世話をする中で児童が自発的にポニーや人とのかかわりを通じて社会性や対人関係を図ることができる。
 - 専門機関である、国立特殊教育総合研究所の乗馬療法を受けることにより、そのねらいとするところの「意欲に基づく実現と充実」を図ることができる。
- ⑩ 実施計画

活 動	教師の支援
◎ 事前指導 ・ねらいについて ・各自のめあてについて ・集合について ・諸注意	ねらいについて十分に話し、各自がポニーとの自発的なかかわりができるように、各自のめあてを確認して、活動意欲を高める。
◎ 活動計画・予定・内容 8：40 昇降口集合 8：50 学校出発 9：00 とっふ・さんて大洋到着 9：10 ポニー学習開始	こころの教室に全員集合させ、健康観察をする。 『たいよう馬の杜』のスタッフに心を込めて挨拶ができるように声かけをする。 ・かかわりあい行動への支援をする ・学校担当者は、『たいよう馬の杜』のスタッフの指導を受け、児童を見守る立場で参加する。 ◎「場の提示」 ・人やポニーへの関係づけ ・ものとの関係 ◎「人へのかかわり」 ・動きへの対応 ・ポニーをとおした働きかけ ◎「動きの提示」 ・動きの受容
11：40 ポニー学習終了 11：45 とっふ・さんて大洋出発 11：55 帰校	スタッフにお世話になったお礼の挨拶ができるように声かけをする。 こころの教室で各自のめあてについての反省をする。
◎ 事後指導 ポニーとの活動した思いを絵や文、ことばであらわす。	次回も行くのが楽しみになるように、ポニーとのふれあいを思い出させる。

⑪ 備 考：引率は特殊学級担当者の2名で行う。

6. 指導計画

（1）児童の実態

平成11年度と平成12年度には、こころの教室に在籍している児童は、5名であった。中学校へ進学したり、学び方教室へ措置換えになったりして、平成13年度は、3名の学級であった。自閉的傾向の児童が2名、場面緘黙の児童が1名である。4学年と6学年の異学年による構成である。

知的発達についても、中度から軽度の遅れが見られる。また、情緒障害の特性とされている、対人関係や社会性の障害、言語やコミュニケーションの障害、興味の限局性や常同的・執着的行動についての発達障害や行動異常も併せもっている。学び方教室に在籍している2名も一緒に参加して、3年間、活動を共にしてきた。なお、「平成12年度のこころの教室在籍児童」の実態については資料2に記載した。

さて、どの児童においても「ポニーとあそぼう」が、大好きな時間で実施日を心待ちにしていた。やはり、ポニーとふれあうことによって、「こわい」から「かわいい」に変わってきたのだらうと思われる。学校に帰ってきてからの「ポニーの思い出」の絵や作文に、情緒の安定が図れたと思える表現を見せてくれた。『たいよう馬の杜』のスタッフの方々との交流も楽しい時間のひとつになったと思う。活動の合間の休憩時間には、学校での様子や考え等を自然に話をする姿を見ることができた。



絵 2

(2) 指導のねらい

障害をもっているために、本来もっている力を十分に伸ばしきれない児童に対して、その障害の状態、程度を改善することにより、学校生活及び社会生活への適応を高め、たくましく生きる力の育成を図ることをねらいとする。

《障害児にとっての「たくましく生きる力」とは》

◎ 学校生活を生き生きと過ごし、将来、人とのかかわりをもち、社会に対して積極的に働きかけ、自立した生活を送ることができる力（社会的自立）

《たくましく生きる力とは》

◎ コミュニケーションの開発

◎ 健康と体力の向上

《身につけさせたい力》

◎ ものを知り、ものを学ぶ力

- ・ 注視
- ・ 傾聴能力
- ・ 模倣能力

◎ 人を知り、社会を学ぶ力

- ・ 人とかかわる力
- ・ 言語理解力
- ・ 言語伝達力

◎ 身体を知り、身体の使い方を学ぶ

- ・ 調整力
- ・ 筋力
- ・ 持久力
- ・ 歩・走・躍の力
- ・ 健康を意識する力

(3) 指導の内容

児童ひとりひとりの情緒の状態・能力・特性に応じた指導目標を立てる。児童がより積極的に学校（社会）生活に参加できるように、自立活動（心理的適応と意思の伝達を中心に、必要に応じて他の教科も考慮する。）及び、各教科の補充的指導も行う。

「ポニーとあそぼう」の活動を通して、主に6つのことを重点的に指導していきたいと考えた。

① 対人関係・社会性

- ・ 対人関係の育成
- ・ 社会的スキルの向上

② 行動・情緒

- ・ 心身の障害や環境に基づく心理的不適応の改善

③ コミュニケーション

- ・ 意思の相互伝達の基本的能力の習得
- ・ 言語の受容・形成・表出能力の向上

④ 認知・学習

- ・ 認知の枠組みとなる概念の形成
- ・ 各教科の補充的指導

⑤ 運動・動作

- ・ 姿勢と運動・動作の基本の習得及び改善
- ・ 手先の巧緻性及び遂行能力の向上

⑥ 生活習慣

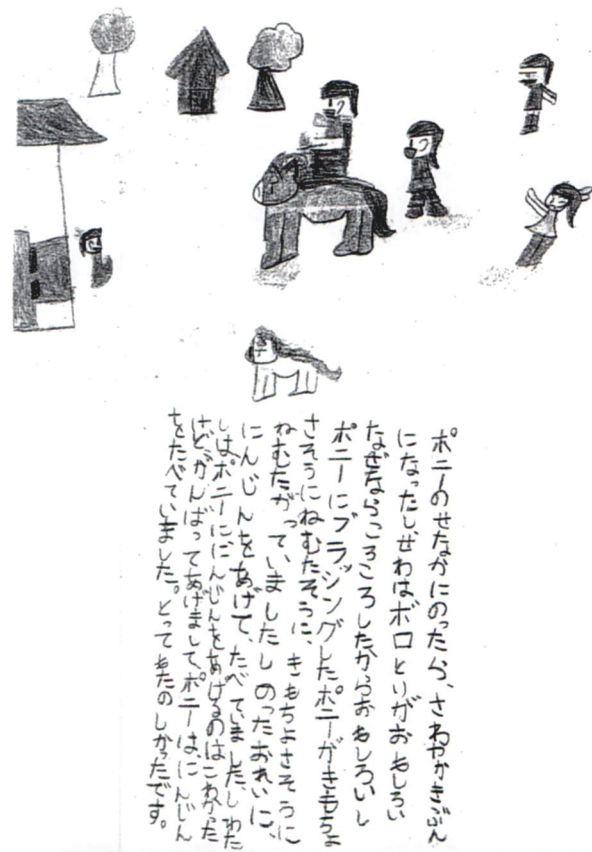
- ・ 生活のリズムや生活習慣の形成

(4) 指導の記録と評価

児童ひとりひとりのポニーとのかかわりの様子を毎回、観察しながら記録してきた。同時に、写真やビデオカメラでの撮影も行ってきた。保護者へもその都度、連絡帳で様子を記載してきた。毎学期末に通知票へも「ポニーとあそぼう」での取り組みの状況を伝えてきた。

活動の評価については、次のようなことを考えてみた

- ① ポニーとのかかわりの中で、素直な気持ちをどれだけ表現できたのか。
- ② ポニーとの体験活動において、どれだけコミュニケーションをとることができたか。
- ③ 今までの活動で習得したことを踏まえて、自分で考えながら、次の行動に移せたか。
- ④ 各自のめあてを達成することができたか。



絵 3

7. 実践報告

以上を考慮して、『たいよう馬の杜』のスタッフの方が

その都度、活動内容を決定して児童とポニーをなかよくなるように、スモールステップによる計画を立ててくれた。

主な活動の流れは、次のようである。

- ① 集合、挨拶、注意と今日の活動の説明
- ② ボロ取り（馬小屋・放牧場）
- ③ ブラッシング
- ④ 蹄掃除
- ⑤ 乗馬の準備
- ⑥ 引き馬、乗馬
- ⑦ 後片付け
- ⑧ えさやり
- ⑨ 集合、感想発表、挨拶

はじめは怖がっていた子供たちであったが、回数を重ねるごとに、充実した活動ができた。『ポニーとあそぼう』の活動をとおして、本学級の児童が大きく成長する姿をまじかで目にすることができた喜びを感じている。3年間の長期にわたる活動を通し、児童の心身の成長とポニーとのかわりでの成長が重なり合ったのだと思う。

さらに、『たいよう馬の杜』のポニーに赤ちゃんが、誕生したこともあり、ますます、楽しい活動になったことは、間違いない。学校以外の人とのコミュニケーションをとることができるようになったことは、こころの教室の児

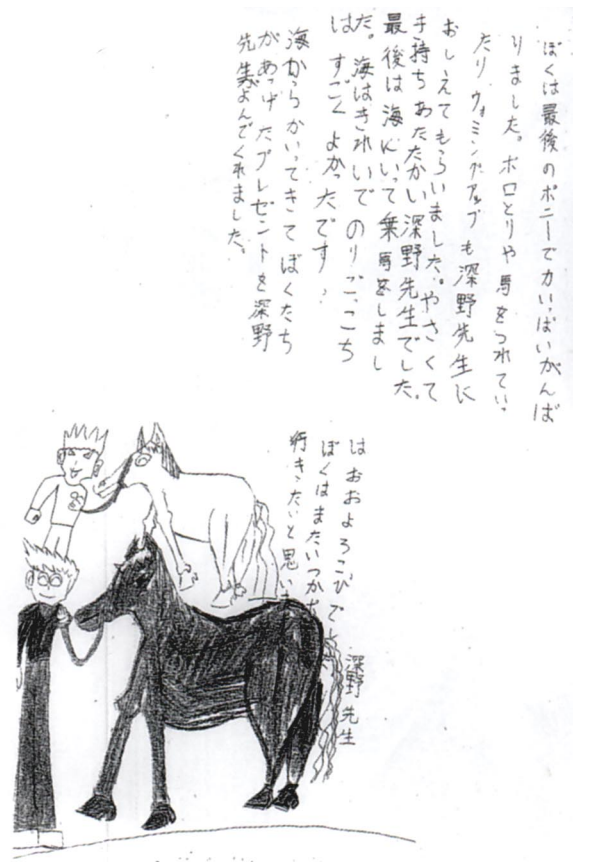
童にとって、すばらしいことである。つまり、こころの教室にいるときと同様に、ポニーと一緒にリラクセスできる空間になってきているということなのだ。ポニーを引いても、乗っても、ボロ取りをしているときもどの子の顔の表情も輝いていた。満面の笑顔の中に、ポニーに対する児童の気持ちが現れていると思った。馬小屋の中や丸馬場にあるボロ取りの作業に対して最初の頃は非常に嫌悪感を示しながらの取り組みであった。しかし、今ではみんなで協力しながら、たくさんのボロを集めて、袋に入れられるようになった。これは、ポニーに気持ちのよい場所で過ごしてもらいたいという、思いから自主的な行動がとれるようになったのではないかと考えられる。

準備や世話の活動に対しては、あまり積極的でなかった児童でも、乗馬は大好きでひとりで乗れるようになった。ここにも、ポニーとなかよくなりたいという思いから、指示をよく聞いて、乗馬の仕方を習得していったのではないかと思われる。

乗馬の後に、お礼としてにんじんをやる作業に対しても、怖さからなかなか手の平から与えるまでには時間がかかった。自分たちで大きなにんじんをナイフで小さく切ったのをあげたときから、怖さが半減したようだ。にんじんを喜んで食べているポニーを見て、一緒に喜んでる児童の姿があった。



絵 4



絵 5

活動した思い出を表現する絵（絵4、5）を見ると、明らかにポニーを意識して、より本物に近い表現になってきたことが分かる。ポニーの周りの情景も描けるようにもなった。これは、ポニーの存在が児童と密着してきたことだと、思われる。

8. 実施上の課題

- 一連の作業に抵抗を示す児童への支援の仕方をどうするか。
- 乗馬の時間に待っている児童の活動をどうするか。

- 学校側（特殊学級担当者）のスタッフへの協力の仕方の研修の機会をどうするか。

9. 今後の課題

平成14年度からは、こころの教室の在籍児童が5学年だけの1名となり、単独校での事業実施が難しい状況にある。本校を卒業して、大洋中学校に進学していく児童が多いことから、体験事業を継続できるよう村内の特殊学級の取り組みとして実施する方向で考えていく必要性が生じてきている。

地域交流活動の一環としての乗馬

宮 林 文 代

(富山県立富山養護学校)

1. 学校概要

本校は肢体不自由養護学校で富山市の西部に位置し、田園地帯でありながらも市の中心部へは車で15分程度という、恵まれた立地条件にある。また、付近には山や大木のある神社などもあり、自然環境にも恵まれている。

平成13年度の在籍数は、小学部32名、中学部15名、高等部62名の計109名、うち訪問教育を受けている児童生徒は12名である。

学校教育目標は「児童生徒の障害の状態や程度に応じて、能力や個性などに適った教育を行い、社会を構成する一員として社会の諸活動に参加し、自己実現を育成する。」となっている。

2. 実施経緯

平成11・12年度に文部省(現文部科学省)から「交流教育地域推進事業」の指定を受け、その一環として地域の企業である(朝日乗馬倶楽部)との交流、また動物との交流を図ることとなった。

これは乗馬のリハビリ効果の記事を福祉新聞「太陽の顔」で読んだことにもよる。実施にあたっては、兵庫県の障害者乗馬協会に問い合わせをし、東京障害者乗馬協会(徳田實氏や渡辺 廣人氏など)から主な情報を得て研修に赴き、実施に活かした。

3. 教育課程への位置づけ

小学部	平成11～13年度	特別活動
中学部	平成11～13年度	特別活動
高等部	平成11～12年度	特別活動
	平成13年度	総合的な学習の時間

4. 年間計画

全校児童生徒が全員年1回の体験乗馬をするという活動なので、各学期ごとに朝日乗馬倶楽部と連絡の上、実施した。

—平成13年度の体験乗馬—

実施日(曜日)	学 部	時 間 帯	人数
6月28日(木)	高等部	10:00～11:20	20名
9月6日(木)	中学部	〃	15名
9月14日(金)	小学部	〃	19名
10月11日(木)	高等部	〃	28名
10月25日(木)	小学部	〃	14名
11月8日(木)	高等部	〃	15名

5. 実施体制

(1) 乗馬倶楽部のスタッフ 3名程度 乗馬指導

使用馬はサラブレッド1頭、クォーターホース1頭、道産子1頭

(2) 各学部ごとの教員

進行、サイドウォーカー、リーダー、上下馬指導、保健安全指導、記録、児童生徒介助、準備体操、事前・事後学習指導、乗馬倶楽部との打ち合わせ、職員研修、ボランティアとの打ち合わせ、馬場までの配車計画等を担当

(3) ボランティア 2名～10数名(その時によって異なる)

一般ボランティア(募集、乗馬倶楽部員、ライオンズクラブメンバー等による)

(4) 障害者乗馬インストラクター

平成12年度には、専門のインストラクターを招いて指導にあたっていただく。年1回の体験乗馬であることを考慮し、児童生徒のQOL向上のための楽しむ乗馬が本校にはふさわしいと考え、障害者乗馬を行っている団体である「RDA」所属の方を講師として招くこととした。

・原口 俊彦氏 長野県北佐久郡春日町馬事公苑で障害者乗馬を指導(当時)

・太田恵美子氏 神奈川県横浜市三ツ沢公園にて障害者乗馬を指導

6. 指導計画、指導記録、評価について

4月上旬(1学期) 職員の乗馬研修

9月上旬(2学期) 〃

前日(当日) 事前学習 (交流について、乗馬の注意やマナー、乗馬の効用等) 健康観察
 乗馬 児童生徒の目標に応じた乗馬
 乗馬後 事後指導 (感想、評価、礼状・ビデオ視聴など)
 記録 写真、ビデオ、生徒の感想、自己評価 (別紙1)などを担当で保管
 健康観察はバイタルチェック表 (別紙2)を用いたが、必要な児童生徒 (重度)のみ行き、あとの児童生徒は通常の健康観察を行った。
 評価 生徒の担当者が、記録を元に総合的な学習の時間の評価として行う。
 今年度は自己評価表作成 (同じく別紙1)

(別紙1)

今日の学習をふりかえろう。

班 年 級 氏名

○・△・×で記入しよう。 他は反省点など自由に書いてください。

番号	内 容	はい	いいえ	その他
1	体調はよかったですか。			
2	準備体操をしっかりとしましたか。			
3	朝日乗馬クラブの人にあいさつできましたか。			
4	たてがみと手綱を左手にもって乗れましたか。			
5	あふみに左足をしっかりとかけて乗れましたか。			
6	右足はうまくまわせましたか。			
7	手綱は正しくもてましたか。			
8	出発の合図はできましたか。(馬の腹をかかとでける、「はい」と合図するなど)			
9	手綱を右や左に引いて馬の頭の向きを変えることができましたか。			
10	手綱を引いて馬を止めることができましたか。			
11	遠くの方を見て乗れましたか。			
12	サイドウオーカーの人とお話できましたか。			
13	スムーズに下りることができましたか。			
14	乗馬、下馬の時にサイドウオーカーの人やリーダーの人、そして馬にあいさつできましたか。			
15	今日のサイドウオーカーの人の名前を知っていますか。			名前
16	リーダーの人の名前を知っていますか。(馬を引く人)			名前
17	乗った馬の名前を覚えられましたか。			名前
18	友達の乗馬をしっかり見て応援してあげましたか。			
19	楽しく乗馬できましたか。			

感想や、手紙などを書きましょう!

(別紙2)

乗馬体験かるて

A票

B票

学部	学年	氏 名	男・女
障 害 名			
項 目	児 童 生 徒 の 実 態		
移動方法	独歩 (安定 不安定) 車椅子 (自立 要介助)		
坐位姿勢	安定 不安定		
首のすわり	安定 不安定		
開排制限 (股の開き具合)	無 有		
てんかん	無 有		
合併症	無 有		
バイタルサイン	脈拍	平常時	回/分
	体温	平常時	度
	呼吸数	平常時	回/分
	血圧	平常時	~
意識レベル	平常時		

※意識レベルについては、刺激に対する反応について記入 (有・無でも良い)。

乗馬体験日： 月 日 ()
 乗馬時間： 分 (周)

項 目	様 子	特 記 事 項	備 考 (その他)
朝 食 事 の 排 泄 様 子 気 分	食べた 食べない		
	出た 出ない		
	よく寝た 寝ていない		
	良い 普通 悪い		

観 察 項 目	出発前 (:)	直前 (:)	直後 (:)	帰校後 (:)
脈 拍	回/分	回/分	回/分	回/分
体 温	度	度	度	度
呼 吸 数	回/分	回/分	回/分	回/分
血 圧	~	~	~	~
意 識 レベル				
顔 色				
体 の 緊 張				
発 汗 状 態				

特記事項 (児童生徒の様子や変容等)

7. 活動の内容

- 1年目 乗馬を楽しむ、馬に親しむ
- 2年目 遊具やゲーム形式を用いた乗馬
- 3年目 馬のコントロールを目標とした乗馬四角い馬場を出て、外乗を楽しむ

＜実施に関わる経済的な根拠＞

富山セントラルライオンズクラブからの援助による。
2,000円(一人分)×児童生徒数 約20万円

8. 成 果

股関節の硬直の緩和、痰のきれがよくなった、乗馬時の涎の軽減、動物への接触ができなかった子が馬に乗って成就感を味わう、などの効果のあった児童生徒も見られた。

9. 実施上の課題

- (1) 学校週5日制に伴い行事が削減される傾向にあり、本内容の実施も例外ではない。
- (2) 実施には経費が伴い、資金の裏づけが必要である。
- (3) 体験乗馬からの発展として、リハビリ効果を期待した放課後の訓練乗馬を行うことを企画したが、実施にあたるボランティアやスタッフが不足しているため、継続的な活動が難しい。
- (4) 重度の障害がある児童生徒の場合、どのように乗馬をのさせたらよいかについて配慮事項と具体的な方法について検討が必要である。
- (5) できるだけ多くの時間乗せてやりたいが、限られた時間内での乗馬なので限界がある。



10. 今後の見通し

富山セントラルライオンズクラブからの資金援助を得て、体験乗馬(年1回全校児童生徒が乗馬を体験する)の実施

は可能である。また、特別活動の中で今後も行っていく予定である。

11. そ の 他

7で述べた内容の他、放課後の時間に希望者への週1回の機能訓練乗馬を行っている。寄宿舎生以外は保護者同伴。寄宿舎生については学校の教員や高等部生徒のボランティアがサイドウォーカーを務める。

【資 料】

1. 施設・団体の概要

名 称 朝日乗馬倶楽部
所在地 富山県婦負郡婦中町友坂315
(TEL 076-469-5755)
代 表 社長 竹田三樹夫
スタッフ 3名
馬 場 (ナイター施設完備)
芝馬場 (35×120m 1面)
角馬場 (25×45m 1面)
トレーニング・トラック (全周450m 1面)
丸馬場 (直径17m 1面)
丸馬場 (直径15m 1面)
屋内馬場 (22×40m 1面)
厩舎 (620㎡) 所有馬24頭収容
仮設厩舎 20頭収容(競技用)
その他 ウォーキングマシン (4頭) (直径15m 1基)
クラブハウス (2階建 1258㎡ ロビー、ポロ
ショップコーナー、ティーラウンジ、乗馬教室、
インストラクタールーム、事務室、ロッカールーム、
更衣室、浴室、プレジデントルーム、宿泊
施設)

2. 施設における障害のある子ども等への取り組み

以前、知的障害を有する小6の子(親が会員)が親と一緒に乗馬を始めたところ、最初は座ることもままならなかったのに、ひとりで乗馬ができるようになり、それにつれて本人の状態がよくなっていくのがわかった。高1くらいまで継続していたのでその経過から効果が伺えた。

また、不登校傾向の中学生が5人、それぞれ乗馬にくるようになり、2年くらいで不登校が解消して(平日来ていたのが、だんだん土日にくるようになった)受検に合格したとの報告も受け、乗馬が運動機能だけでなく、心のケアにも効果があることに気づく。

このような折りに富山養護学校からの交流の申し出を受け、障害者乗馬に本格的に取り組むこととなった。

3. 施設において工夫してきた点

- (1) 障害者乗馬における馬匹の選択と育成（周囲の状況変化にも対応できる落ち着いた馬、安定した動きのできる馬に調教する）
- (2) 補助具（落馬防止のための足首固定や、首の保護をするヘッドレストの提案など）、乗せ方（首の据わらない子とのタンデム時、顎をひいて額を軽く抑え、できるだ

け上肢をまっすぐにさせて馬の動きを脊椎に伝えるようにするなど）

4. 施設における課題

- (1) 段階的運動療法（常足から速足への移行）としての乗馬の補助の方法を考える。
- (2) 心のケアとしての乗馬は自由に強制しない乗せ方にしたいが、飽きさせずに乗せるにはどうすればよいか。

馬を用いた活動導入の試み

鈴木 卓郎

(石川県立錦城養護学校)

学校概要と取組みの経緯

本校は石川県最南端に位置する全校生徒36人の小規模の知的障害養護学校である。

平成13年度より、石川県は予算総額1億円を計上し、特色ある学校作りを目指した「県立学校活性化マイプラン」を開始した。本校中学部の馬を用いた学習はこれに採用され実施した。

本校中学部は障害者が馬と関わる事がさまざまな効果を上げていることに関心をもっていただけと、生徒が能動的に活動できる教材の必要性を感じていたのが実践の理由である。

馬を用いた学習を行うのは平成13年がはじめてで、試験的な意味合いが大きい。「県立学校活性化マイプラン」は毎年度当初に実施案を県教育委員会に提出し審査される1年区切りの事業のため、数年計画で行う研究的な要素を持たせることが困難なので、総合的な学習の時間を利用して季節的にも活動しやすい10月下旬から11月初旬の3回実施した。

馬を教材として用いた授業は、石川県内養護学校でも初めての取り組みで、本校中学部教員の誰もが馬と、ホースセラピーに関する情報は知識がなく、受け入れ施設なども手探りの状態であった。

承認後、本格的な始動に至るまで、我々は情報の収集、様々な手配、受け入れ先との連絡調整を繰り返し行った。

今回の事業を開始するにあたり、国立特殊教育総合研究所の滝坂信一氏に指導を求めるとともに、長野県木曾養護学校の馬を用いた授業実践を見学するなどして基盤を固めた。

学部の研究会ではこれらの情報をもとに話し合いを行い、生徒の様子に適した活動を模索した。中学部の教師全員で乗馬・厩舎作業の体験とスタッフとの連携を目的として、夏季休業中を利用し石川県馬事振興協会で研修を行った。初めて見る馬の大きさや仕草に圧倒され、教員のなかには当初不安な様子も見られた。教員の中には小動物類が苦手な者もいたが、馬の温かさや、やさしい瞳に愛着がわき、コンプレックスを解消したという逸話もある。

教師自身が研修をしたことで、想像から具体的な実践の計画を立てる大きな一助になった。協会も、障害者を本格的に乗馬させるのは初めての試みであるため、インストラクターも、情報交換に熱意をもって応じてくれた。

1. 指導計画について

生徒が自主的、能動的に活動がしやすいよう、教員は、現地スタッフと生徒の橋渡しのな中立的立場をとり、援助を求められた時にその意志を円滑に実現できるよう適正な支援のしかたや、様子を観察しながら、新たな指導方針を模索する。事後の指導記録を基に多方面から個の可能性を見出すことができると考えた。

指導記録の方法は、

- ① 生徒の障害のようす
 - ② 2学期までの学校生活のようす
 - ③ 3日間の学習の記録
 - ④ 馬を学習に用いた考察
 - ⑤ 馬の学習は個別指導計画の長期目標にどのような影響があったか
 - ⑥ 特記・引継ぎ事項
- で構成した。

2. 導入の授業から実施へ

導入の授業では、教師の話(解説)で馬に関する先入観を与えないために、必要最低限の発言は控え、生徒が入室を済ませるとすぐにビデオで馬の姿やいななきを放映した。

自分たちが見たことのない映像に全員が集中して画面を見る様子があった。集中が持続しにくい自閉的傾向の強い生徒も、普段に比べ画面を注視する時間が長いようであった。内容が進むにつれて、興味がわいたのか「ここはどこにあるの?」(金沢馬事公苑の所在地)「大きいな、こんな大きい乗れないよ」等の発問があった。

ビデオ終了後は、教員が夏季休業中に行った研修の写真を回し見したり、実物の蹄鉄に触れたが、形状と素材の違いに気付く発問もあった。

導入後は、中学部の多目的広場に掲示してある金沢馬事公苑のパンフレットを見て料金を調べる生徒、展示してある蹄鉄に触れる生徒の姿を見ると、当日どのような反応や様子が見られるのか楽しみでもあった。

(第1日目:10月26日)朝夕が少しずつ肌寒くなりつつあるが登校してきた生徒は皆元気そうである。天候にも恵まれ、気温も少しずつ上がってきているようだ。現地に着くと、すでに報道関係者が大挙しており、対応しているうちに開始式も遅れて始めることになった。私たちの活

動を撮影しようと、移動するのと同じにカメラが付いて周りに教員も緊張してしまい、事前に打ち合わせた動きができないままに活動が始まった。声かけする口調だけはやさしいが、実際には教師が先導した活動になってしまっていた。ポニーを見た生徒の中には泣いたり、怖がる生徒もいれば、その場で馬に跨ごうとする生徒など反応は様々であった。

2つの班が乗馬・厩舎作業を午前・午後交代に、厩舎作業班はボロ取りや水足しを、乗馬班は練習馬場でポニーの乗馬を行った。この日は全スタッフとボランティアの会員がサイドウォーカー、乗・下馬の補助、あらゆる面においてサポートしてくれた。

(第2日目：11月2日)前日の雨で練習馬場が使用できないため追い馬場で行う。この日からサラブレッドのユニック号(23才・雌)で行う。怖がる生徒もいたが、一度乗ってしまうと楽しそうである。S.Aの乗馬が問題に上がったが、井谷インストラクターからS.Aを前に乗せてみようか等きめ細やかな配慮や、1人1人の発進の確認など積極的な関わりをしていただいた。

馬事振興協会チーフを交えた昼食時は、生徒達にとっても気兼ねなく話しができたようで、普段の遠足などとは違う社会体験的な時間であった。教員もこの間を利用し、情報交換や午後の活動の予定確認を行うなど有効に利用した。自由時間の生徒は、それぞれが敷地内で好きな活動を楽しんでいた。厩舎の馬に人參を与える者、練習馬場の外周を歩く者、クラブハウスのソファで休む者。もしかしたら、この時間が唯一、自分の意思で馬とその環境の中で能動的に活動できた時間であったかもしれない。

厩舎作業が早く終了した時間はチーフの配慮で生徒は馬に乗せてもらうことができ、大喜びであった。

(第3日目：11月9日)どの生徒も活動にコツを得たようで、馬が近づいても以前ほど怖がる様子は少ない。馬の居る馬房に入ってのボロ取りを体験したり、別棟の競走馬に餌を与えるなど、本格的な作業を行った。乗馬は午前・午後とも前回と同じユニック号であったため生徒らも親しみを感じているようだった。1人で鞍に乗れる生徒は積極的に自分の力で乗るよう酒井チーフから指導を受けたが、学校と違い「まずはやってみよう」という気持ちの後押しがあったように感じた。発進の声掛けや合図、下りた後の挨拶は、声の大きさや意思が初回よりも強調されつつあり。自閉的傾向の強い生徒は常歩で100m程歩くと表情が弛緩するようにも見えた。生徒の中には自分で手綱を持って発進、停止、常歩を経験した者もあり、思うようにいかない馬の操作に驚きと困惑の声を上げていた。

全ての活動終了後に会員の高木さんより模範乗馬を見せていただいた。今まで自分達が乗っていたユニック号が常歩から早足になるとスピードと鼻息、蹄の蹴る音に驚きの声を上げていた。

クラブハウスでの終了式は、馬事振興会会長は不在であったが、中学部の作業学習で製作した観葉植物入りの鉢を差し上げ、生徒代表がお礼の言葉を述べた。チーフの方からも「また是非いらして下さい」との言葉も頂いたこともあり、帰り際には「また来るね」と手を振る生徒も見られた。

初めて馬を見たときの「驚き」や乗れた「達成感」その他、個々に感じたことは様々だろうが、活動を通して「馬はきれい」と言う(感じた)生徒はいなかったのではないだろうか。

「馬がもたらす癒し」効果は科学的には証明されていないが、活動を通して感じたことは馬と生徒が互いに引き合う「なにか」が介在していたかもしれないということである。

実際にユニック号は活動中、非常に従順であり対応の遅い生徒らにも我慢強く待っていてくれた。ユニック号の性格は「大人には厳しい馬だが、子どもには優しい…」というチーフの方からの言葉から、もしかしたら先述のようなことが生徒と馬の間で、できていたのかもしれないと思った。

3. 二人の生徒の事例から

さて、前述したように本実践は試験的な活動であったため、活動の記録が重点的で、馬を用いた学習における目標設定と評価の視点が絞られていない。あえて指標を持たせるとすれば、記録項目⑤自立活動年間指導計画の長期目標と馬の学習の影響が該当すると思われる。以下、これらを前提に、2つの事例をあげる。

(1) 事例 1

中学部2年生のF(男14才)は自閉的傾向が強く奇声とチック様の様子が日常的に見られる。コミュニケーションは一方的で独り言がある。テレビや書物による知識のみ馬を知っている。奇声の軽減が長期目標になっており、今2学期から服薬を開始している。この頃から奇声徐徐に減少し始めている。

導入で用いたビデオ視聴時、馬のいななきや蹄の音に反応を示し所在地等の発問があった。導入後は、多目的広場に掲示してある金沢馬事公苑のパンフレットを見て料金を調べ、展示してある蹄鉄をしきりに触っている姿が多く見られたので、前向きな興味があるのではないかと推測した。

《3日間の学習の記録》

10月26日(金)

高揚した表情で登校してくる。教師への話しかけも多い。現地が近づき、馬事公苑敷地に放牧されている馬を見つけると、「あーっ」と驚いて身を乗り出す。

Fの班は午前中厩務作業だったが、周りの設備などに意

識が逸れて作業手順などの説明を聞いてない。他方、保有数や最年長の馬、体長や重さに興味を示し、質問をしては説明を聞いて感心していた。

インストラクターが「馬をひいてくれる人」と班全員に声をかけると、大きな声で「はい」と返事をし、率先して手綱を持つが、曳き馬をしながら自分の関心をひかれた方向へ行ってしまう。

裏掘りの説明を受けたが、自力で馬の脚を支えることができず、インストラクターに持ってもらうが、逆に掘ったり、我流にしてしまうことが多い。

昼食後の自由時間に馬を見に行く。スティック状にした人参を持っているが、馬が顔を伸ばしても自分に触れないうちだろと思われる距離から眺める。自分から人参をやろうとするが、馬が口を伸ばしてくると人参を離してしまう。落ちた人参は自分で拾い飼馬桶に投げ入れる。

午後の活動に必要なヘルメット、ブーツを自発的に借りに行く。

曳き馬で練習馬場を2周後、取材に来ていたテレビ局のアナウンサーからもう少し乗って欲しいとの依頼があり、快諾する。手を振る余裕も見られる。アナウンサーの質問に「揺れて地震みたい」「眺めがすごくいい!」「ふっくらした感じで可愛い」「もっと乗りたい」と、積極的・好意的に楽しむ様子が見られる。初めて体験する揺れや馬の仕草に恐々とする様子があるが、活動中は馬の近くにいることが多い。これらの様子から、馬に好意を持って接していると教員は確信する。瞬間的に呼気したような「エッ」「ヒッ」等の声をあげるが、昼休みは「ヒヒーン」と馬がいなくなような声を繰り返し出している様子が見られ、興味深い。

活動中、時折「サラブレッドって立派だな」「サラブレッドって…」と大きな馬を意識する発言が多く見られた。

11月2日(金)

バスの中でサラブレッドに乗る活動であることを知らされると「一度乗ってみたかった!」と発言。意気勇んでクラブハウスに入り、大きな声であいさつをし、受付を済ませてブーツ・ヘルメットを自ら借り着用する。インストラクターからの「でかいの乗れる人」の問いかけに、すかさず「ハイ!」と答える。ユニック号(24才雌)の馬装のため、同班の生徒が別ゲートへ曳き馬するが、禁止されている馬の後ろを歩いてしまう。インストラクターに「ろく」の質問をするが、説明が続いているにもかかわらず途中で興味をひかれた方に行ってしまう。

補助してもらい騎乗する。高さや不安定さからか「こええー」と言う。本人の意思を確認してからインストラクターの曳き馬で発進する。

周回を重ねると表情も和らぎ、待っている生徒付近になると笑顔が見られる。2順目以降はインストラクターからの促しもあり、自分の力で騎乗する。自分で乗れたことに

笑顔が見られる。大きな声で「お願いします」と言う。下馬後の馬への愛撫は数回指先でなでる程度で、儀式的に行っているように見える。順番を待っている間は身体全体を強く緊張させたり奇声をあげて周囲を徘徊し、馬の後ろに行きそうになって注意を受ける。

11月9日(金)

インストラクターから、1人で鞍に上がるようよう促され、アドバイスを受けながら自力で鞍に登り座る。着座直後は「こええ」と言う。3回目の今日は発進・停止・回転を習う。インストラクターが、馬を口笛で導いていたので怖がる様子は見られない。馬が指示通りに動くときと安心した表情をする。搬送される競馬馬を見て「競馬馬って立派だな」と言い、模範馬術には「スピードを自由に扱っている」と発言する。当日の予定が終了した後に全員が自由に人参を与える時間を設けた。馬が口にくわえる前に人参を離してしまうことは変わらないが、1、2回目より色々な馬に人参を与えようとする姿が見られた。

(2) 事例 2

中学部2年生のU(女14才)は自閉的傾向が強く、オウム返しのような会話が多い。拒否は、はっきりと伝えることができる。動物に対して興味はあるが、小動物が苦手である。犬などの動物との関わりは、綱でしっかりと縛られているときは近くに寄る事ができるが、そうでない時は怖がる。

馬という動物と「馬」という名前は一致しているが実物は知らない。1学期は不快な声や音、苦手な生徒の姿が見えると不安定になり、自・他傷行為を伴うパニックになること多く見られた。2学期に入ると、言葉で不快を伝えられるようになり、我慢できないときは、「その場を離れたい」と伝えることができるようになっている。

《3日間の学習の記録》

10月26日(金)

バスから降りクラブハウスに挨拶に行く途中から「馬に乗らない」と独り言を繰り返していた。厩舎入口近くのサラブレッドに生徒が集まり見えていたが、Uは「こわーい」と言って近づこうとはせず離れたところで見ていた。この間不安定な状態が見られたが、ポニーの馬装をするため、別の馬房に教師に寄り添うように向かった。ポニーが馬房にいるときも5メートル以上はなれたところで見ていた。ブラッシングや馬装をするときも怖がって近寄ることができない。インストラクターの「ブラッシングをしようか?」の声かけにも「しない」といって近寄らない。不安定な状態が続いたが、練習馬場でポニーに乗る友達を見ているうちに表情にも落ち着きが見え始める。

N教諭に「一緒に乗る?」と言われ「一緒に乗る」と言う。恐る恐るではあるが、ゆっくりポニーの側に近寄りポニーに乗る。表情は緊張しているが、横にN教諭がついて馬場

を二周することができた。1周目はN教諭の手を握っていたが、2周目は教師の促しもあり鞍の取っ手を掴んで乗る様子が見られた。

ポニーから降りた後は、緊張が解けたのか、隣の練習馬場でジャンプしたり走ったりしていた。

ポニーを馬房に戻し、ブラッシングするためにロープで繋いだところを確認してから、初めて自分で近づく。初めは柵越しに見ていたが、友達が馬装を解く姿をじっと見ているので「してみようか。」と声をかけてみた。ポニーの顔のほうに教師が立ち、ポニーの顔がUに接近しないように工夫することでブラッシングをすることができた。教師が手でポニーの背中をなで「かわいいね」「やさしい」「きもちいいね」などと言うと、Uも「かわいいね」と言いながらなでた。ポニーの活動が終わると自ら厩舎の入口に行き馬たちをじっと見ている。そのとき「やさしいね」と自分に言い聞かせるように繰り返し言っていた。

午後の厩舎活動は、馬の顔が寄ってくると怖がるので間に教師が立って行った。馬の顔が近づく怖がってホースを離してしまう。馬のいない馬房のボロ取りは臭いを嫌がるかと予測していたが、気にすることなく活動を続けていた。

昼休みの自由活動で馬房にいる馬の腰辺りを「かわいいー」といいながら、いつでも逃げられる態勢でなでていた。人參はもう少しのところまでやることができなかった。

11月2日（金）

行きのバスの中では「馬かわいいね」と繰り返す。先週の日曜日に保護者の会が出張レッスンを依頼し、このときも馬に乗ったこともあるのか、前回のよう緊張した様子はあまりない。

到着後厩舎通路からポニーに会いに行っていたが、怖がらず近づくことができたので、人參を渡すとポニーが口にくわえるまで持っていることができた。（人參は前回の2倍の長さに配慮した）

午前の厩務作業は、手順を覚えていて、足でおがくずをよけ、出てきたボロを取る様子が見られた。厩舎の掃き掃除は、馬のいない馬房の前を掃除した。水やりは前回と同じく馬が顔を出す所は怖がる。しかし今日はホースを離してしまうことはなかった。餌やりは馬が騒々しく、とても怖がったので馬のいない飼馬桶のえさやりを行った。

午後に、乗馬するサラブレッドを馬房から曳き連れるとき手綱を持つことはできなかったが、横について歩くことはできた。馬場では友達の乗る姿を静かに見ているが、「Uが乗る番だよ」と知らせると、前回とは違い自らさつと馬の側にいった。インストラクターに支えてもらいながら鞍に乗り一周した後、はっきりした口調で「行く」と言ったので、もう一周する。二週目で止まったとき「降りる」と言ったので下馬する。少し緊張した表情が見られたが、

二週目は周りの景色を眺める様子があり余裕があるように見えた。2順目に「乗る？」と聞くと「乗る」と言うので馬の側まで行ったが「乗らない」と戻りそうになったので、「もう一回だけ乗ろうか」と声をかけると「乗る」と言って乗った。一周すると「降りる」と言ったので下馬する。最後に人參をやるよう促してみたが難しかった。しかし、サラブレッドの額を触ることができた。

11月9日（金）

到着後、厩舎の中に入る。恐々とした様子だが人參をやることができた。午前の活動では、馬房から馬を出し馬装する手伝いができた。

Uが恐怖感をもつ前に乗れるよう配慮したが、友達が先に乗ることになったので、次に乗ることになった。今日は怖がることなくスムーズに乗ることができた。乗っているときは前回に比べて姿勢も良く、顔もリラックスしていたように思う。練習馬場をインストラクターの曳き馬で2周した。2順目からは、乗馬・下馬が自分でできるようになった。2順目以降、意欲のある生徒の確認をしたかったので、希望する生徒を募るとUは真っ先に手を挙げる。3順目、4順目も同様に手を上げた。4順目の後半は、インストラクターが曳き綱を放し1人で馬に乗らせてくれたが、手綱を放したことに気づくと表情が硬くなった。

（3）事例の考察と成果

両者とも新しい活動には消極的だが、馬の学習においてのFは導入時から馬に関心を持つようすと、3回の活動内容や馬に対しても積極的かつ好意的であった。Fはマイペースな行動も時にあったが、学校での形式的な挨拶ではなく、受付や、インストラクターに対する生き活きとした発問、自らブーツやヘルメットを借りに行く等の積極的で、かつ自発的な行動が見られた。乗馬中は緊張してせいか、この間の奇声は減少しているが、順番を待っている間は奇声と徘徊が再度見られる。

乗馬中奇声の減少は認められるが、Fの生活でどのような時と場面に発生するのか掌握できていない事と、実施回数が少ないので、乗馬が奇声の減少に何らかの作用があるか否かは判断できにくい。

実物の馬を見ると混乱してしまったUは、動物に苦手意識があるので関わり方を配慮したつもりだが、初日の「馬乗らない？」の拒否サインを受け止め、自己決定がなされるまで待つ必要があった。活動全体的にUが怖がらないよう教師が先行した声掛け・促しをしたことで、Uが真意で馬と、その活動に関わろうとしたかを阻んでしまった可能性が大きい。Uは段階的に乗馬方法を体験できたことも成果であるが、それは活動を進める上で行われたものであって、Uが希望する馬への関わり方を実現した上での成果は、これらとは別の視点から検討して見る必要があるであろう。

4. 全体の考察

生徒に見られた行動から、「今の自分は何々をしたい」という欲求から「実現する」ためにはどのような行動をすべきか」に至るセルフマネジメントが明確に行われている様子を窺うことができた。このような積極的な活動は随所に見られた。

他方、要求の表現を明確に行うことに困難があり、同時に馬に対して恐怖心を持っている自閉的傾向の生徒に対して援助をしようとする場合、教師が真意を汲もうとして過剰なかかわりをしてしまうことがある。その結果、生徒自身が自発的な行動として乗馬を行ったのか教師が「乗せてしまった」のかについての判断が非常に困難になってしまう。教師は活動の性質をより理解しながら慎重に関わらなければ自己決定の土壌は養われないであろう。

このように、「自己実現の過程」が指導者の独断で削がれてしまった可能性があることは、本校が今後、様々な場面で生徒の学習支援を行う上での大きな反省点でもあり、課題である。自己決定を育む活動として「したい」「して下さい」という実現欲求が湧き、自らが持ち得る伝達手段で伝え、実現できる満足感、学校の授業ではなかなか実現しにくいものであろう。殊更、教師・生徒という関係の中で得ようとするならば教師は高度な技術と人格が必要かもしれない。

馬と、障害のある生徒が互いに許容し、共鳴しあう関係は、障害者が健常者に対し伝達するよりもストレスが少ないかもしれない。障害者の乗馬方法の体得は、これらの関係が成されているならば、よりストレスの少ない状況下で満足感を得られる活動と考える。

科学的には証明されてはいないが、乗馬のような数少ない非日常的活動で得るポジティブな体験は、情緒の安定・人格形成に良い影響を与えるのではないだろうか。障害を持つ子供の保護者の多くは、我が子の心身の成長に惜しまない努力を注ぎ、可能性を引き出す多くの情報と活動を求めていることに違いない。成長の喜びは、育む糧となり子へ還元される好適な循環が障害者とその親に潤いをもたらすだろう。馬を用いた学習は、その可能性を導きやすい教材として有効だと思うし、多くの実践が行われる中から更に有効な手段を発見してもらいたい。

馬を用いた学習における結果・評価は「馬に乗れた」「関わられた」までの間、生徒自らの迷いから生み出され、自己決定するまでのプロセスが全てであると言っても構わないと思うし、指導者が自発的な行動を見守れる姿勢が基本であってこそ、生徒はその姿をより明確に映し出してくれると活動を終えて痛感した。

5. 反省点と今後への展望

(1) 開催時期と回数について

実施回数が少なく、継続的な実施と経過を観察できなかったため、わずかな記録からは新たな支援方法を導き出すに至らなかった。今後以下のような工夫をしていく必要がある。

年度当初から季節などを考慮しても、可能であると思われる回数を行いたい。今年度は試験的な3回限りだったが、子どもたちには慣れるまでには至らなかった様子が見られるし、慣れていくことで生徒達の余裕も出るようになってくると思う。次年度は生徒の負担が大きい冬季を除いて毎月1～2回行いながら、生徒自らが「本当にしてみたい」活動をみつけ目的的に行動する様子が見られるような実施を工夫したい。

(2) 実施場所について

県のほぼ最南端に位置する本校から、金沢市校外の石川県馬事振興協会までは、約60kmあるが、双方施設の近辺にはインターチェンジがあるため、高速道路を使用すれば50分程で現地まで移動できる。この間を利用して、その日の活動を知らせ生徒の健康状態などを見ることができた。帰路は馬に乗った思い出を生徒と共に話したり、次回の要望や反省点などを話し合う良い機会になった。生徒らもバスの揺れと馬に乗ったことで心地よい疲労感を覚えたようであった。

(3) 移動手段について

障害のある人達の望む活動が移動を必要とする場合には、障害者・介助者双方の負担を最小限、かつ最善の移動方法を模索しなければならない。

(4) 活動時間について

午前中2時間、午後1時間30分の活動時間の設定理由は、生徒の登下校の時刻、現地までの移動時間、昼食・休憩時間を総合的に配分したためである。乗馬と厩舎作業班に分けた少人数の活動は、厩舎作業では生徒1人1人がインストラクターとの十分な関わりに、乗馬では待ち時間の短縮につながった。

(5) 活動の展開と指導について

この活動は、個別の指導計画に立てた自立活動のいずれの目標に、馬の学習はどのような効果があるのか、生徒自らが能動的に行動するのにとって教師のどのような支援が最適なのか、また、支援方法が適切であるかどうかを考える良い機会であると考えた。

私達は、第1に子どもの「馬に対する興味」と願い(見

る、触れる、乗る)の尊重、第2に子どもとインストラクターとの交流や厩舎作業などの過程で必要が生じた場合のみの補助(橋渡しの存在)を心がけた。なぜならば、触って見たい、抱いてみたいという内発的動機は教師が先導してしまうことによって、その現われを阻害してしまう可能性があり、能動的な活動にはならないと思われたからである。

実際の場面では、回数を重ねるごとに生徒の乗馬意欲が増す様子が見られ、乗馬までの時間を待ちきれない生徒が見られた。また、本心は馬に触れてみたいのになかなか決心がつかずに泣いている生徒への「触りたい」意欲を配慮し、自ら触れるまで待つことが大切なのか、それとも「生徒に最も良いと思われる方法で教師が触れるよう支援すること」が結果として「触れてみたい」という意欲を実現することになるのかが論点となった。他方、私たち教師自身の中に「3回しかないのだから、せめて1回でも…」という気持ちが生まれ、無意識のうちに教師主導の展開にしてしまった点があった。馬を見る、触れる、そして「何々をしたい」という生徒自身の自己決定の意欲を、計画不足と環境の不整備、教師自身の不慣れの為に、最も重要な部分が削がれてしまったことは大きな反省であり、次年度活動を行う際に改善の不可欠な点である。経験を重ね、様々な局面での配慮や対応方法を熟知することを通じ、その都度に起こる一つ一つのことに対処していくことができると考えるが、活動を重ねるたびにまた新たな課題が生まれるかもしれないという予感を禁じ得ない。

また、企画者の力量の不足から、教員への理解・説明の不徹底、現地スタッフへの的確でない要望の伝達と、「何をどこまで」という活動を行う上での目標が明確に示せなかったことも反省の一つである。

以下、まとめて主な改善点を挙げる。

- ・今年度の反省を基に新たな目標の設定もしくは改善を行う。
- ・記録したプロセスを、評価する手段が必要。
- ・教師個人が認識を深め、指導の共通理解を図る。
- ・個に応じた活動の細分化と手法の選択肢を増やし内容を充実させる。
- ・そのためにインストラクターとの綿密な打ち合わせや、活動の理解を求める。
- ・活動経費の根拠が1年毎に更新されるため、長期的な記録が保証されない。長いスパンでの記録を得るためにも、継続的な取り組みが必要である。

なお、今回の活動では、小松療育園の作業療法士、西川亜希子先生に同行・ご指導をいただいた。活動を行う前にも肢体不自由者と乗馬の効果などたくさんの資料を提供していただきながら、本職の合間を縫って1、3回目共、専門的な指導やアイデアを受けられたことは大きな収穫であった。今後も協力を得ながら、肢体不自由のある生徒の

乗馬による効果を長期的に観察してみたい。

【資料】

1. 実施施設

(社)石川県馬事振興協会

所在地：金沢市八田町西1番地 076-258-5740

概要

(馬場)

練習馬場(20×70m)

障害飛越競技場(70×70m)

馬場馬術競技場(20×60m)

屋内馬場(40×20m)

(施設)

A 厩舎(27頭収容)

B 厩舎(15頭収容)

C 厩舎(17頭収容)

外来厩舎(42頭収容)

クラブハウス(更衣室、シャワー室、休憩室、会議室、事務室、観覧スタンド)

2. 施設における障害者対応の経験

県内授産施設の成人や、肢体不自由養護学校の遠足で障害者をポニーで周回する乗馬を行ったことがある。サラブレッドの乗馬は安全配慮上行っておらず、錦城養護学校が初めてである。障害者を乗馬させるときに、どのようなレッスンを行えばよいのか具体的な内容の指示がなかったため、今回はより多く馬に関わりを持ってもらう事が最適と考え、規定の時間を設けずに行った。馬具等特別な物を用意することはしなかった。作業手順や、乗馬方法についての説明は、なるべく簡単な言葉をつかうよう配慮した。今年は、双方共が初めての試みであったので、共通理解が図れていなかった。活動は馬術習得の要素が多かったと感じる。このことから馬を用いた教育活動を補助するには、インストラクターがどのように馬を操ればよいのか分からなかった。

3. 実施に関わる経済的な根拠

平成13年度石川県教育委員会が行った「県立学校活性化マイプラン」に承認され実施した。

- ・総事業費 … 254千円
- ・使用料 … 64千円
(生徒乗馬料、教員夏季研修での乗馬料)
- ・賃借料 … 189千円
(借り上げバス)
- ・役務費 … 1千円
(礼状切手代金)

以上

養護学校における在来馬とのかかわりを活かした学習の試み

安川 千壽子

(長野県木曾養護学校)

I. 学校の概要

本校は、平成8年度に開校した長野県木曾郡木曾福島町にある県立の知的障害養護学校である。小・中・高等部を合わせた各年度の全校児童生徒数が28～39名という、とても小さな養護学校で、寄宿舎を併設している。木材をふんだんに使った校舎、立ち上がろうとする木曾馬像を配したカリオン、玄関ホールに掛けられた漆の技法を駆使して描かれた御岳山の絵画など地域の特色を活かした学校環境が整えられている。

学校の周辺には、花見ができる散歩道や魚が泳ぐ川があったり、学校から歩いて10分ほどの所に学友林があり、山菜を採ったり、キノコの栽培ができたりするなどの自然環境に恵まれている。

学校が建つ地区には、学校協力会という地域の方々との組織があり、行事や環境整備などで多くの地域の方々に来校されて、子ども達の活動を支えてくださっている。

長年にわたる地域の方々からの強い要望で開校された養護学校なので、開校以来教育課程編成の基本方針に「地域の自然、産業、人々から学び、共に育ち合える教育実践」を据えており、交流的な学習や地域の方々の学習への技術協力なども比較的スムーズに実現し、木曾馬の里での様々な学習、木工の技術指導や環境整備での共同作業、総合的な学習の時間、産業現場等における実習、学校祭や学習発表会での交流などで地域の方々とのかかわりを深めながら、児童生徒の自立する力を高める学習をめざして実践研究をすすめている。

II. 木曾馬とのかかわりを活かした学習への経過

地域の自然、産業、人々に学ぶという本校の基本方針により、開校年度から地域の素材を活かした学習の試みを行っており、その中の一つに地域の自然に親しみながら、縦割りグループで活動して校内交流を深めようとする全校遠足がある。開校年度から4年間、小学部から高等部という年齢に差がある児童生徒と一緒に活動できる場所として、リニューアルオープンしたばかりの「木曾馬の里」が目的の地となった。

開校年度である平成8年の全校遠足当時、乗馬体験のある児童生徒はほとんどいなかったが、多くの児童生徒が

「木曾馬の里」の職員の方や教師の支援を受けて馬に乗り、笑顔を見せたり、Vサインをしたりして喜ぶ姿が見られた。しかし、何人かの児童生徒は、木曾馬におそろおそろ近づいただけだったり、怖いと言って身体を硬くして涙ぐんだり、馬房に近づくことさえ嫌がって逃げてしまったりした。

翌年からは、木曾馬におそろおそろ近づいただけだった児童や馬房に近づくことができなかった生徒が乗馬することができるようになったり、身体を硬くして乗馬していた児童生徒がリラックスした表情を見せたりというような変化が見られたり、前年の乗馬の様子を覚えていて自分で目標を決めて乗馬する生徒や乗馬の後馬の側を離れず再度乗りたがる児童がいたり、初めての時は泣いて木曾馬を怖がっていた高等部の生徒が、かかわりを増す毎に木曾馬が好きになり「木曾馬の里」で開かれた木曾馬運動会に自分から参加して部門優勝をしたことで自信をもち「動物を世話する仕事がしたい」と言い出すなど、児童生徒の木曾馬に対する興味・感心が具体的な姿を通して見えてきた。

平成10年2月には、社会経験を広げたいという教師と保護者の願いから、中学部生徒1名が木曾馬の里で4日間の職場体験を行い、乗馬の場面でリラックスした表情を見せたり、作業に意欲的に取り組むようになったりと大きな変化を見せた。

これらのことから、木曾馬とのかかわりを通じて児童生徒の自立する力を高めていくことができる可能性があるのではないかと考え、教育課程への位置付けを模索するようになった。

1. 厩務作業を活用した職業的な学習の取り組みの実践例

平成10年2月	中学部生徒2年1名	「木曾馬の里」で職場体験
平成10年5月	高等部生徒2年1名	「木曾馬の里」で現場実習
平成11年2月	中学部生徒3年1名	「木曾馬の里」で職場体験
平成11年6月	高等部生徒1～3年17名	「木曾馬の里」で牧場実習
	高等部生徒1年6名	「木曾馬の里」で職場体験
	高等部生徒1年2名	「木曾馬の里」で現場実習
11月	高等部生徒1年2名	

「木曾馬の里」で現場実習

高等部生徒2年1名

「ホテル木曾路」の木曾馬牧場で現場実習

(1) 主な活動

① 馬房清掃(ぼろ取り・おがこ撒き)・通路清掃・水入れ・牧草集め

② 屋内馬場の水撒きと整地・ブラッシング・馬装手伝い・引き馬・乗馬

(2) 高等部牧場実習の反省から

- ・馬に乗ることを楽しみにしている生徒が多く、励みになっていたようだ。
- ・初めての仕事だった生徒が多かったにもかかわらず、積極的な姿がみられた。
- ・ぼろ取り、通路清掃、屋内馬場の整地などよい仕事があったが、高等部生全員が一度に実習すると仕事量が少ない。

2. 厩務作業と乗馬体験学習の試みの実践例

対象：馬とのかかわりに興味・関心があると思われる児童・生徒(9名)

平成11年12月(2日間)

※ 指導・助言 滝坂信一、笹本 健(国立特殊教育総合研究所)

(1) 主な活動

1日目【高等部生徒】ブラッシング・馬装手伝い・乗馬・ぼろ取り・えさやり・通路清掃

【小学部児童】乗馬・えさやり

2日目【高等部生徒】馬装手伝い・乗馬・ぼろ取り

【小学部児童】ブラッシング・馬との歩行・乗馬

(2) 児童生徒の様子から

- ・「木曾馬の里」へ行くことが分かると、にこにこしたり、いそいでスクールバスに向かったりする姿が見られた。
- ・馬に乗った後、一人一人が指を鳴らしたり、「お願いします」「しゅっぱーっ!」と言ったりなどして、馬の発進に対して意思表示をしていた。
- ・乗馬中に笑顔がでる子が多く、学習が終わっても降りたがらなかった子もいた。
- ・高等部生の中には、ブラッシングやぼろ取りに自分から取り組むことができた生徒、引き馬や乗馬を希望して自らその場へ向かって活動した生徒がいた。

実践例1・2から、木曾馬とのかかわりが児童生徒の活動への意欲を喚起したり、コミュニケーション手段や社会性を広げたりして自立する力を高める機会(素材)になる可能性が強く示唆されたため、平成12年度から学校体制を整えたり、実施について「木曾馬の里」の設置・運営主体である木曾郡開田村の協力を得たりして、教育課程に位置づけることにした。

Ⅲ. 馬の特性を活用した指導の展開

1. 実施にあたって

スクールバスで30分程の距離にある屋内馬場など設備が整った「木曾馬の里」があるという地域的な条件と、その施設職員の方々が障害のある子どもの受け入れに協力的であるという条件を活かし、馬の特性を利用した学習を教育課程の中に位置づけ、意欲と主体性を大事にした自立活動や働く意欲と働く力を育てる職業教育などを行う。また、これらを通して、馬の特性を利用した学習の効果的な位置づけ方、学習内容、自立する力の高まりについての実態を明らかにする。

2. 実践内容・方法及び評価

- 学部や学級で計画をたて木曾馬とかかわる学習を行ったり、木曾馬とのかかわりが特に有効と思われる児童生徒が定期的に木曾馬の里へ行って学習を行ったりする。
- 個々の自立する力の高まりを集約し、有効な指導内容を分類整理する。
- 木曾馬の里で学習することで児童生徒が最大限に力を発揮できたり、自立する力が高まったりする場面を分析し、教育課程への効果的な位置づけや学習内容を具体化する。
- 馬とのかかわりで高まった自立する力と生活面に現れる自立する力の高まりの関連性を探り、有効な支援を考えるなどして、個別の教育計画に活かす。

3. 年間計画と教育課程への位置づけ(平成12・13年度)

- (1) 個別の定期的な馬の学習(小学部~高等部・自立活動)
4月中旬~7月中旬、9月上旬~11月中旬
年間10回程度
- (2) 牧場実習(高等部1年生・職業)
5月下旬~6月上旬 5日間
- (3) 総合的な学習の時間(平成12年度 高等部)
6月下旬 5日間
- (4) 合同学習(平成13年度小学部・高等部)
6月下旬 5日間
- (5) 産業現場等における実習(高等部・職業)
6月上~中旬、11月上~中旬
- (6) 学校祭での乗馬体験コーナー運営
(高等部・生活単元学習) 10月
- (7) 校外学習

(部・学級・作業班などで、児童生徒の興味・関心を活かした学習の一環として必要に応じて計画・実施)

※ 全校遠足では人数が多いために木曾馬とのかかわりが不十分で形式的になってしまい深まりが期待できないの

で、(1)～(7)のいずれかの形態で児童生徒全員が年間1回は木曾馬とのかかわりをもつようにする。

以下、形態ごとに実施した内容について述べる。

(1) 個別の定期的な馬の学習の展開

① 期間、実施日(年間で10回前後)

平成12年度 5月～7月中旬、9月～12月 金曜日

平成13年度 4月～7月中旬、9月～11月 木曜日

と金曜日のどちらか

※ 週末の帰省日は避けるようにする。

② 日程など

学習日に小学部～高等部の参加者がスクールバスを利用して、「木曾馬の里」に行き学習する。高等部生徒で帰路は路線バスを利用する場合もある。

平成12年度の学習時間 全体 10:00～11:30

平成13年度の学習時間 小学部・中学部 10:00～11:30

高等部 13:00～14:30

③ 参加児童生徒を決める手順

校外学習での木曾馬とのかかわりの様子、保護者の願い、子どもの特性やその子どもの自立活動全体の内容を考慮しての教師の願いなどを各部で検討し、各部から児童生徒を推薦する。

子どもにとっての必要性、学習時間、指導体制を総合的に検討し係が原案を作り、教育課程検討委員会に提案し学校として参加児童生徒を決定する。

保護者に参加承認を得て、最終的に決定とする。

④ 実践に関する打ち合わせと反省

原則として火曜日か木曜日15:15～15:55とするが必要に応じて適宜行う。

打ち合わせや反省については月又は週の予定で連絡する。

参加職員については打ち合わせ会と反省会への参加を最優先とする。

参加職員で分担して学習の記録を残し、これらの会で取り上げる。

⑤ 学習の流れと教師の動き(留意点、具体例など)

【前日までの教師の準備】

- ・ 願いや前時の様子から、学習計画をたてる。
(感想や願いなどを話せたり書けたりする子どもの場合は学習カードの使用も考える。)
- ・ 家での様子を知ったり、健康状態を把握したりする。
- ・ カレンダーに印をつけたり、前日の帰りの会で予告したりして馬の学習を意識づける。

【当日の朝の教師の動き】

- ・ 家での様子を知ったり、健康状態を把握したりする。
- ・ 朝の会などで馬の学習があることを確認する。
- ・ 登校から木曾馬の里へ向かうスクールバスの中での様子などを考慮して、学習内容を決める。
- ・ 木曾馬の里に着いてスクールバスを降りたら、木曾馬の里の方にあいさつをしたり、トイレに行くなどの学習の準備を始めたりするように促す。

※ 木曾馬の里に着いてから帰るまで、馬を驚かせない・馬の後ろを通らない・指をかまれないようにえさをやるなど安全面での配慮を徹底する。

学習の流れ	○ 留意点	◆具体例	※特に大事な学習条件など
乗馬の順番確認をする	○	子どもの実態に合わせて、馬の写真の下に子どもの顔写真を貼ったり、名字や名前を大きく書いて示したりして分かりやすくする。 (高等部の生徒の場合、条件が整えば希望を出し合って話し合いで決めることがあってもよい。)	
順番を待つ	○	馬にかかわったり、仕事を手伝ったり、その子にあった活動ができるようにする。 ◆ 馬にかかわる (ブラッシング・馬装の手伝い・馬が準備運動で歩く時一緒に歩くなど) ◆ 仕事を手伝う(通路の清掃・水入れ・えさ運びなど) ◆ 放牧されている馬を見る、散歩するなど	
乗馬の準備をする	○	子どもの実態に合わせて簡単な準備体操をすることもある。 ○ サイズの丁度よい帽子をかぶれるように支援する。 (あご紐をすることについては補助が必要な児童生徒が多い。) ○ 厚着をしていたり、馬具にかかりそうな紐がついている服を着ていたりしたら、安全を考えて脱いだ方がよいことを話して脱いでもらうようにする。	

馬に近づく	<ul style="list-style-type: none"> ○ 前に乗馬していた子どもが馬を降りて馬場を出てから、次の子どもが馬場に入るようにする。 ○ 子どもの名前を呼んだり、名前のカードや写真を示したりしてその子の順番になったことを伝え、馬に乗るという意思表示を確認する。 (必要最低限の声や支援で行うようにする。) ○ 馬場に入ったら、馬を驚かせないように、前から静かにゆっくり近寄るようにする。 (子どもの状況に合わせて支援する。急がせたり、無理強いしたりすることはない。) ○ 馬にあいさつをするように促す。(一人でできるようになったら見守る。) ◆ 首のつけねあたりをなでたり、軽くたいたりする。
馬に乗る	<ul style="list-style-type: none"> ○ 馬の左側から乗る。 子どもの状況によっては、乗せてほしいという依頼や意思表示が出るのを待つこともある。(自分で乗る場合と補助されて乗る場合がある。) ◆ 踏み台を使って自分で乗る。 ◆ 補助してもらって地面から乗る場合には、馬の左側に立ち、両手で鞍のグリップ(取っ手)を持ち、右足で立って左足を膝から曲げる姿勢をとると乗せてもらいやすい。 (曲げた左足を補助する人に支えてもらおうと、そこが支点になって体を持ち上げやすくなるため) ※ 肢体不自由の障害がある子どもの場合は、両サイドに立ち複数で補助するなど、特に適切な補助が必要になる。 ※ 使用する鞍は、グリップ(取っ手)があるだけで、子どもに馬の動きや体温の温かさが伝わりやすい軽乗鞍とする。 ○ 状況に応じて、子どもの希望を聞いたり、教師が学習の流れを説明したりして、可能な範囲で学習内容を確認しあう。 ○ 子どもが馬の背に乗ったことを実感し、出発してもよい状況になるまで待つ。 ○ 障害の状況や子どもの好みにもよるが、靴と靴下を脱いで裸足になって乗馬することもよい。
出発の合図をする	<ul style="list-style-type: none"> ○ その子のできる出発の合図がでるまで待つ。 ◆ 手を挙げる。 ◆ 「あー」などの声をだす。 ◆ 「出発進行!」「お願いします」などと言う。 ◆ 馬の腹を軽く蹴って馬に合図をする。など
1・2周	<ul style="list-style-type: none"> ○ 心身の緊張がほぐれていくので、並足でゆっくり進む。 ○ 子どもの状況を見たり、子どもからサインがでたりしたら、子どもの腰と足に手を添えるなどして、子どもが安心して乗馬できるように補助する。(乗馬中、特に大切に支援になる。) ○ 子どもの様子によっては、この段階が3周以上になることもある。
3～8周	<ul style="list-style-type: none"> ○ 願いや課題にそった学習を行う。 ◆ ボール、お手玉、輪、好きなぬいぐるみなど子どもが気に入っている物を持つ。 ◆ 持った物の受け渡しをする。 ◆ 目をつぶって乗る。(子どもの様子を見て時間や距離を調整する。) ◆ 手を離して乗る。 (片手づつ離す・両手を離す・子どもの様子を見て手を離す時間やグリップからの距離を調整する。) ◆ 色々な体の動きに挑戦する。 <ul style="list-style-type: none"> ・腰のあたりで手を組む・手をあげる(前・上・横) ・手を平行に保つ(片手・両手)・馬上体操をする ・好きなポーズを取る・後ろ向きで乗る・横座りで乗るなど ◆ 途中で止まって、鏡に写った自分の姿を見たり、馬の背に仰向けに寝て体を伸ばしたりする。 ◆ 手前を変える。(左回り・右回り)

	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 馬を円周に合わせて歩かせる（巻乗り・左回り、右回り） ◆ 馬をS字や8の字に歩かせる。 ◆ 子どもの状況に合わせて、早めの並足、早足など馬の速さを調整する。 ※ 教師主導にならないように、子どもの様子やサインをよく見たり、子どもの願いを聞いたりしながら学習を進める。学習計画にとらわれず、状況に合わせて、支援を段階的に減らしていったり、支援の方法やタイミングを工夫したりして、最適な支援ができるように心がける。
9・10周	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基本の姿勢でゆっくり進む。 ○ 学習が終わることを伝え、降りる準備（気持ちの切り替えなど）ができるようにする。
馬から降りる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 馬が止まったら、しみじみと馬の感触を楽しむ時間をとる。 ◆ 基本の姿勢で余韻を楽しむ。 ◆ 馬の背に仰向けに寝て体を伸ばす。 ◆ 馬の左側に両足を、馬の右側に両手を垂らして馬の背に腹這いになり、ストレッチをする。 ○ 降りる気持ちを確かしてから、降りる支援をする。 ◆ 馬の左側に両足を垂らして馬の背に腹這いになり、馬の左側にゆっくり降りる。 ○ 必要に応じて、急激に落ちないように体を支えて補助する。 ※ 「降りたくない」という意思表示が合った場合は、状況説明などをして降りるように促すが、どうしても降りたくないという場合は、1周とか半周とかいう約束をして、約束の範囲で乗馬をする。状況に応じて降ろすタイミングを判断する。
馬から離れ馬場を出る	<ul style="list-style-type: none"> ○ 馬にお礼のあいさつをするように促す。（一人でできるようになったら見守る。） ◆ 馬の首のつけねあたりを撫でたり軽くたたいたりする。 ◆ 馬の名前を呼びながら「ありがとう」などの声をかける。 ◆ 人參や氷砂糖をあげる。（基本的には全員の学習が終わった後の方がよいが、状況によっては認めることある。） ○ 馬を驚かせないように、前から静かにゆっくり離れて馬場を出るようにする。
かたづけ・身支度	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体や気持ちの状況を感じたり、表現したりできる時間を取る。 ○ 帽子を脱いで、棚のあった場所に返すようにする。（一人でできるようになったら確認だけする。） ○ 脱いであった服を着るなどして身支度を整えるようにする。
帰りの時間まで待つ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 馬にかかわったり、仕事を手伝ったり、ゆっくり休んだり、その子にあった活動をする。 ◆ 馬にかかわる。（馬装をとく手伝い・馬具のかたづけ・ブラッシング・馬の体拭きなど） ◆ 仕事を手伝う。（馬場のぼろ取りなど） ◆ 放牧されている馬を見る、散歩する、えさをやる、休む など
帰途につく	<ul style="list-style-type: none"> ○ 全員が乗り終え馬装をといたら、人參、氷砂糖、赤つめ草など木曾馬の里の方が許可してくれたものを馬にあげたり、馬の首のあたりを軽くたたいたり、馬の名前を呼んでお礼の声をかけたりして、馬への感謝の気持ちを育み、表現できるような働きかけをする。 ○ 木曾馬の方へあいさつするなど感謝の気持ちを伝えられるようにする。 ○ スクールバスの中での様子を見たり、感想を聞いたりする。 ○ 路線バスを利用する高等部生徒については、必要な学習を事前に行ったり、疑似体験をしてイメージを具体化したりする。

- ※ 馬場にいる時間は20分前後を目安として学習を組み立てる。
- ※ 学習の条件をできるだけ同じにしたり、より安全に学習ができたり、馬と子どもの集中力を高めたり維持したりするために屋内馬場での学習を原則とする。
- ※ 一人で乗ってみたいという希望があり馬への合図（出発・停止）が正確にできるようになった子どもには、一般的な乗馬を学習として行うこともある。

【学習後の教師の動き】

- 学習内容を確認したり、感想を聞いたりして、子どもが学習を振り返ることができるようにする。（感想や願いなどを話せたり書けたりする子どもの場合は学習カードの使用も考える。）
- 学習の様子、学校に戻ってからの様子、家での様子を記録する。
- 生活の中で子どもが馬のことを意識した行動をとったときや馬に関連した話題を出したときには、次の学習を楽しみにできるようなかわりをし期待感を高める。



《念願だった一人乗りをするJさん》

⑥ 成 果

(7) 参加した児童生徒の様子から

- コミュニケーション手段（意思表示など）や対人関係に広がりが見られた。
- 意欲的な行動や見通しをもった行動が多く見られるようになった。
- 学校では見られない動きをしたり、できなかった動きができるようになったりした。
- 乗馬したり、「木曽馬の里」に行ったりすることで、リラックスできた子どもが多かった。
- 木曽馬への興味・感心が高まり、乗馬に集中できるようになったり、えさをやって様子をじっと見ていたり、自分からブラッシングをしようしたり、学校生活の中で木曽馬を意識している行動（馬の学習の写真を指さす・自転車に乗って発進の合図をするなど）が見られたりするようになった。

(1) 運営面から

- 係が早めに牧場へ行き、準備の手伝いや打ち合わせをすることで学習がよりスムーズに行えた。
- スクールバスだけでなく、路線バスの利用も取り入れたことで、参加者の数と全体の学習時間を増やすことができた。

⑦ 課題として残ること

(7) 参加した児童生徒の様子から（→課題を解決するための方法など）

- 子どもの様子から、何をしたら良いのか、何が求められ

ているのかが分かりにくい場面があった。子どもの主体性を大切にしながらも、教師が願いを明確化して学習に取り組めるようにしたい。

- 教師主導で学習を行いがちなのでかわり方を改善する。
- 子どもの様子を的確に見とれるように研修を深める。
- 馬とかかわる順番を待っている子どもの活動をどのようにするか。
- どのようにしていたら良いかについて、馬の専門家である「木曽馬の里」の方から指導していただくようにする。
- 職員体制、チームワークの工夫が必要になる。

(1) 運営面から

- 係会を定期的に関き、必要な話し合いをすることが難しかった。
- 職員の研修を深めて、自立活動の学習としての成果を得られるような支援の方法を探る必要がある。
- 参加する児童生徒の決め方について職員間の共通理解を深めたい。
- 学習記録の取り方を工夫したい。

毎回記録係を置くことが困難な状況では、担当教師が学習のあとで記録を書くことになる。この記録は印象記述になってしまい、客観的な記録になりにくい場合が多い。

- 記録用紙の形式と職員体制に工夫が必要だ。
- 記録用紙の形式については、以下のようなものが考えられる。

定期的な馬の学習記録用紙

【 部：氏名 】 (担当者：)

育ちへの願い	※ 個別の教育計画から	
定期的な馬の 学習での願い	児童・生徒	※ 聞き取り又は木曾馬とのかかわりの様子から
	保護者	※ 保護者との連携で進める学習から
	教師	※ 個別の教育計画や自立活動の内容を考慮して
学習計画	※ 願いを具現化するための支援などについて可能な範囲で計画する。 ※ 学習を進めながら訂正していく。 ※ 形式にそって学習計画まで作成し、学習回数で必要な枚数を印刷しておき、学習毎に本時の 願い以降を記録していく。	
月 日 第 時 本時の願い	児童・生徒	※ 保護者の願いも活かせるようにする。
	教師	
本時の 学習計画	※ 前時の様子や考察から、事前に考えておく。 ※ 可能な範囲で係が木曾馬の里へ連絡し、打ち合わせをする。 (子どもの様子、馬の状態などの情報交換が大事になる。)	
学習までの 様子	※ 当日の朝の様子(家・学校)と健康面での特記事項など ※ スクールバスへの乗り込み方、木曾馬の里へ向かっているときの様子、支援、 特記事項など	
馬場に入る まで	※ 活動内容、支援、様子、考察など	
馬場 での 学習	はじめ 願いに そった活動 おわり	※ 活動内容、支援、様子、考察など (乗った馬・使った馬具や道具・学習時間なども記録する。)
学習後の様子	※ 馬場を出てから帰校後の様子、保護者からの連絡など ※ 連絡ノートなどで学習の様子を保護者へ連絡する。	
学習を 振り返って	※ 学習を振り返って、反省・評価をする。 ※ 反省・評価から、次時の願いや学習計画を決め出し、次時の記録用紙に記入 する。 (係会で客観性を高めることも大事にする。)	

⑧ 個別の事例（平成13年度学習のまとめから）

(7) 高等部3学年 Fさん

<p>【障害の様子など】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉症 ・発語はないが、内言語は多く、人とのかかわりが広がりつつある。 ・繰り返しの活動で見通しがもてると、自分で教室移動をして必要な物を準備することができる。 ・汗をかいたり、雨にぬれたりしてストレスがたまると、声をだしたり、パニックを起こしたりすることがある。 ・物の位置などに関してこだわりが見られ、あるべき場所にあるべきものがないと自分でもとに戻したり、乗り物での座席を同じ所にしたりする傾向がある。 ・高等部2年の時、一人で泳げるようになったり、スキーでボーゲンの技術が向上しスピードコントロールをして曲がりながら滑れるようになったりした。どちらも、自分から繰り返し取り組み楽しんでいる様子が伺える。乗馬中の姿勢についても2年時に横座り・後ろ向きなどできることが増えた。 ・中学部2年から職場体験や産業現場等における実習で木曾馬の里へ通い、高等部2年から定期的な学習に参加した。 		
<p>【育ちへの願い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・安定した気持ちで生活し、一人でできることや人とのかかわりが増えてほしい。 <p>（自立する力としては意思表示・やりとり・見通し・情緒の安定・自主性）</p>		
学習での願い	生徒	・馬に楽しく乗りたい。
	保護者	・好きな活動に取り組んで安定して過ごしてほしい。
	教師	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな体の使い方を経験してほしい。 ・コミュニケーション手段が定着するようにしたい。 ・社会性や対人関係を広げたい。 ・安定して活動できる場面を増やしたい。
学習の様子	<p>【学習前】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・馬の学習を予告すると、高等部の教師を教室や廊下に展示してある馬の写真の所へ連れて行き指さしたり、学習中にパンフレットに載っている馬の写真を見つけて何度も指さしたり、馬の学習に行くまでにやるべきことを早くやっちゃって待っていたりすることがあった。 ・スクールバスに走って行って乗ったり、木曾馬の里へ行くまでの車中でリラックスした様子で静かにしていたりする姿が多く見られた。 ・木曾馬の里の方と一緒に木曾馬が放牧されている所へ行き、引き綱をつけてもらった後、一人で馬を引いてくることがあった。早足で歩くので馬との歩調は合わないことが多く、「ゆっくりね」と声をかけられることが多かった。 ・木曾馬の里の方が馬をつないでいる間に、軽乗鞍を二つ倉庫からもってきて「どっち？」と聞くような素振りを見せたり、はみや鞍下をもってきたりすることがあった。 ・指示された所をブラッシングしたり、鞍を馬の背に乗せたりして乗馬の準備を手伝うことができたが、毛並みにそってブラッシングしたり、鞍の前後を確認したりすることは正確にはできなかった。 <p>【学習中】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いつも決まった帽子をかぶって馬に近づき、両手でグリップを掴んで左足を軽く曲げて上げながら振り返り「乗せてほしい」という意思表示をすることができるようになった。 ・4月に2回、乗馬中に馬が急に方向を変えて怖い思いをしたため、そのときは乗馬をやめて逃げてしまった。その後は、横についている教師の手を握って乗馬することが続いたが、乗馬を拒否することはなかった。安心して乗れるようにすることを中心に学習を続けた。 ・6月下旬の学習時に、引き馬をして一緒に歩いてから乗馬したことで、一人でグリップをつかんで乗馬することができるようになった。その時に、横座りや後ろ向きなども2年生の時のようにできるようになったので、その後の学習では取り入れて行った。 	

学習の様子

- ・2学期に入り、乗馬中にボールをもって乗ることができたり、両手を教師に支えられて屋内馬場を半周できたりすることがあった。
- ・教師は学習を終えるつもりだった時、Fさんが横座りになったので降りるのだと思って補助しようとしたら「乗りたい!」と言った。(ように感じた。)そこで、「1周したら終わりでもいい?」と問うと頷いたので横座りで1周したが降りようとしなかった。「普通の座り方で1周したら終わりにしよう」と問うと頷き、1周した後はスムーズに降りたことがあった。
- ・馬へのあいさつやお礼については、声を掛けられてから行うことがほとんどだったが、馬に触れる時間が長くなり、触れる手の部分が多くなったりした。

【学習後】

- ・馬に人参をあげるとき、年度当初から筒の先に人参を挟んで渡すと一人でできていた。始めは筒の馬に最も遠い場所をもっていったが、だんだん馬の近くになり、2学期になると馬のすぐ近くを持って平気になっていった。筒は必要ないと考え、手でもって人参をあげるように促したが怖がっていてうまくできず、タイミングがあっただけだった。
- ・帰りの車中では、体の力が抜けたような状態になって、けらけら笑い続けることがあったり、静かに窓の外を見ていたりし、声をあげることはほとんどなかった。

考察

- ・学習に出かける前の様子などから、馬の学習を心待ちにしていたことが伺える。
- ・気持ちが高まりすぎて、乗馬しただけで満足してしまいがちだったが、屋内馬場で引き馬をしてから乗馬することで、乗馬にじっくり取り組めるようになっていったように思われる。
- ・怖い思いをした後にそのまま帰らず、しばらくして落ち着いてから意思確認をし、短時間乗馬して帰ったことが次の学習につながったと考えられる。また、Fくんの馬に乗りたいという気持ちが怖いという気持ちに勝っていたことからFくんの馬の学習への意欲が理解できると思われる。
- ・学習の見通しがもてるようになったことから、乗馬に必要なものを自分で用意しようとする活動がうまれてきたと思われる。継続して学習する機会がもっとあって経験できる回数が増えれば一つ一つの動きに正確さがついていくのではないかと思われる。
- ・馬に乗ったことでストレスが解消されたり、体がリラックスしたりし、乗馬後、体の力が抜けたような状態になったり、笑い続けたりしたと考えられるのではないか。このことから、Fさんにとっては定期的に学習に参加すること有効だったと思われる。
- ・2年生の時と同じ動きを3年生の時の乗馬中にも行ったが、一つ一つの動きがとてもスムーズにできるようになったと感じた。特に、横座りから後ろ向きになるきは、ほとんど支援なしで一人できることが多かった。



《馬上で姿勢を変えるFさん》

考えられる学習の流れ

木曾馬の里の方に軽く頭を下げながら膝を少し曲げて「あー」と言ってあいさつする→木曾馬の里の方と馬を連れに行き、引き馬をして連れてくる→鞍やはみや鞍下を準備する→示範を見たり、声をかけられたりしながら毛並みにそってブラッシングをする→補助してもらいながら鞍下と鞍を馬の背中に乗せる→木曾馬の里の方と引き馬をしながら屋内馬場を2～3周一緒に歩く→合図をし、補助してもらって馬に乗る→4～6周、並足で手前を変えたり巻き乗りをしたりしながら乗る→どんな乗り方をしたいか意思表示して乗る(横座り・後ろ向き2～3周くらい・補助されながら手を左右に伸ばして1周・ボールを両手で持って1周など)→前向きの安定した状態で1周乗る→止まった後、馬の背中に仰向けに寝てしばらくゆっくりする→馬を降りて手のひらで馬の首の付け根あたりを軽くたたいてお礼をする→馬からはずした馬具を器具庫に片づけたり、馬のブラッシングをしたりする→筒を使って人参をあげる→あいさつをして帰る

<p>【障害の様子など】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自閉的な傾向 ・肥満傾向があり体を動かすことに抵抗がある。 ・ピアノを弾いたり、ダンスをしたり、歌ったり、絵を描いたりすることが好きで、集中して創造的な活動ができる。 ・作業学習で見通しがもてると、手早く質の高い製品を作ることができる。 ・睡眠が充分に取れなかったり、周囲の人に常時同意を得ないと活動に移れなかったりすることが多い。 ・1年生の二学期に、希望して定期的な馬の学習に2回参加した経験がある。 		
<p>【育ちへの願い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味のあることや関心のあることを増やし、友達や教師と一緒に活動することを通して、安定した気持ちで生活を送れる中で、一人できることを増やしてほしい。 <p>(自立する力では興味・関心、集団参加・情緒の安定・自主性)</p>		
学 習 で の 願 い	生 徒	・馬のブラッシングをしたり、馬に乗ったりしたい。
	保護者	・安定して学習に取り組める時間を増やしたい。 ・肥満を少しでも解消できるようにしたい。
	教 師	・情緒の安定を図りたい。 ・自己決定の力を高めたい。 ・運動量を増やし、体重の増加をできるだけ防ぎたい。
学 習 の 様 子	<p>【学習前】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝の会や帰りの会で定期的な学習のことを話すと、表情をゆるめて「馬に乗りたい。」ということがあった。 ・木曽馬の里に向かうスクールバスの中では「大丈夫？」と問うことはあったが、回数的には比較的少ないように感じるの方が多かった。 ・ブラッシングは木曽馬の里の方や教師から「やってみる？」と聞かれると「やる。」と答えてやっていた。馬のすぐ側に立つことには抵抗があり、腰が引けている状態ではあったが、ブラシを動かす方向やどこをブラッシングするかについての指示は聞き入れて正確にできていた。 ・ブラッシングの終わりを自分で判断することはできなかったが、木曽馬の里の方の指示を聞いてブラッシングをやめ、自分で所定の場所へ道具をかたづけることはできた。 ・木曽馬の里の方と一緒に引き馬をすることがあった。木曽馬の里の方が馬との間に入っていると安定して馬と歩調を合わせて歩くことができていた。 <p>【学習中】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乗馬の順番がくると帽子をかぶって台にあがり一人で乗馬できることが多かった。 ・馬へのあいさつは忘れがちで、木曽馬の里の方や教師に「あいさつは？」と言われると馬の首あたりをそっとなでていた。 ・出発の合図は一人でできることが多く、準備ができると「お願いします」とはっきり言っていた。 ・乗馬中は、発語が少なく集中して活動にとりこんでいた。馬が馬場の低くなっている所に足をを入れてバランスを崩した時に「大丈夫？」と聞いたが教師が「大丈夫だよ」と答えたら、問いかけはその1回だけで後は15分ほどの学習中「大丈夫？」という問いかけはなく、教師が質問したことについての答えはしていた。 ・学習1回目から目をつぶって乗っていることができ、10秒くらいから始めて屋内馬場の半分くらいまで挑戦してできた。 ・4周ほど黙って乗っていた後、何か小声でつぶやいたので、問いかけると「回りたい。」とはっきり答えたことがあり、その後2回巻き乗りをしたところ笑顔が見られた。 	

- ・体が硬い（特には肩に力が入っている感じがよく分かる）状況ではあるが、補助なしで乗馬できたり、3回目からは手を離して乗ることに挑戦するようになったりした。4回目には両手を離して掌を上に向けて笑顔でポーズをとる姿も見られた。



《両手を広げたポーズのCさん》

【学習後】

- ・人参をあげることに最初はとても抵抗があった。3回目に教師と一緒に15cmくらいの長さに切った人参をあげることができたら、自分から「もう1回」と言って、再度人参を持って教師といっしょにあげることができた。その後、「鼻をなでる」と自分から言って、一人で馬の鼻をなでたことがあった。
- ・路線バスの中では、教師への問いかけはほとんどなかったり、眠っていたりした。
- ・絵を描いているときに、「馬の絵は描ける？」と聞くと、馬と自分を短時間で描いた。その後、何日か馬と自分の絵を自分から描いていた。
- ・馬の学習のまとめの時、躊躇なく馬に乗った感想を書いていた。他の作文とちがって、自分の気持ちの記述が入っていた。
- ・休み時間にピアノを弾いていたので「馬に乗っている感じを弾いてみて」と話すと、2つのメロディーを弾いてくれた。学習発表会で披露することにして練習したときに、最初の頃は2つのメロディーのどちらかを弾いていたが、だんだんと1つのメロディーだけを弾くようになっていった。

○ 保護者の感想（学習の様子を参観し、体験乗馬をした次の日の連絡ノートから）

- ・今日は、とても貴重な体験をさせていただきました。私も乗せていただきました。こんなに、気持ちよくリラックスできるものとは思ってもみませんでした。Cも10秒ほど目をつぶって乗っていたようです。
（中略）とてもラッキーな一日でした。一郎君（馬の名前）ありがとう。
（中略）帰りの車の中、Cは目をつぶって乗っていましたが、20分位して「大丈夫？笑っていい？」と繰り返し始めましたが、いつもより穏やかでした。
（中略）季節の変わり目は体の調子を崩しやすく、昨晩は眠りが浅かったかもしれません。今夜は7時から眠り熟睡しています。一郎君に感謝！機会があったら、もう一度行ってみたいです。今後の予定を教えてください。
【後日、下校後Cさんを馬に乗せに連れて行きたいというご希望を話されたり、お友達と再度乗馬に行かれたりした。】

学習の様子

考察

- ・馬が怖いという気持ちはあるが、馬に乗ることで感じる心地よさは意識できていて、興味をもって学習に参加できてきたようだ。
- ・えさをうまくあげられた経験から、少しずつかわりの幅が広がっているのので、回数を重ねることで学習に深まりがうまれそうだ。
- ・乗馬しているときに周囲の人に同意を求めることが少なく集中できることが多かったり、自分の気持ちをはっきり伝えることができたり、できるようになったことをはっきり意識できたりして、情緒の安定や自己決定の力の高まりに有効な学習になっていると思われる。
- ・運動面では、はっきりした効果は見られないが、乗馬した日に熟睡できたことがあったという保護者からの話から考えると、乗馬の時間や方法や回数を工夫することで効果が見られる可能性はあるのではないと思われる。

考えられる学習の流れ

どの馬で学習するかを教師の提案の中から選択する→ブラッシングをして乗馬の準備をする→屋内馬場を木曾馬の里の方と一緒に2周くらい引き馬をしながら一緒に歩く→帽子をかぶって準備をしたら馬にあいさつをして馬に乗る→4～6周くらい途中で手前を変えながら並足でゆっくり乗る→どんな乗り方をしたいか教師の提案の中から選択して行く（巻き乗り・片手ずつ離す・両手を離す・掌を下又は上に向ける・手を上げる位置を変えるなど）→安定した姿勢でゆっくり1・2周する→乗り終えた状況をゆっくり感じる時間をもつ（場合によっては感想を話す）→馬から降りる→自分で帽子を脱いで柵に返す→教師と一緒に人参をあげたり、馬の鼻に触れながら話しかけたりして馬にお礼をする→木曾馬の里の方にあいさつをしてからバス停まで歩く→教師と一緒に路線バスを利用して帰る。

<p>【障害の様子など】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 早産未熟児 ・ 脳性麻痺による体幹の機能障害 ・ 身障者手帳 1 種 3 級 ・ 1 歳時医療センターに母子入所以来、PT、OT による訓練を継続している。 		
<p>【育ちへの願い】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 意欲を持って取り組めることを増やしてほしい。(自立する力では興味・関心、自信) 		
学習での願い	生徒	・ 馬に乗ったり、えさをやったりしたい。
	保護者	・ 興味のあることに意欲的に取り組んでほしい。
	教師	・ 興味ある馬との活動を通して、意欲をもって取り組めることを増やしてほしい。 ・ 下肢機能の向上や体幹の維持を通して、身体の機能を回復できるようになってほしい。
学習の様子	<p>【学習前】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 遠足や校外学習などで乗馬の経験があり、乗った馬の名前はよく覚えていた。 「木曾馬の里」へ行くことについては、「〇月〇日に行くよね」とかなり前から楽しみにし、日記にも書いてきた。 <p>【学習中】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「ボスお願いね」「あと少し、頑張ってるね」などと声をかけながら馬に乗っていた。 ・ 慣れるまでは右足の股関節が痛いと言ったり、体の位置を自分で直すことができなかつたりしたが、回を重ねていくにつれて足の痛みがなくなったり、自分が乗りやすい位置に体を移動させたりすることができるようになってきた。また、同じ馬に乗っていても「イチロー、背が高くなったかな」「体の力が抜けてきた、慣れてきた」「補装具を取ったら温かい」と馬の感触を表現するようになった。 ・ 馬房で目にした馬の名前をすぐに覚え、牧場に放牧されている馬を見て名前を言い当てるようになった。 ・ 馬の学習があると必ず自分で人参を切って持って行った。始めは乱切り、次には棒状、更に長い人参を棒状に切るなどその都度、馬に食べさせやすい切り方を工夫してきた。馬に手をなめられても怖がることがなくなった。 <p>【学習後】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 馬の学習の後は必ず日記を書いていた。 ・ 馬の学習から帰ってきて疲れているにもかかわらず、自ら水着になり教師を誘ってウォータースライダーに向かった。 ・ プールでは毎日浮き輪を使って浮いていることが多かったが、ヘルパーを腕と腰につけて75メートルを泳ぐことができた。苦しくなってくると「ラッキー、見ててね、頑張るから」と馬の姿を思い浮かべ励みにしながら頑張った。 ・ 馬を引いてくださった木曾馬の里の方に自ら手紙を書いた。また、家でも学校でも馬の絵を夢中になって描いた。 ・ 馬の名前を忘れてしまっている教師に「先生はよく忘れられるね。私はラッキーやイチローのことが忘れられないよ。また馬の学習に行きたい。」と言ってきた。 	
	<p>考</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 馬の学習の後、馬の名前を呼びながらヘルパーをつけて75m泳ぐことに挑戦する姿から、馬は本児の心の支えとなる存在であったと思われる。また、教師に誘われてやっと取り組んでいたウォータースライダーだったが、馬の学習で疲れているにもかかわらず自ら水着になり教師を誘って取り組んだ。馬の学習を繰り返すことにより馬への思いが高まり、馬とかかわることにより気持ちが充分満たされたのだと思われる。このように馬の学習は、本児の気持ちを安定させ積極的に生活するために有効な学習であったと思われる。 <p>察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 馬の学習の後、木曾馬の里の方に自ら手紙を書いたり、毎日のように何枚も馬の絵を描いたり、馬を題材とした日記や作文、書き初めを書いたりし、本児の学習領域が広がり意欲的に取り組むことができた。馬の学習を続けることで更に意欲を持って取り組むことが増えてくるのではないかとと思われる。 	

考察	<ul style="list-style-type: none"> 馬の学習が始まったばかりの頃は、股関節の痛みを訴えることがあったが、繰り返すことによりなくなってきた。普段使わない筋肉を使ったための痛みだったようだ。また同じ馬に乗っていながら「馬が背が高くなったみたい」と感じたのは、背筋が伸びたからではないだろうか。更に、馬の動きに合わせて乗りやすい位置に自分で体を移動させることができるようになってきている。このように馬の学習により体の機能回復が期待できると思われる。
考えられる学習の流れ	<ul style="list-style-type: none"> できるだけ好きな馬とかかわれるように、木曽馬の里の方に可能な範囲で学習の時の馬を調整してもらう。 馬に乗るまでの時間を充分とり、本児が自ら馬に乗りたいと思えるようになってから馬に乗るようにする。 馬に人参をやったりブラッシングをしたり、馬にかかわることのできる時間を充分に確保する。 いろいろな馬を見ることを楽しみにしており、馬の名前や特徴を覚えては話題にすることが多かったので、馬房にいる馬や放牧されている馬を見る時間を確保していく。 まだ、一人で馬に乗ることに不安があるため、本児の気持ちを聞きながら腰や背筋や下肢に手を添え介助していく。 ゆっくりと屋内馬場を回り、心身ともにリラックスできるようにする。



《大好きなラッキーに乗るRさん》

(2) 牧場実習 (平成13年度を中心に)

① 趣 旨：

- (7) 学校を出て地域の職場で仕事をする中で、働く経験を広げる。
- (4) 働いたことが役に立つ体験をすることで働く喜びを感じる。
- (9) 任された仕事の出来栄を自分で判断したり、決まった時間内でできる仕事に精一杯取り組んだりすることを通して、働く気持ちを育む。

② 期 間：平成13年6月4日(月)～6月7日(木)

- ③ 日 程：
- 7：55 木曽福島駅発
 - 8：34 「木曽馬の里」バス停着
 - 9：00～12：00 午前の実習
 - 12：00～13：00 昼食
 - 13：00～16：00 午後の実習と一日のまとめ
 - 16：23 木曽馬の里バス停発
 - 17：00 木曽福島駅着

④ 対 象：高等部1年(生徒3名、学級担任3名)

⑤ 作業内容：

馬房の仕事・厩舎の通路清掃・馬の世話(ブラッシングなど)

馬場の整地・水まき・環境整備など

※ 作業終了後、乗馬体験

⑥ 準備するもの：

作業のできる服装(長袖・作業できるズボン)・着替え(作業用服装一式)

帽子・汚れてもよい靴(長靴)・汗ふき用タオル・弁

当・水筒軍手・ナップサック・ハンカチ・ティッシュ

⑦ 交通手段：路線バス

⑧ 留意点：

- (7) 木曽馬の里の方が仕事をされているところをよく見て、手伝わせていただくことから始める。
- (4) 教師はできるだけ指示を出さないようにしながら一緒に働き、生徒のできる姿を見つけるようにする。
- (9) 職業教育の視点から、学校以外の場所で、その道のプロのすごさを生徒に感じてもらうことを大事にする。

⑨ 生徒の感想から：

- (7) 仕事ができるようになった。馬と仲良くなれてよかった。全力で働いている人がいたから、これからの作業学



《一輪車でえさ運び》

習を全力でやりたい。

(f) 返事やあいさつは大きい声でできました。最後まで休むことなく働きました。教えてくれる人の話を聞けるようにしたいです。

(g) ブラッシングがやれてよかったです。上手になったと言われました。馬に乗ったとき、背筋が伸びて姿勢がよくなってきたと言われました。学校でも姿勢をよくしたいです。

⑩ 考察：

(7) 分かりやすい仕事がいくつかあったり、分からないことや必要なことを尋ねやすい雰囲気があったりするので、個別の実習の前に基本となることを学ぶためには効果的な学習になる。

(f) 路線バスを利用したり、道路を歩いたり、接したことの無い人（木曾馬の里の方・時には観光客）と接したりすることで、学校内ではできない体験ができ、社会性の高まりが期待できる。

(g) 「くさい、くさい」と言いながらもボロ取りを続けたり、えさや水をやる仕事に興味をもったりする生徒達の姿から、作業がうまくなっていくことや他者の役にたつ自分を意識することで意欲や自信が高まっているのではないと思われる。

（馬に乗せてもらうことが楽しいという生徒が多く、自分を乗せてくれる馬の役に立ちたいという気持ちが生じるのではないと思われる。）

(h) 学習カードの項目が作業学習や他の実習にも関連する内容になっているので、反省がしやすく、他の学習にも反省を活用できる可能性がある。

(i) 比較的大きく体を動かす作業で道具を使うことが多いので、手先の細かい仕事が苦手な生徒には、道具を使う経験や体の動きを広げることができるよい場面になる。

(k) 実習の時間と仕事量、支援の方法などについては生徒の実態に合わせて検討し改善する必要があるが、木曾馬にかかわったり、開田村の自然に親しんだりできることで情緒面での効果も期待できそうなので、教育課程への位置づけを工夫しながら継続していきたい。

(3) 総合的な学習の時間での試み【平成12年度・高等部】

① 単元名：「木曾馬の里へ行こう」

② 単元設定の理由：

新学習指導要領の実施に向かって総合的な学習の時間の試行がもっとも必要であると考え、学習素材を選択した所、高等部の生徒には作業学習での素材集めや全校遠足でなじみがあり、体験的な活動が複数可能な場所であり、地域の人々や自然とのかかわりが深まったり広がったりする可能性がある木曾馬の里が最適だということになった。

③ 単元展開：

学習の趣旨や時間数を確認する→教師が示した学習素材から選択する→木曾馬の里へ行き、やりたいことを具体化する→個々に学習をすすめる（学習内容をまとめる活動も含める）→学習内容を報告しあう

④ 参加者：高等部生徒全員 17名

（1年5名・2年6名・3年6名）

⑤ 留意点

(7) 生徒にとっても教師にとっても初めての学習形態であること、学習期間が限定されていることなどから、学習の始めの段階である程度の見通しがもてるように、教師が提示したいいくつかの学習素材から生徒が選択することから始める。

(f) 生徒の様子を教師間で連絡しあい、生徒が願いをもち、調査活動などを通して可能な限り自分の力で具現化できるように支援する。

⑥ 時期：6月19日（月）～26日（月）

⑦ 学習内容

A	馬の絵・そば打ち体験・東京・名古屋からの交通調べ
B	御嶽山の絵・そば打ち体験
C	馬の絵・乗馬・散歩
D	御嶽山の絵・フラワーアレンジメント・開田村の方言調べ
E	馬の絵・フラワーアレンジメント・今までのことを作文する。
F	馬の絵・乗馬・定期的な馬の学習
G	馬の絵・乗馬・開田村のおみやげ調べ（観光案内所とおみやげセンターでの聞き取り調査・インターネットでの調査）
H	馬の絵・写真（明花・一郎・ボス・しろ）を撮ってアルバム作り・フラワーアレンジメント
I	御嶽山の絵・フラワーアレンジメント・K小学校についての調査
J	馬の絵・デジカメで写真撮影（馬・自然）・パソコンで写真編集
K	馬の絵・写真・開田村の暑さ、寒さを調べ（観光センターで聞き取り調査して発表）・定期的な馬の学習
L	馬の絵・植物集め（押し花）・石集め・集めた物で作品製作
M	馬の絵・馬の目と兔の鳴き声についての調査
N	馬の絵・そば打ち
O	馬の絵・馬の名前調べ（30頭）・乗馬・定期的な馬の学習
P	馬の絵・そば打ち・観光マップ資料集め（食べ物・観光地）・オリジナルマップ作り
Q	御嶽山の絵・馬の名前調べ・そば打ち・乗馬

絵画制作と地域の方との郷土料理作りには 全員が取り組んだ。また、学習最終日の6月26日にプチ学習発表会を行い、一人一人が自分の学習したことを発表した。絵や作った物やまとめた文書を見せて説明したり、クイズ形式で発表したりして表現する経験を広げることができた。また、友達の興味・関心を知る機会にもなった。

<p>【育ちへの願い】</p> <p>・人とのかかわりや経験を広げながら、自分で判断して行動したり、意思表示したりする場面を増やしてほしい。(判断力・社会性)</p>	
<p>単元における願い</p>	<p>生徒</p> <ul style="list-style-type: none"> ・木曾馬の絵を描きたい。 ・きれいな自然の写真を撮りたい。 ・開田村の気候を調べたい。(暑さ、寒さはどのくらいか調べたい。)
	<p>教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大きな紙に挑戦して、自分のタッチで最後まで描いてほしい。 ・「～したい」という意思表示をできるだけ自分からして、学習に取り組んでほしい。 ・ぶれのない美しい写真を撮ってほしい。 ・気候を調べることを通して、人とのかかわりや経験を広げてほしい。
<p>指 導 内 容</p>	<p>主 な 支 援</p>
<p>○ 写生するときに、自分で納得する場所を選んで馬をよく見て、じっくり描く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本生の体力の限界や背筋力の乏しさ、排尿の事情を考慮して、場所選びには、日陰、背もたれのある所を選ぶようアドバイスする。 ・描きたい馬や風景の話をよく聞き、願いが可能な限り実現できるように支援する。(場合によっては、経験の少ない模造紙大の紙に大きくダイナミックに表現することを選択肢に含める。) ・描いている時には、できるだけ言葉をかけないようにして集中力を高めるようにする。
<p>○ 写真を撮る時は、何をどのように撮りたいのか言葉で表現して場所を決めたり、安全な体制を整えたりして、ぶれのない美しい写真を撮る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・願いを充分引き出すようにする。 ・両手に軽いマヒがあったり、手、肘、肩の動きがぎこちなかったりするので「ぶれ」にくい姿勢で撮影できるように支援する。 <div style="text-align: center;">  <p>《Kさんが撮影した木曾馬の写真》</p> </div>
<p>○ 開田村の厳しい自然環境を知るために、自分から質問したり、調査の方法を知ったりし、分かったことをまとめて発表したりする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・どんなことを聞きたいのか話を聞き、メモしていくと質問しやすいことや聞きたいことを聞き逃さないことを説明する。 ・観光案内所でなかなか話を切り出せないでいたら、声をかけるなどしてきっかけを作る。 ・質問に対する答えを一緒に聞きメモする。(ビデオ撮影しKさんが自分で再確認できるようにすることも考える。) ・質問する以外でどんな調査方法があるかを具体例を示しながら説明する。(どの方法で調査するかはKさんが選択できるようにする。) ・まとめの時間が充分ないので、Kさんの願いを聞きながら支援し、発表時は原稿を用意したり具体物を示したりして、内容が分かりやすくなるようにする。
<p>【考 察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵、写真、自然、気候など以前から本生が非常に興味を示していたものが素材になっていたため、意欲的に継続して学習活動に取り組むことができた。 ・経験が少なかった模造紙大の紙に描いたが、途中で隣で描いていた友達の絵を見て、似たような表現をし始めた。友達の描き方をいいなあと感じた結果だったと思われるが、生活面では友達の行動を模倣することはよくあったが、表現面では初めてだったので、Kさんの今まで見られなかった一面を発見したような思いがした。 ・写真撮影は、風景と馬を中心にKさんの撮りたいものを撮り、美しい写真に仕上がった。Kさんの願いが実現でき、成就感がもてたのではないかとと思われる。 ・気候については観光案内所で質問したがKさんの知りたかったことが充分聞けなかった。事前の依頼方法、打ち合わせの大切さ、場に応じた適切な支援の必要性を感じた。 	

⑨ 考 察：

(7) 生徒一人一人が自分のやりたいことを選択し、活動方法を教師と相談して決めて学習をすすめ、学習の経過や成果を発表するという学習の流れを通して、自発性・意欲、社会性、知識・理解・技能の高まりが見られた。このことから、総合的な学習の時間のねらいの一つに迫られたり、学習の組み立て方が一つ分かってきたと思われる。

(4) 生徒が取り組みそうなことで、教師が指導體制を取れる内容を提示して生徒が選択するという場面を設けて学習を始めたが、選択肢以外での希望がいくつかでて具現化できた。創造的な活動には抵抗がある生徒が比較的多い中で、このように生徒からの希望で学習内容の広がりが見られたことは、中心素材として選んだ木曽馬の里が、学習にかかわる多くの条件を備えていたためだったと考えられる。今後も、他の学習での活用が期待できると思われる。

(7) 教師の提示した内容が多すぎたこと、期間が短かったことなどで個別の活動が中途半端になってしまった生徒がいた。(後日、課題別学習で対応した例があった。)

(E) 単元構成、支援の方法、実施期間などについて研究をすすめる必要がある。

(4) 合同学習【平成13年度】

① 時期・期間：6月下旬 5日間

② 日程と主な活動：9：30 学校発（スクールバス使用）

10：00 木曽馬の里着

10：00～11：15

馬房清掃（共同で）・えさやり・乗馬など

11：15 木曽馬の里発（スクールバス使用）

11：45 学校着

※ 最終日は路線バス使用で、お弁当を持っていき、午後帰校

③ 参加者：高等部生徒3名、小学部児童5名（計8名）

※ 馬に乗ることを考慮し人数を決定

④ 成 果：

(7) それぞれの子どもの役割分担をはっきりさせたこと、木曽馬の里の方が清掃やえさの量の見本を示してくださったことで、子どもたちは見通しをもって活動ができた。

(4) 小学部の児童と高等部の生徒でペアを組んで活動したことや、木曽馬の里の方とかかわりが生まれたことで、対人関係の広がりが見られた。

(7) 作業内容が変化しても他に対応できる活動が用意できるので、木曽馬の里は校外での学習場所としてよい条件を備えていることが分かった。

(E) 子どもたちが、馬に乗ることを楽しみにしているので、2日目から、作業体験と乗馬をグループで分けて行うなど両方を充実できるように工夫したことはよかった。

⑤ 課 題：

(7) 職員間の打ち合わせや木曽馬の里への連絡が充分でなかった。

(4) 帰校が遅れてしまい、給食準備等に迷惑をかけてしまった。

(7) 活動場所が離れていたため、互いの状況を把握することがうまくできず、全体の流れがスムーズにいかなかった場面があったので連絡方法を工夫する必要があった。

(E) 縦割りで活動するととてもよい学習だったが、最終日以外は木曽馬の里にいる時間が短く活動が充分でなかった場面もあったので、毎日お弁当を持って行って一緒に食べる日程にすればよかった。

⑥ 児童生徒の様子や感想から：

(7) えさをやることを楽しみにしていた小学部低学年の児童は、「うんま（えさという意味）」と繰り返しながらえさの時間に思う存分えさをあげることができ、大満足していた。その後、普段かかわりのない高等部の教師しかいなかったのに、「馬に乗りたい」と意思表示して笑顔で馬に乗った。最終日には、バス停から木曽馬の里へ向かう途中で、赤つめくさをたくさん取って持っていき、馬にあげていた。

(4) 作業的な活動に抵抗感があると思われる小学部高学年の児童が、高等部生と一緒に馬房のボロ取りやおがこ撒き、通路清掃を意欲的に行った。この児童の保護者から、画期的なできごとだと感想をいただいた。

(7) 小学部の児童とかかわることが苦手だと感じていた高等部生が、ボロ取りやえさやりを自然な雰囲気ですべて一緒にできた。かかわり方には課題が残ったが、お互いに他者と協力するというよい体験になったのではないか。

(E) 高等部生の感想から：

「ボロ取りやえさやりなどの仕事で、小学部の人を助けてあげながらできてよかった。ぼくらしいことで活躍できたと思う。」

「今回の経験で、馬房の掃除や通路清掃の大切さがよく分かりました。」

⑦ 今後の方向

(7) 木曽馬とのかかわりは子どもたちが楽しみにできる活動で、自立する力の高まり（意欲・自信・社会性）も見られるので継続したい。

(4) 学校出発を早めたり、教師が連絡や時間配分をきちんとして馬に乗る時間をできるだけ確保していきたい。また、可能ならお弁当を持っていく日を増やしたい。

(7) 異年齢集団での学習でも、馬とのかかわりを通して



《えさやり・ブラッシング》

参加者にあった活動を行うことができたので、木曾養護学校の特色ある学習の一つとして取り入れていける可能性が高いことを感じた。

(5) 産業現場等における実習

① 期間・実施日：毎年5月下旬6月上旬及び11月上旬の5～10日間（個人によって異なる）

② 日程と主な活動：

(7) 生徒の様子や路線バスの時間にあわせて個別に日程を組む。仕事を始める時間は9時頃でほぼ一緒だが、仕事を終える時間は個人で異なる。

(4) 馬房清掃（ぼろ取り・おがこ撒き）、通路清掃、水入れ、えさやりなどの仕事を行う。可能な状況であれば、乗馬の機会をもたせていただく。

③ 参加者：

(7) 生徒や保護者の希望を聞いたり、校外での学習体験を広げるために教師がすすめたりした生徒

(4) 校外で働くことを体験しつつ、自立活動的な内容の学習をすることが必要と思われる生徒

④ 事例：Fさん

（中学部2年～高等部3年まで実習／高等部2・3年は定期的な学習に参加）

<指導して下さった木曾馬の里の方の感想から>

定期的な馬の学習や普段の実習などを通して、だんだんとやりたいことを自分から表現できるようになってきているように思える。Fさんが自覚しているかどうか定かではない（自覚しているように感じる）が、実習と定期的な馬の学習とで雰囲気がなんとなく違う。



《掃き掃除をするFさん》

特に、実習時は厩舎に着くなり竹ぼうきを取り、掃き掃除を始める。作業的には、他の事をお願いしたいときもあるが、自主的に動いていることはやってもらうようにした。やってほしい仕事を話せば、だいたいことは理解し、ゆっくりではあるがやってくれる。ボロ取りに関しては、だんだんと手を抜くようになってきている？（以前の方が動きが良かった様にも見える。）ただし、ボロを取るときの手の動きは以前より良くなっていて、雑な動きが少なくなり、正確さが増している様に思える。

見ている限りでは、竹ぼうきでの掃き掃除が好きというか、自分から進んでする仕事になっており何も言わないでいるとほうきを持ってきた。ただ、見ていないと同じ所をずうっと掃いている傾向がある。

馬の一連の作業（放牧場から捕まえて繋場に>ブラッシング>装鞍）は流れを理解しているので、時間になるとロープを置いてある所へ行き、場合によっては自分でロープを持って馬をつれに行きたがる様子を良く見せるようになった。始めは馬が怖かったので放牧場の中に入ることを嫌がるのがしばしばあったが、今ではためらわずに入っていくようになった。馬を捕まえるときは「ナスカン」がうまく使えないので手助けが必要だが、「ナスカン」を違う式のものに変えれば自分で捕まえる事ができるようになるのではないだろうかと思ってる。

放牧場～繋ぎ場では、実際に馬を引いてもらい自分で連

れて行く。ロープ(引き綱)の先端の方を持ち引っぱって
いく、速く歩いているときには「ゆっくりね」と声をかけ
るとゆっくりと引いてくれる。馬のほうを見ていなければ
(自分に迫ってくると怖くなってしまう)一人でも引いて
いける。気づかずに一人で引いていて、気づくと慌てて、
場合によってはロープを離してしまうので、やはり補助
(馬側に誰か一人入る)が必要と思われる。この補助は、
馬とFさん両方を抑える感じにするとテンションがかかり、
ゆっくり歩かないといけなくなるので効果的だと考える。

ブラッシングは、全くできない状態からのスタートだっ
たが、次第に少しずつブラシを通して馬の体に触れるよう
になり、Fさんなりに手でゆっくり触れるようになってき
た事もあり、効果的な学習になっていると思われる。馬の
背中のみを縦方向にかけていた時期から比べると、首・お
腹の下・後肢などまでできるようになったのは大きな進歩
である。「ここだよ」「今度はここだよ」などと指示する事
により馬の片側は完全に一人でできるようになってきた。
時間があれば全身もこなせているが、動きは同じ所をやって
いるのかもしれない。

また、装鞍に際しては頭絡・鞍などの準備ができ、鞍は
ちゃんと軽乗鞍(2つハンドル)を持ってくる。馬に合った
頭絡を持ってくることは一人ではできず、どれを持って
くるか近くまで行って実物を示して説明している。

実際に鞍を載せる段階では、焦っているときは順番や向
きが間違っていることがあるが、指示をゆっくりしていく
とゼッケン・マット・鞍の順番にきちんと載せていける。
(細かな位置については、見てあげる必要がある。)向きが
違うときも、比較的にかよかな表情なので違う事を分かっ
ているのかもしれないと思う。このことについては、まだ
丁寧に仕事ができるようになるのではないかと感じている。

馬場の中での引き運動(1・2周)は、その後に乗れる
ということが分かっている様子で張り切っている。引くこ
とによって気分がある程度まで高まっていくのではないか
と思うが、逆に気分が高まりすぎているときに引いてもら
うと今度は落ち着くという効果が見られることもある。気
分を安定させるという意味ではとても有効な学習なのかも
しれない。

乗ることは中2のときから始めている(始めは一人で乗
れなかった)。先生と一緒に乗ることから始まり、次第に
慣れてきた。一年程前～半年くらい前には飛び乗りを見せ
たがこの頃は見せなくなった。最近、毎回のように「早
く足をあげて乗るのを手伝え」と言わんばかりに馬の横で
片足を折って待っているようになり、支えるような感じで
軽く足を上げてあげると自分からすっと乗る。

乗ってからは常歩での直線運動を中心に行っていくが、
乗るだけである程度の満足感を得ている様子が見受けられ

る。しかし、高3の後期に入り同じグループの中で調馬索
運動を取り入れたものや、道具を使って乗る事を行ってい
ると、自分から今までやった事のあるいろいろな動きをし
たいと要求してくることも度々あった。速歩に関しては何
度か試したが、怖がっている様子だった。後ろ向き乗り・
横向き乗り・背中の上で寝る等はできている。寝る時は最
初の頃はゆっくりできていたと思うのだが、最近ではすぐ
に起きてしまう。身長が伸びた事によって寝た時にやや不
安定になり恐怖心が出てきたのではないかと考えている。
寝ることがゆっくりできれば、体も十分にリラックスでき
るのではないだろうか。

馬に関する学習の中で、仕事などをゆっくり、丁寧に、
最後までやるというのが課題として残ったと思う。また、
一人で続けられる時間が、少しずつ長くなっていけば、高
等部を卒業して社会に出て仕事をするときにも良いと思う。

(「木曾馬の里・乗馬センター」中川 剛)

(6) 学校祭での乗馬体験コーナー運営(平成12・13年度)

① 期 間：9月中旬から10月中旬の学校祭(駒の子祭)
に向かった生活単元学習の中で高等部の推
進グループが計画・実施

② 日程と主な活動：学校祭(駒の子祭)2日目 一般公
開の時間に実施

③ 開始のきっかけと当日の様子など

学校祭である「駒の子祭」でやりたいことについて生徒
がアンケートに書いた中に、肢体不自由があり自力歩行が
できないJさんの「木曾馬を呼びたい」という願いがあっ
た。Jさんは前年度の「駒の子祭」の開祭式で作り物の馬
に乗って登場し開祭宣言をした経験があり、そのときから、
本当の馬に乗って登場したいと思っていたことも分かった。

Jさんの願いを受けて職員やPTA役員で検討したところ、
開校5周年記念の「駒の子祭」であり、木曾馬との定
期的な学習を始めた年でもあったので、学校祭に木曾馬を
借りるための予算を考えようということになり、Jさんの
願いを実現できる見通しがもてたので、Jさんに企画をた
ててもらった。

Jさんは、前年の経験からどんな場面で木曾馬を活躍さ
せることができるかなど具体的な案を考えることができ、
開田村振興公社に電話をして木曾馬を借りるにはどうした
らよいかなどについて問い合わせをしながら、企画をたて
ていった。

「駒の子祭」の推進グループに属していたJさんは、駒
の子祭2日目に木曾馬を呼んで、がんばろう会やイベント
や開祭式で活躍させたいと考え、グループのみんなに提案
して承諾を得た。

また、開田村振興公社のご厚意やPTA・高等部作業班
からの資金援助も実現して木曾馬が学校祭に来ることになっ

た。イベントなどに必要な物を考えて用意していく中でも Jさんの意欲的な姿が随所に見られ、期待感が高まっていく様子が伺えた。

Jさんは、「駒の子祭」2日目当日、木曾馬に乗って登場して「がんばろう会」の始めの言葉を言ったり、イベント「馬おるで!!」の運営をしたり、閉祭式で再び木曾馬に乗って登場して閉祭宣言をしたりした。閉祭宣言の時には涙ぐむ姿も見られたことから、自分が推進してきたことが実現し成功した充実感をもつとともに、大きな成就感を得られたのではないかと思われた。

イベントには、地域の子どもや本校の児童生徒が多数参加して引き馬を楽しんだ。また、馬の周りに寄ってきて、えさをやったり、体に触れたりして馬のかかわりをもつ子どもがたくさんいた。

④ 平成13年度の様子など

平成12年度実施の体験や印象が多く的高等部生徒の印象に残っていて、学校祭でやりたいことアンケートに木曾馬を呼びたいという願いが書かれていた。職員にも予想がついていたので、資金援助についてはある程度の見通しをもっていましたが、生徒に資金のことも含めて企画してほしいと話し、生徒の企画であるという意識付けを前年より高めるようにした。Jさんは、前年に引き続いて企画を行うグループにいて、特に資金援助についての調整を行い、「木曾馬の里」に経費を支払うことまで自分で行うことができた。

「駒の子祭」当日には、木曾馬の里の方のご厚意で木曾馬が2頭来校し、約150人が引き馬を楽しむことができた。

⑤ 感想文などから

< Jさんの「高等部の思い出」の作文から >

駒の子祭で木曾馬を呼べてよかったです。なぜかと言うと、3年生の時には、ほとんど自分一人で木曾馬を呼ぶことができたからです。開田村役場に電話で申し込んだり、当日は責任をもって木曾馬を見ていたり、最後はお金をしっかり払ったりできて良かったです。乗馬体験のイベントも、しっかりできたし、お客さんもいっぱい来て喜んでくれてうれしかったです。

< 「駒の子祭」に来校した郡内の小学生の感想から(抜粋) >

木曾馬に乗って楽しかったです。養護学校では、よく木曾馬を見に行ったり、乗ったりするのが良いなと思います。うらやましいです。馬はかわいかった。揺れたので結構怖かった。来年も来たいです。

(7) 校外学習(平成12・13年度)

① 期間・実施日：学部や学級で計画・実施

日時が重ならないように係で調整して「木曾馬の里」に依頼

② 日程と主な活動

○ スクールバスで10時頃木曾馬の里に着き、1時間半くらい活動してスクールバスで帰る形態が多い。

○ 引き馬による乗馬体験、えさやり、散策などの活動が主になる。

③ 参加者：小学部(学級で)・高等部(作業班・学級・全体)

④ 発展的な活動：

○ 小学部

- ・個別の学習での絵画制作・作文など
- ・畑で馬にやる人参の栽培

○ 高等部

- ・作業学習で作る製品のデザインへの活用
- ・「木曾馬の里」に製品の販売を委託
- ・木曾馬とのかかわりを「木曾っ子にカンパイ!」という劇にまとめて学習発表会で発表(‘木曾っ子’とは木曾地域での木曾馬の呼び方の一つ)



《木工班の木曾馬コースター》

IV. まとめと今後の見通し

1. 成果

(1) 木曾馬とのかかわりを含む学習で興味・関心、意欲、対人関係、社会性など自立する力の高まりが見られた子どもがいた。

(2) 乗馬だけではなく、木曾馬の里へ行き散策する、仕事を体験する、調査活動をするなど学習内容が広がった。

(3) 全校遠足のように全員が同じ活動でなく、子どもの年代や状況にあった活動で学習を行うことができて、より充実した学習になった。

(4) 木曾馬とのかかわりが、いろいろな学習場面で活きるようになった。

(5) 回数は少なくとも木曾馬とのかかわりの様子の変化

を見ることで、子どもの成長を捉えやすい場面となる。(例えば、水泳やスキーのように季節毎に行う学習での子どもの変化が捉えやすいのと同じように、少なくとも1年に1回木曾馬にかかわる機会を継続して記録を残していけば成長の過程が理解しやすいと思われる。)

2. 課題

- (1) 経験が重なって行くことで、子どもの力が高まったり、木曾馬とのかかわりが深まったりするような学習を取り入れて行くことが必要になるのではないかとと思われる。
- (2) 発達段階を考慮した本校としての学習内容をまとめ、教師が見通しをもった支援をしていけるようにしたい。
- (3) 学習形態におけるねらいの違いを確認したり、校外の学習という特長を更に活かして、自立する力がより高まるような支援を探っていきたい。

3. 今後の方向

- (1) 定期的な学習では、自立活動の指導内容を生徒の意欲を基盤に学習できる場合が多く、効果が見られるので、今後も実施する方向で考えたい。運営については、自立活動の係が中心にすすめ、学校としての方向を示すようにしたらどうかと考える。
また、家庭との連絡をすすめたり、学習時にボランティア参加を取り入れたりして学習の充実を図りたい。
- (2) 学部・学級での学習を継続して行い、一年に一回は木曾馬とふれあう機会を作っていきたい。
- (3) 3年間の実践から、職業学習での位置づけが効果的だと分かってきたので、期間や仕事内容などを考慮しながら学習を充実させていきたい。
- (4) 生活単元学習での活用を飼育体験を含めて探りたい。
- (5) 休日の木曾馬の里の利用について可能性を探り、余暇活動として木曾馬とのかかわりが活かせるかどうか検討したい。
- (6) 実践をより高めて行くための研修等の内容を充実させていきたい。具体的には、ビデオ映像などの客観的な資料を充実させる、資料の収集を行う、県内外で馬とのかかわりを学習に取り入れている学校、施設、保護者などと情報交換をするなどがある。

4. 学習を進めるための体制とシステム作り

継続的な学習を円滑にすすめるために、事前準備や現地での実施について係を設けるなど教師間の十分な協力体制をつくることが重要であることが明らかとなった。また、以下のような点については、実施手続きのシステムをつくらせて実施していくことが必要である。

- (1) 定期的な学習への参加者推薦(教育課程検討委員会へ)

- (2) 定期的な学習への参加決定通知(保護者へ)
- (3) 開田村振興公社と「木曾馬の里」への依頼状作成・送付・確認(全体・毎月)
- (4) スクールバス関係の手続き(場合によっては昼食関係の手続きも必要)
- (5) 学習計画の提出と記録の推進
- (6) 内規にそった教師の旅行命令票への記載確認
- (7) 拡大係会の運営(打ち合わせ・反省)
- (8) 研修会の計画・運営

【資料】

1. 馬事関係の側面

- (1) 施設名 木曾馬の里・乗馬センター
- (2) 施設の概要

施設は、長野県南西部、木曾御嶽山の裾野に広がる開田高原にある。ここは古くから馬と人が共に暮らす文化のあるところである。開田村の主要産業は近年、夏に涼しい高原という土地柄を活かした「観光業」になってきた。村では「(財)開田村振興公社」を立ち上げ、馬・蕎麦・温泉を村外に向けてPRしている。とりわけ、木曾馬は木曾郡原産の日本在来の馬で、多いときには郡下で7000頭も飼育されていた。その当時、開田村では郡内で一番多い2000頭あまりが飼育されていたことから、現在では「木曾馬のふるさと」といわれている。木曾馬の里は、数が少なくなっている木曾馬の保護・育成を目標として平成8年にリニューアルオープンした。オープン当初は村の農家から馬を譲り受け、繁殖・育成をしながら来訪者を対象に体験乗馬を行っていたが、「保存＝活用」という観点から施設の充実と馬の調教が図られ、馬場内での乗馬も平成11年から行うようになった。現在は、引き馬をメインとした乗馬体験施設として、名古屋方面にも知られるようになってきている。

- (3) 障害のある子どもたちへの取り組みの経緯

リニューアルオープンして間もなく、全校遠足で来訪した木曾養護学校の児童生徒を引き馬で乗馬させたのが初めての取り組みだった。その後、平成11年まで木曾養護学校の全校遠足が毎年1回あったり、平成10年の2月に職場体験ということで中学部の生徒を一人約1週間厩務作業に受け入れたりしたことから、子どもたちとの接点が多くなっていった。2月に行っていた実習が5月～6月にも行われるようになり、学部、学級、個人で「木曾馬の里」へ来て厩務作業をしたり、乗馬体験をしたりするようになっていった。

平成12年度から「定期的な馬の学習」も行うようになり、決まった子どもたちが定期的に木曾馬とかわるようになっていき、現在に至っている。



《ぼろ取り作業》

(4) 実際場面と工夫した点・課題と今後の見通し

始めは、単に馬に乗ってもらうことや厩務作業から入って行き、ゆっくり触れたい子などは装鞍作業ではブラッシングから徐々にはじめていった。

厩務作業主体の実習の場合、乗るという時間はほんの3分くらいのことが多いのだが、乗るまでの過程の中に装鞍、引き馬など馬と対話のできる時間をできるだけ取れるようにしている。(一般客のいるときには多少その時間が短くなってしまうこともあるが・・・)

「定期的な馬の学習」が平成12年度から始まり、決まった子どもたちが定期的に学習に来るようになり、厩務作業よりも乗る活動を中心に行う学習が多くなった。

馬は好きだがなかなか近づけない子がいたり、平気で触る子がいたり、いろいろな子がいて勉強になる。特に、初めは全く馬に触れなかった子が学習を行う毎に馬に近づいていくのには驚かされる。

乗る場面では、始めはビールケースを組んだ物を使っていたが、乗り場(牧場にすえてあるもの)や跳び乗り(足

の手助けをして)に変わっていった。

このことで、乗り降りがスムーズになり、一人一人の乗る時間に若干ではあるが余裕が出てきた。乗る時間はそのときによって違うが、乗る過程から下馬まで大体20分程度で、子どもの調子が悪ければもっと短いときもあるし、場合によっては乗らないときもある。馬に乗らないで、馬と顔をあわせてゆっくり考えている子もいる。やはり乗っている時間よりも馬との対話のほうが良い子もいるのであろう。

授業という限られた時間の中で学習しようとするが無理も生じ、いつも時間は押し気味になる。理想的には1時間に2人(乗る過程を含めて一人に30分は時間が取れる為)か2時間で5人くらいがよいように思う。1時間で3~4人というのは時間的にどうしても無理が出てくるので今後の課題でもある。

「定期的な馬の学習」が今後どうなるかにもよるのだが、木曽の文化である木曽馬と人との自然なかかわりを大切に、できる限り木曽養護学校の学習に協力していきたいと考えている。しかし、こういう学習が単発的にではなく長期的に継続して広がり、他の学校などにも取り入れられていくためには、現行の「乗馬料免除」ではなく、学習形態に合わせて少しでも料金をいただくことを提案したい。このことで、在来馬である木曽馬が人を乗せる仕事で活躍して経済的な効果をもたらす可能性が高まることを村の方々に理解していただいたり、木曽郡内をはじめ県内外に木曽馬の存在と活用についての情報が伝わり、木曽馬を飼育する施設が増える基盤作りになったりするのではないかと考えている。

(「木曽馬の里・乗馬センター」中川 剛)

2. 実施に関わる経済的な根拠

平成11年度から13年度まで、本校が独立行政法人国立特殊教育総合研究所の研究協力校であり、「木曽馬の里」が研究協力機関であったため、「木曽馬の里」で行う学習については全て料金全額免除にいただいた。

今後については不確定の状態であるが、本校の取り組みが木曽馬の保存と活用に貢献できるような方向を検討していく必要があるのではないかとと思われる。

馬を用いた指導の開始と充実した展開のために

滝 坂 信 一

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

馬を用いた指導を始め、また展開する際には、大型動物である「馬」という動物のもつ特徴を知り、配慮しなければならないことがある。これは、他のどのような素材を教育活動に用いる場合にも、その素材の特性を知っておくこと、そしてそれに合わせた指導者の側が配慮が必要になると同じである。

ここでは、障害のある子どもが触れ合ったり乗る相手として適切な、かつ十分に調教されている馬を、馬の専門家とともに教育に用いようとする場合を前提に、予めどのような情報を集めたり、また保護者に伝えておく必要があるのかという点について、本研究所で用いてきた書式を紹介しながら考えてみたい。

1. 身体的な影響に対する配慮

馬に乗るということは身体的な運動を伴う。従って、対象となる子どもたちの身体的な、また健康状態を予め知ったうえで指導の内容を組み立て、実践を行う必要がある。また、実際に乗ることがない場合でも、馬のいる環境自体が生理的に影響を及ぼすことがあり、この点に関しても子どもの状態を知っておく必要がある。具体的には、

(1) 身体・生理面で運動上の制限や留意する点があるかどうか

(2) 動物の毛などにアレルギーがあるかどうか

の二つを挙げることができる。これらを保護者に確認し、また保護者を通じて主治医に確認したり意見を聞いておくことができる。

養護学校や特殊学級に行っている子どもたちの場合、それぞれの学校や学級担任はこれらのうち多くのことを把握している。しかし、馬を用いた学習を行うことを一つの契機に、いま一度これらの情報について保護者と確認し、最近の健康状態や家庭での生活を知ることによって役立つこともできる。なお、どのサイズの、どういった動きのある馬を用いるかを定める目安として、それぞれの子どもの体重と身長も知る必要がある。

各項目のより具体的な内容としては、おおよそ次のようなことがあげられる。

(1) 運動上の制限や留意する点があるかどうか

特に、乗馬（またがる、反動、運動量）ということに関

して制限があるかどうか

例：脳性まひによる股関節の脱臼・拘縮・変形、

二分脊椎による痛・刺激知覚困難、

シャンテイング、脊柱側弯等

環椎軸不安定（ダウン症等）

心臓疾患

呼吸障害や呼吸器系疾患

てんかんの発作

高血圧など循環器系疾患（カテーテル装着等）

(2) 動物の毛などにアレルギーがあるかどうか

馬の毛や馬の飼料となっている植物のアレルギーなど

もちろん、睡眠時間、食欲、全体的な体調など、学習の行われる当日だけでなく数日前からの健康状態を知っておくことは、身体の運動を伴う他の活動を行う場合と同様である。

<資料1>は、馬を用いた指導を行うにあたって、保護者の方々に記入していただいている「乗馬のための健康チェック」票である。これらを個人情報として取扱いに十分注意することは言うまでもない。

2. 日常生活における様子の理解

予め知っておく必要があるのは、身体や健康の状況ばかりではない。馬を用いた指導を実際に担当するスタッフは必ずしもその子の担任とは限らないし、担任以外のスタッフが一緒に活動を行うこともある。むしろ、現状ではそういった場合のほうが多いとも言える。従って、対象となる一人一人の子どもが、日常生活の中で他者とのようなコミュニケーションの取り方をしているのか、初めての体験をする事に対してどのようなとらえ方や態度を取る傾向があるのか、そして、これまで動物と触れ合った経験や馬を近くで見た経験があるかなどについて知っていることは、実際場面での対応や配慮を行っていくにあたっての大きな手がかりとなる。これらの情報については、担任教師からの情報の他、最も長い時間その子の生活を見てきている保護者や施設職員からの情報はとても重要である。<資料2-1>は保護者向けの調査票で、<資料2-2>は担任教師向けのものである。

これらをそれぞれの人々と話しておくことは、実際の活動の過程に見られたその子の姿について後刻話題にする際に非常に役立つ。そこで見られた姿は、それぞれがそれぞ

れの関係や場で見ている姿とは大きく異なっていることが間々あるからである。

3. 初回場面における関係者の留意点

日本では障害のある子どもに対する「馬を用いた指導」という領域がまだ日が浅く、多くの人々にとって始めて目にするという場合が少なくない。このような状況においては、その場に居合わせる担任を始め教師、そして保護者に、そこでは何を大切にしながらどのような学習が展開されるのか、それをどのような視点で見、また関わってほしいのかを説明したり理解してもらうことが必要になる。〈資料3-1〉は、筆者らが養護学校などで実践を行ったり、筆者らの実践を担当の教師が参観する際に用いる説明資料である。また〈資料3-1〉は、参観する保護者への説明資料である。

資料のなかで強調していることは、(1)「馬」というと、どうしても乗せたいと思ってしまう。しかし、「乗る」というのは一つの結果であって、重要なのは「馬」との出会いであり、意欲や気持ちを表現していくそのプロセスである、(2)子どもの意欲や気持ちの表れを大切に、指示・強制しようとする自分に気づいてそれを調整して子どもの姿を見てほしい、(3)その学習(体験)が子どもにとってどのようなものであったのか、身体の様子、本人が馬の体験について自ら話題にすることがあるかどうか、絵や文章などに馬の体験が表れるかどうかなど、事後の様子をしばらくの間の間でいねいに見てほしいということである。

4. 事後の対応

馬との触れ合いや乗ることを通じての学習が、一人一人の子どもにとってどのようなものであったかを知ることは、

行った指導の評価に関する第一の観点となる。そして、以降の実践をより良いものにしていくために不可欠のことである。

また馬に乗ることは運動を伴うものであるだけに、子どもの身体面にどのような影響をもたらしたかについて注意深く事後の様子を見る必要がある。例えば、どこか痛みを感じる個所はないか、反対にとっても楽に感じることもあるか、といったことである。さらに、この領域がまだ若いものであることを考えれば、指導の過程・事後に起こった事実を関係者がそれぞれの観点で集め、その理由や背景について検討してみることが、この領域をより豊かなものとして開発することにつながっていく。〈資料4〉は、その場に立ち会った担任や保護者に記入をお願いする指導後の様子に関する調査票の例である。

5. 指導者・保護者の馬と触れ合う体験

指導者(教師)自身が馬という動物と実際に触れ合ったり乗るという体験をしてみることは、馬との触れ合いや乗ることを教育のなかにどのように活かせるか、教育素材としての特性がどのようなものかを知るうえで大変重要なことである。また、馬を用いた指導が子どもにとってどのような体験をすることになっているのかを、保護者にも馬と触れ合う機会を提供する試みを通じて理解してもらうことができる。この試みは、子どもと保護者が共通の体験、実感をもち、家庭生活のなかでともに話題にすることができるという大きな利点をもっている。

〈資料5〉は、指導者(教師)、保護者に馬と触れ合い、馬に乗る体験を提供する際の調査票である。国立特殊教育総合研究所では、現職教員の研修のなかでも馬を用いているが、そこでもこの調査票を用いている。

<資料1>

乗馬のための健康チェック

安全に、楽しく馬と触れ合っていただくために以下のことをお尋ねいたします。該当する事項に○をつけ、必要事項をご記入ください。どうぞご協力をお願いいたします。

記入年月日： 年 月 日

お名前： (昭・平 年 月 日生) (歳)

(保護者のお名前：)

ご住所： 〒

お電話：

身長： c m 体重： k g

1. これまで馬と触れ合った経験はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、以下のことについて具体的にお教えてください。

- <経験の内容> ア) 馬を見たことがあるが、触れたり乗ったことはない
イ) 馬に触れたことはあるが、乗ったことはない
ウ) 馬に乗ったことがある： ① 1回, ② 2～5回, ③ 6回以上
④ 継続的に乗馬を行っている

- <経験の場所> ア) 一般の乗馬クラブ
イ) 観光牧場
ウ) 障害者乗馬グループ等の行う：①出張乗馬会, ②継続的な乗馬会
エ) その他 ()

2. 医師から伝えられている運動上の制限や配慮事項はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。また、運動面で日常生活で気をつけていることがあれば、併せてお教えてください。

3. 刺激に対する知覚過敏（例：自閉症の方の触覚過敏）や知覚困難（例：二分脊椎等による痛覚の困難）はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。日常生活で気をつけていることがあれば、併せてお教えてください。

4. 医師から脊柱側弯や環椎軸不安定について指摘されたことはありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

5. 股関節の脱臼や亜脱臼はありますか

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、右、左、両方など具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

6. 心臓疾患はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

7. 呼吸障害や呼吸器系疾患はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

8. 高血圧、循環器系疾患（カテーテル装着など）はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

9. 動物の毛、植物などに対するアレルギーはありますか

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

10. てんかんの発作はありますか。

- 1) ない
- 2) ある

ある場合には、以下のことを具体的にお教えてください。また、これにともなって日常生活で気をつける必要がある内容があれば、併せてお教えてください。

- ① 服薬していますか： ア) はい ， イ) いいえ
- ② 誘因として考えられること：
- ③ 発作時の様子と時間の長さ：
- ④ 日常生活で気をつけていること：

11. その他、日常生活を送る上で特に配慮が必要な内容があればお教えてください。

(例：弱視がある、難聴である、会話に手話、マツノ法を使っている、特定の物・事へのこだわりがある等、お気づきのことがあれば何でも結構です。)

* ご協力有り難うございました。お書きいただきました内容は馬と触れ合う、乗る際の配慮を行うための参考とさせていただきますが、個人情報として取扱いに十分注意いたします

(本紙作製：S.TAKISAKA)

<資料2-1>

調 査 票

記入年月日： 年 月 日

記入者：父 母 その他（ ）

1. お子さんのお名前：
2. 生 年 月 日： 年 月 日
3. お子さんの在籍機関： 養護学校 学部 年
4. 主 な 障 害：
5. お子さんが他者に対する意志表出やコミュニケーションを日常どのように行っているかについてお尋ねします。特に要求と拒否の仕方についてお教えてください。
(例：まわりが表情から察する、いやなときにはいやそうな声を出す、身振りで示す)
6. 日常生活の中で新しい体験をする際、お子さんにみられる様子についてお尋ねします。
 - (1) 初めての場面や活動において (例：抵抗が強く、取り組むまで時間がかかる)
 - (2) 初めて出会う人に対して (例：人見知りがなく、誰とでもすぐに交われる)
7. お子さんがこれまでに実際の馬と触れ合った経験があるかどうかについてお尋ねします。該当する番号に○をつけ、質問事項について欄にご記入ください。
 - (1) ない
 - (2) ある「ある」とお答えになった方にお尋ねします。表の中にご記入をお願いいたします。

回	○歳の時 (例：3歳の夏)	どこで (例：千葉の観光牧場で)	どのようなふれあいでしたか (例：怖がらずにふれ、乗ることができた)
1			
2			
3			

8. ご家庭で飼育している生き物があるかどうかについてお尋ねします。該当する番号に○をつけ、質問事項について欄にご記入ください。

(1) いない

(2) いる

「いる」とお答えになった方にお尋ねします。表の中に具体的にご記入ください。

種 類 (例：モルモット)	その動物との具体的なふれあい (例：餌をやる、だっこする)

9. 家庭飼育以外で、お子さんが日常生活の中で動物と触れ合う機会についてお尋ねします。該当するものに○をつけ、欄にご記入ください。

(1) 経験がない(理由：)

(2) めったにない(理由：)

(3) 少ない(理由：)

(4) 時々ある：それはどこですか ()

どのような動物とですか ()

(5) 多い：それはどこですか ()

どのような動物とですか ()

10. 今回、お子さんが馬とふれあったり乗っている場面をごらんになりましたか。該当する番号に○をつけ、質問事項について欄にご記入ください。

(1) 見ていない

(2) 直接見ていないが、ビデオで見た

(3) 直接見た

(2)もしくは(3)とお答えになった方にお尋ねします。ご覧になって感じたことがありましたら、ご意見、ご感想をお書きください。

11. その他、何かありましたらお書きください。

以上です。ご協力誠にありがとうございました。

調 査 票

記入年月日： 年 月 日

記入者氏名：

1. 幼児・児童氏名：
2. 学 年 ・ 教 室： 幼稚部・小学部 年、第 教室
3. 主 な 障 害：
4. お子さんが他者に対する意志表出やコミュニケーションを日常どのように行っているかについてお尋ねします。特に要求と拒否の仕方についてお教えてください。
(例：まわりが表情から察する、いやなときにはいやそうな声を出す、身振りで示す)

5. 日常生活の中で新しい体験をする際、お子さんにみられる様子についてお尋ねします。
 - (1) 初めての場面や活動において (例：抵抗が強く、取り組むまで時間がかかる)

 - (2) 初めて出会う人に対して (例：人見知りがなく、誰とでもすぐに交われる)

6. 今回、お子さんが馬とふれあったり乗っている場面をご覧になってのご意見、ご感想をお書きください。

7. その他、何かありましたらお書きください。(例：指導者の関わり方、事後の様子等)

以上です。ご協力誠にありがとうございました。

なお、お知らせいただいた内容につきましては、上述の目的のためにのみ使用するとともにプライバシーの保護には十分留意いたします。

お子さんの馬との触れ合い、乗馬をご覧頂くために

先生方

皆さん、こんにちは。

今日は、お子さんとご一緒させていただきます。私たちはこれまで13年間、障害のある子どもたちの教育素材としての馬の活用について実践と研究を行ってきました。欧米では、プール指導とあわせ、一つの確立した領域となっています。近年、我が国でも注目されるようになり、各地で広がりを見せています

さて、今日は「馬と触れ合う体験」という範囲になると思いますが、それが子どもたちにとってがよりよい、思い出深いものになるために、いくつかのことをお話しておきたいと思います。

1. 今日のお子さんの体調はいかがですか？

今朝の登校時のお子さんの様子はいかがでしょうか。家庭との連絡帳には体調や食事のこと、あるいは家庭であった出来事など、何かお気づきのことはありませんでしたか？

もし、体調がすぐれない様子があったり、気がかりのことがあれば、どうぞ始まる前に私たちにお教え下さい。

2. お子さんの気持ちを大切にしましょう。

子どもが馬と触れ合う機会があると、大人は「せっかくの機会だから」と、どうしても馬に乗せたがってしまいます。しかし、「乗りたい」というお子さんばかりではなく、「静かに近くで様子を見たい」、「なでていたい」、そういうお子さんもいるのです。私たちは、一人一人のお子さんの気持ちを大切に、かけがえのない時間をともに創ってみようと思います。どうぞ、「怖くないから乗ってごらん」とお子さんを無理に押し出さないで下さい。

(1) 乗らないこともあります：不安なのはいいや馬に乗せられてしまうよりも、どきどきしながら近づく事に挑戦し、やっと馬に触れることができたという経験の方がずっと大きいのです。

(2) お一人の時間の目安は ～ 分です：今日実際に馬と触れ合うのは大変短い時間です。しかし、その過ごし方によっては、一生忘れられない素敵な時間になると私たちは信じています。お子さんと馬たちと共にそれを創り出す事にチャレンジしたいと思います。

3. 馬と私たちにお子さんをお任せ下さい。

今日〇〇養護学校にやってきている馬たちは、これまでにたくさんの障害のある子ども達を乗せ、それぞれの子ども達に忘れられない思い出を創ってきた馬たちです。そして私たちスタッフも、たくさんの子ども達の馬との出会いを仲立ちしてきました。この時間、どうぞ馬と私たちにお子さんをお任せ下さい。

そして、どうぞ、馬と出会い、触れ合うお子さんの姿をじっくりとご覧下さい。もし、皆様の助けが必要になったときには、すぐにお声をおかけします。

4. 索の外側でご覧下さい。

馬はお子さんを不安がらせないようにするために、とても気を遣っています。短い時間ではありますが、私たちもお子さんと馬との出会いの時間を濃密で豊かなものにしたいと考えています。これを実現するために、どうぞ索の内側に入らないでご覧いただきますよう、お願い致します。また、紙片や布また傘などがはためく様子は、馬たちを驚かしてしまうことがあります。どうぞお控え下さいますよう、重ねてお願い致します。

5. お子さんの表情を、馬や私たちとのやり取りをご覧ください。

お子さん達は、日常生活にはあまりない経験を今、しようとしています。きっとドキドキワクワクしているに違いありません。ちょっと不安もあるかもしれませんね。そんな、挑戦しているお子さんの表情の変化、成就した表情、姿勢の変化、馬や私たちとのやり取りの様子を是非見逃さずにご覧下さい。きっと、皆さんが考えていらっしゃるよりずっとしっかり成長している姿がそこにあるに違いありません。

6. 後で話題にする。

充実した豊かな体験をした後というのは、穏やかで甘い余韻が続くものです。それは、馬と触れ合ったお子さん自身だけではなく、それをご覧になっ先生方も同様だと思います。私たちは、今日の機会がそのようなものになるよう、努力したいと思います。お昼の時、帰りの会するとき、そして後日、どうぞ今日の出来事を話題にしてみてくださいと思います。

7. どうぞ、お教え下さい。

今日のことについて、お子さんの様子から、私たちのかかわり方からお感じになられたこと、お考えになられたことがありましたら、どんな内容でも結構ですので、お教え下さい。私たちはそれに学び、さらに努力・工夫して行きたいと思います。

お子さんの馬との触れ合い、乗馬をご覧頂くために

保護者の皆様

皆さん、こんにちは。

今回、お子さんとご一緒させていただきます。さて、今日の体験がよりよい、思い出深いものになるために、いくつかのことをお話しておきたいと思います。

1. 今日のお子さんの体調はいかがですか？

昨夜、お子さんは良く眠れたでしょうか。また、今朝の食事は取れましたか？もし、体調がすぐれない様子があったり、気がかりのことがあれば、どうぞ始まる前に私たちにお教え下さい。

2. お子さんの気持ちを大切にしましょう。

子どもが馬と触れ合う機会があると、大人は「せっかくの機会だから」と、どうしても馬に乗せたがってしまいます。しかし、「乗りたい」というお子さんばかりではなく、「静かに近くで様子を見たい」、「なでていたい」、そういうお子さんもいるのです。私たちは、一人一人のお子さんの気持ちを大切に、かけがえのない時間をともに創ってみようと思います。どうぞ、「怖くないから乗ってごらん」とお子さんを無理に押し出さないで下さい。

(1) 乗らないこともあります：不安なのはいいや馬に乗せられてしまうよりも、ドキドキしながら近づく事に挑戦し、やっと馬に触れることができたという経験の方がずっと大きいのです。

(2) お一人の時間の目安は15分です：実際に馬と触れ合うのは大変短い時間です。しかし、その過ごし方によっては、一生忘れられない素敵な15分になると私たちは信じています。お子さんと馬たちと共にそれを創り出す事にチャレンジしたいと思います。

3. 馬と私たちにお子さんをお任せ下さい。

今日やってきているのは、これまでにたくさん子ども達を乗せ、それぞれの子ども達に忘れられない思い出を創ってきた馬たちです。そして私たちスタッフも、たくさん子ども達の馬との出会いを仲立ちしてきました。この時間、どうぞ馬と私たちにお子さんをお任せ下さい。

そして、どうぞ、馬と出会い、触れ合うお子さんの姿をじっくりとご覧下さい。もし、皆様の助けが必要になったときには、すぐにお声をおかけします。

4. 索の外側でご覧下さい。

馬はお子さんを不安がらせないようにするために、とても気を使っています。短い時間ではありますが、私たちもお子さんと馬との出会いの時間を濃密で豊かなものになりたいと考えています。これを実現するために、どうぞ索の内側に入らないでご覧いただきますよう、お願い致します。また、紙片や布また傘などがはためく様子は、馬たちを驚かしてしまう事があります。どうぞお控え下さいますよう、重ねてお願い致します。

5. お子さんの表情を、馬や私たちとのやり取りをご覧下さい。

お子さん達は、日常生活にはあまりない経験を今、しようとしています。きっとドキドキワクワクしているに違いありません。ちょっと不安もあるかもしれませんね。そんな、挑戦しているお子さんの表情の変化、成就した表情、姿勢の変化、馬や私たちとのやり取りの様子を是非見逃さずにご覧下さい。きっと、皆さんが考えていらっしゃるよりずっとしっかり成長している姿がそこにあるに違いありません。

6. 帰り道、帰宅後話題にする。

充実した豊かな体験をした後というのは、穏やかで甘い余韻が続くものです。それは、馬と触れ合ったお子さん自身だけではなく、それをご覧になった保護者の皆さんも同様だと思います。私たちは、今日の機会がそのようなものになるよう、努力したいと思います。帰り道、そして帰宅後、どうぞ今日の出来事をご家族で話題にしてみてくださいと思います。

7. どうぞ、お教え下さい。

今日のことについて、お子さんの様子から、私たちのかかわり方からお感じになられたこと、お考えになられたことがありましたら、どんな内容でも結構ですので、担任の先生にお伝え下さい。私たちはそれに学び、さらに努力・工夫して行きたいと思います。

<資料4>

ご感想・ご意見をお聞かせください

お名前_____

1. 乗馬の学習・体験の後、お子様の身体などに変調はありませんか？ もしお気づきのことがありましたら、どうぞお教えてください。また、それが気がかりであるような場合にはすぐにご連絡ください。

2. 馬とのふれあい、乗馬についてお子様の様子をご覧になってお感じになったことをお教えてください。

3. 乗馬の学習・体験の後にお子様に見られた変化やエピソードがありましたらお聞かせください。

4. 指導者や活動の内容や方法についてお気づきのことがありましたら、お教えてください。

5. その他、何でも結構です。参加されてお感じになったこと・ご意見をお聞かせください。

ご協力、誠に有り難うございました。皆様に教えていただきましたことをもとに、より充実した内容を工夫していきたいと存じます。

<資料 5 >

乗馬体験のための個人調査票

以下は、それぞれの身体に応じた馬を選び、セッションを工夫するためにお聞きするものです。数値に関し、お聞きした内容を今後の実施のために参考にさせていただくことはありますが、個人情報に他が漏洩されることはありません。

担当者：

1. お名前： _____

2. 年 齢： _____ 歳

3. 身 長： _____ cm

4. 体 重： _____ kg

5. 身体の状態：

(1) 医師から指摘されているような運動上の制限があるかどうかについて該当する番号に○をつけてください。

- 1. ある
- 2. ない

「ある」と答えられた方は、その内容を具体的にお書きください。

(2) 慢性的な腰痛がありますか。「ある」方は () 内に具体的にお書きください。

- 1. ある
- 2. ない

(3) 股関節の異常がありますか。

- 1. ある
- 2. ない

(4) 椎間板ヘルニアや頸椎等、脊椎の異常がありますか。「ある」方は () 内に具体的にお書きください。

- 1. ある
- 2. ない

(5) 馬の毛についてのアレルギーはありますか。

(6) その他、馬に乗るということに関連して私たちに伝えておきたいことがありましたら、お教えてください。

ご協力有り難うございます。皆で充実した機会にいたしましょう。
お問い合わせは _____ までお願いいたします。

第 Ⅲ 部

大洋村におけるポニー活動事業

深 野 聡

大洋村におけるポニー活動事業

深 野 聡

(社団法人 東京乗馬倶楽部)

1 大洋村について

大洋村は、茨城県南東部の鹿島郡に属し、東は太平洋、西は北浦に面した、自然美に恵まれた村である。年間を通じての温暖な気候と肥沃な土地に恵まれていることから古くから農業が盛んであり、にんじん・さつまいも・メロン・イチゴ等の栽培が今日では盛んである。

村の人口は11,053人(平成12年国勢調査)であるが、少子高齢化が非常に進んでおり、65歳以上の人口2,759人に対し、15歳未満の人口は1,457人となっている。

村内の各学校と在籍する子どもたちの状況については表1のとおりである。

表1 【大洋村の各学校の状況】

学 校 名	児 童 生徒数	学 級 数		
		普 通	特 殊	合 計
白鳥東小学校	186	7	2	9
白鳥西小学校	153	6	1	7
上島東小学校	204	7	1	8
上島西小学校	56	5	—	5
小 学 校 計	599	25	4	29
大洋中学校	351	11	2	13
つばさ幼稚園	118	6	—	6

(学校基本調査 平成13年5月1日現在)

2 ポニー活動事業に至るまで

村では基幹産業である農業の活性化を図るため、有機農法に関する調査を以前から始めており、農地の地力回復に重要な役割があるとされる堆肥の中でも、馬糞堆肥に優れた効果があることにいち早く注目していた。

また、自然が多く残されている地域特性をうけ、村内において馬を飼育し、農業に留まらず、教育・福祉といった行政の関わる幅広い領域において、馬の特性を活かし、地域づくりに役立てる可能性を探るべく、平成8年度より日本各地の行政における馬の活用事例の調査を行ってきた。

この結果、馬事に関する事業を行うにあたっては、馬の中でもより体格の小さなポニーで開始したほうが安全性、金銭面の負担といったリスクが少なく済むという結論に達した。

こうした状況を受け、平成10年4月より村の健康増進

施設『とっぷ・さんて大洋』の敷地内にポニー広場の整備を開始し、同年6月に、『たいよう馬の杜』としてポニー事業を開始するに至った。

【ポニー活動事業のねらい】

飼育・乗馬といったポニーとの素肌でのふれあいを通じて、施設を取り巻く自然環境と村の人々の営みを体験することにより、青少年の豊かな人間性の確立を導き、動物・自然愛護の精神と郷土愛を育むことをもって青少年の健全育成を図ることを目的とする。あわせて、馬糞堆肥を利用した農作物のシンボリック的存在としての地域産業のイメージアップと、馬事振興による総合的な地域づくりを期待する。

【本研究との関連】

馬を教育に活かすとはどのようなことかについて担当者が具体的に知るとともに、村民に知ってもらう機会として平成8年1月、笹本 健、滝坂信一両氏(国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部)及び高橋公正氏(芝山カントリーファーム)に依頼し、村内在住の障害のある子どもの体験乗馬会を実施した。

さらに、ポニー活動事業を開始するにあたり、内容面、実施上の工夫や配慮に関し国立特殊教育総合研究所肢体不自由教育研究部に支援を求めた。具体的には、教育委員会担当者、村内の保育所、小・中学校の校長、教頭及び教務主任を対象とした講義、ポニーを用いての研修会研修会を行った。平成11～13年度には研究協力機関となり、研究フィールド及び実施資料を提供した。

【大洋村のポニー活動事業の目標】

- (1) 青少年を対象とした各種ポニー体験事業の実施
- (2) 馬糞の農地還元と余剰農作物の活用のシンボル
- (3) 馬を仲立ちとしたボランティア活動の推進
- (4) 総合的な村のイメージアップ

3 施設の概要

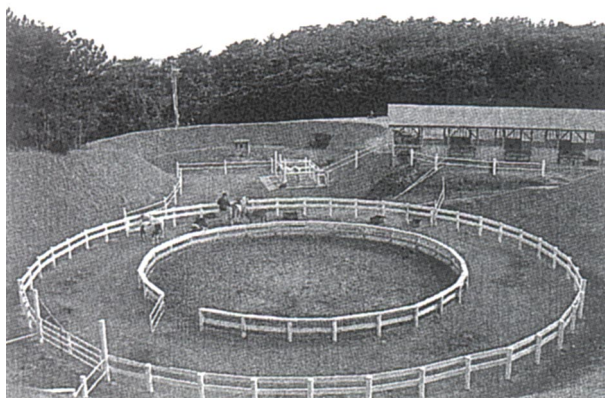
『たいよう馬の杜』の主要施設は、前出の『とっぷ・さんて大洋』の敷地内にあった調整池等の既存の地形を活かしながら整備された。

写真1に見られる柵などの主要な工作物は、村職員をはじめ村内・外から集まったボランティアが中心となって手

作りで製作したものである。

なお、飼育しているポニーと施設の概要については下記の通りである。

写真1 【たいよう馬の杜・施設全景】



中央が丸馬場と引き馬コース。その奥が洗い場と馬小屋

表2 【ポニーの概要】

名 前	生年月日	性別	毛 色	体高(cm)
ク リ シ ン	H 1. 7. 31	雌	葦 毛	115
メ ロ ン	H 3. 4. 2	雌	ゴールドダン	120
オ レ ン ジ	H 3. 5. 5	雄	黒 ブ チ	107
レ モ ン	H 3. 3. 3	雄	茶 ブ チ	105
アプリコット	H 3. 5. 30	雌	茶 ブ チ	105
チェリー	H 11. 7. 31	雌	栗 毛	103

※ 平成14年3月1日現在

※ 雄についてはすべて去勢済み

【施設の概要】

- ・馬 小 屋 1 棟 (管理人部屋含、66㎡)
- ・馬洗い場 1 面 (2 頭用)
- ・調教用丸馬場 1 面 (R=7.5m)
- ・円形引き馬コース 1 面 (丸馬場外周、全長70m)
- ・放 牧 場 1 面 (約400㎡)
- ・馬 運 車 1 台 (2 t 積、ポニー 4 頭輸送可能)

4 活動状況について

『たいよう馬の杜』のポニー活動事業については2つの事業形態があり、子どもたちに自転車やバスなどの方法によって施設まで来てもらい、厩務作業も含め本格的な体験活動を行うものと、ポニーを馬運車に乗せて学校等へ派遣し、ポニーとふれあうことを中心に活動するものである。

対象は基本的に村内の子どもたちとしており、幼稚園児から中学校生徒まで、最低でも年1回はポニーとふれあう

時間が作れるよう年度当初に各学校と事前協議を行い、年間の事業計画をたてている。

また、活動時の指導スタッフとしては、村職員とポニーの飼育作業を支援している村のお年寄りがあっている。

表3 【たいよう馬の杜活動状況】

年 度	事業回数	のべ参加者数
平成10年度	38	2,441
11年度	65	3,153
12年度	41	2,015
13年度	51	2,525
累 計	195	10,134

※ 平成10年度は、6月22日～平成11年3月31日

※ 数値は村外へのポニー派遣時を含む

写真2 【学校での活動風景】



グループに分かれて活動する

5 体験活動の内容

体験活動の内容については、たいよう馬の杜の施設（以下「施設」）で行う場合と、ポニーをどこかに派遣して行う場合とで若干の相違があるが、おおよそは表3で示した活動を、参加人数、子どもの体格、活動時間等を考慮し組み合わせている。

1回の活動については、1時間から2時間程度としており、参加する子どもの数については、スタッフの都合から40名程度までを限度としている。ポニーの乗せる人の目安としては体重50kgとしているが、体格の大きい子どもはほとんどがオーバーしてしまうので、その場合は大きなポニーに多少無理をさせてに乗せてしまったり、馬を牧場から借りてきて実施した（大洋中学校にて実施）場合もあった。

なお、学校の体験事業では、各学校の学年ごとに活動を実施するが多い。

表3 【主な活動の内容】

活動の名称	活 動 の 内 容
え さ や り	ポニーにニンジン等のえさを与える。 包丁を使って食べやすい大きさにカットするところから始める場合もある。
ボ ロ 取 り	馬小屋や放牧場に落ちている馬糞（ボロ）を熊手とてみを用いて掃除する。 （写真2）
ブラッシング	ポニーの体にブラシをかけてきれいにする。場合によっては水洗いを行うときもある。（写真3）
蹄 掃 除	蹄の裏に詰まっているボロや砂等を掃除する。脚を持ち上げる人と掃除をする人に分かれて行う時もある。
引 き 馬	自分の引き綱を持ち、ポニーを引いて歩く。規定のコースを歩いたり、放牧場からの移動等を行う。
乗 馬 体 験	引き馬されているポニーに乗る。慣れてきた場合は、速歩を入れるときもある。
調 教 体 験	丸馬場内において、ポニーの調教活動を体験する。（写真4） ※ 施設での事業に限る

写真3 【ボロ取りの様子】



放牧場に落ちている、ボロ（馬糞）を道具を使って拾い、ビニール袋に入れる

【体験事業の活動内容モデル】

○ 施設で行う場合（2時間）

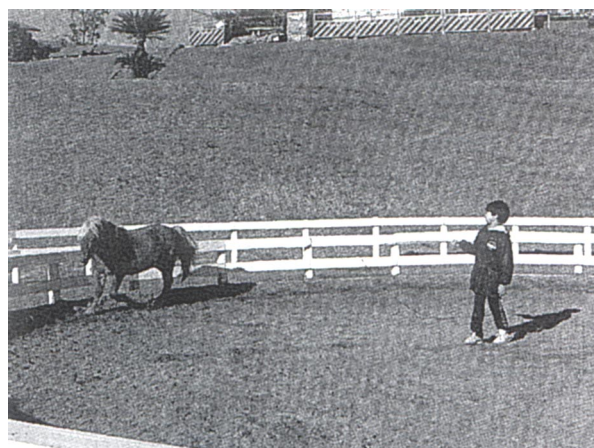
あいさつ → 活動の説明とグループ分け（5分）→ 引き馬（ポニーの移動）と活動準備（10分）→ ボロ取り（15分）→ ブラッシング（15分）→ 蹄掃除（15分）→ 乗馬体験（45分）→ えさやり（10分）→ あいさつ

写真4 【ブラッシングの様子】



繋がれているポニーの体を、小さなブラシを使ってきれいにする

写真5 【調教体験の様子】



追いムチを使って、馬を丸馬場の中で運動させる

○ 学校で行う場合（1時間）

あいさつ → 活動の説明（5分）→ 引き馬（馬運車から出してつなぐ）と活動準備（5分）→ ブラッシング（10分）→ 乗馬体験（25分）→ えさやり（5分）→ 引き馬（馬運車に乗せる）と片付け（5分）→ あいさつ

6 ポニー体験学習

『たいよう馬の杜』の活動の中心となっているのが、平成10年の事業開始時から行っている村内の各学校を対象とするポニー体験学習である。

事業の捉え方としては、各校で表現の仕方に多少の違いはあるものの、ポニーとのふれあいを通じて情操を豊かにする部分を最も期待している。

(1) ねらい

ポニーとのふれあいや、乗馬、飼育活動等の各種体験を通して、動植物を愛し自然を大切にす心、友達を大切にす心、自己を見つめ自立する心育てる。

【期待している内面的なステップ】

子供たちが自ら進んで、ポニーの世話や乗馬を行い、ポニーの性質や行動のパターンを知る。



ポニーとのふれあいで必要な約束、知識、技術を得る。



ポニーが嫌がる、危険な状態になる自分の行動を規制し、ポニーとのふれあいの質を高める。



「自分で考え、自分で判断する」規範を身に付け、これからの生活に役立てる。

【期待している気持ちの変化】

活動前の気持ち

馬は、
 ・怖い
 ・大きい
 ・臭い

存在である。



活動後の気持ち

馬は、
 ・かわいい
 ・目が大きい
 ・後ろは危ない

存在である。

気持ちの変化から、ポニーとの距離を近づけ、生き物に感情、意思があることを知る。

(2) 実施の方法

実施するにあたっては、各校の教務主任が連絡会等の場面で調整を図り、日時が重ならないように配慮しつつ予め学習計画案を作成する。事業の配当時間についても、すべて学校に任せており、扱いの仕方も生活科、理科、学校行事等様々である。

村では、各校から寄せられた計画案を元に最終的な調整と事業計画をたて、それぞれの参加者の体格や時間に依りて学習内容を組み立てていく。

事業の形態は、施設に近い白鳥東小学校については、施設で体験学習を行い、その他の学校についてはポニーを学校へ派遣して行った。

(3) 平成13年度実施状況

○ 白鳥東小学校（7回）

実施日	対象学年	人数	場所
5月11日	特殊学級	5	施設
6月11日	特殊学級	5	施設
7月17日	特殊学級	5	施設
10月11日	4年生	33	施設
10月26日	特殊学級	5	施設
11月22日	特殊学級	5	施設
12月18日	特殊学級	5	施設

※ 1、2、3、5、6年生については雨天等により中止

○ 白鳥西小学校（6回）

実施日	対象学年	人数	場所
7月10日	1年生	30	学校
10月3日	2年生	24	学校
11月20日	4年生	22	学校
11月26日	3年生	23	学校
1月15日	5年生	23	学校
1月30日	6年生	30	学校

○ 上島東小学校（5回）

実施日	対象学年	人数	場所
6月25日	1年生	30	学校
7月2日	2年生	40	学校
9月26日	3年生	22	学校
10月12日	4年生	40	学校
11月8日	5年生	27	学校

※ 6年生は雨天のため中止

○ 上島西小学校（5回）

実施日	対象学年	人数	場所
6月28日	1～4年生	45	学校
10月2日	1～3,5,6年生	45	学校
10月25日	1～6年生	56	学校
2月7日	1～6年生	56	学校
2月27日	1～4年生	44	学校

○ 大洋中学校（2回）

実施日	対象学年	人数	場所
2月26日	1～3年生	—	学校
3月7日	1～3年生	—	学校

※ 休み時間中に自由にさわられるようにした

○ つばさ幼稚園（4回）

実施日	対象学年	人数	場所
6月18日	年長	50	幼稚園
6月19日	年少	50	幼稚園
7月9日	年少	56	幼稚園
2月22日	全児童	56	幼稚園

つばさ幼稚園から大洋中学校まで、平成13年度は29回の体験事業を実施してきたが、雨天等により一度延期になってしまうと学校の行事の関係から再び日時の計画をたてるのが困難になってしまい、結果的に6回が未実施のままで年度末を迎えている。

写真6 【白鳥西小学校での活動風景】



校庭を乗馬で歩く。二人一組となり乗り手と引き手を交代しながら行う

表4 【活動内容と子どもたちの様子】

活動内容	子どもたちの様子
あいさつと注意	<ul style="list-style-type: none"> ・素直に聞く ・こちらの言ったことを繰り返し話す ・喋りつつける ● <u>気づいたこと</u> ・ポニーの後ろに行ってはいけないという約束が興味深そう ・注意点は良く覚えている。しかし行動につながらないケースもある ・回数を重ねるにつれ、「なぜそのことを注意しなければいけないのか」という質問が出る ● <u>留意点</u> ・2回目以降の事業についてはこちらから注意点を子供たちにきく
(ニンジンやり)	<ul style="list-style-type: none"> ・口と舌の感触に驚く ・怖くてニンジンをとす ・友達に譲ってしまう子 ● <u>気づいたこと</u> ・「食べていいか？」と聞いてくる ・男の子の方が怖がる子が多い ・「何故好きか？」と質問する ・「他に何を食べるか」と聞いてくる ● <u>留意点</u> ・高学年には自分たちでニンジンを切らせる ・ニンジンの切り方により手で握るものと手に乗せるものに分ける

活動内容	子どもたちの様子
ポロ取り	<ul style="list-style-type: none"> ・くさい、くさいと騒ぐ ・自分から進んで活動する ・ポロを転がして遊ぶ ・1つ1つ確実に拾っていく ・おおざっぱに掃除をする ・喋ってばかりいる ● <u>気づいたこと</u> ・周りに注意する子が現れる ・くさいくさいという割には楽しんで作業をする ・馬糞の状態を、「大きい」、「柔らかい」、「新しい」等と叫ぶ ・回数を重ねるにつれ、要領がよくなり、早い時間で同じ作業を終えることができるようになった ・事業後の絵や感想文にポロ掃除のことを書く子が多い ● <u>留意点</u> ・ポロは肥料になると説明する ・小さめの作業道具を用意している
ブラッシング	<ul style="list-style-type: none"> ・こわごわやる ・「どこが気持ちいい」と馬に聞く ・力強くブラシをかける ・いつまでもブラシをかける ・気持ちいいと頬擦りする ・ポニーの顔をみつめる ・ブラッシングの上手な友達にすぐ交代しようとする ● <u>気づいたこと</u> ・ポニーの体があったかいことに気づく ・力の入れ方が難しそう ・ポニーが自分の方を向いてくるとびっくりする ・肌触りを楽しんでいる ・毛が抜けることが興味深そう ● <u>留意点</u> ・両手で馬にさわると指導する ・ポニーと仲良くなるためには、ブラッシングが重要であると指導する
蹄掃除	<ul style="list-style-type: none"> ・脚が持ち上がらない ・ポニーが動かす脚にびっくりして手を離す ・どうしたらよいか戸惑う ・こわごわ脚に触ったり、蹄を掃除している ● <u>気づいたこと</u> ・蹄の裏を観察している ・「掃除して痛くないのか？」と聞いてくる ・脚を持ち上げることは難しいが、回数を重ねるうちに上手になってくる ● <u>留意点</u> ・脚が上がらない場合は、スタッフが協力したり二人一組で行う。 ・掃除にしゃがみこんでしまうことがあるので注意する

活動内容	子どもたちの様子
引き馬	<ul style="list-style-type: none"> 思い通り歩かないポニーに困惑 ポニーのそばに近づけない 手を振ったりして何とかポニーに意思を伝えようとする 他の人をお願いしてしまう 首ごと捕まえて力づくで動かす ● <u>気づいたこと</u> 引いているポニーを名前呼び、愛着がわくようである 待っている子からいろいろかけ声が入る 引き綱を引きずる場合が多い 回数を重ねるにつれ、ポニーが草などを食べて言うことを聞かないときに、無理に動かそうとするのではなく、まずは様子を見るようになった ● <u>留意点</u> 引き綱を持てばその人がポニーの主人であると指導する
(ポニーに乗る)馬	<ul style="list-style-type: none"> こちらの指示どおり上手に乗る ドスンと元気よく座る 自分ひとりで乗れない 念入りにポニーに挨拶をする 乗る場面にきて怖くなってくる 乗り方を忘れてしまう ● <u>気づいたこと</u> ポニーとの挨拶を忘れることが多い、乗る行為に集中してしまう 重くてかわいそうだという あぶみを気にする人とそうでない人がいる ● <u>留意点</u> 乗れない場合には手伝うよう指導 必ず乗る前後にポニーに挨拶するよう指導
(乗って歩く)馬	<ul style="list-style-type: none"> 自然と笑う顔になることが多い 何も喋らずに下を向いている スタッフに話しかけてくる ポニーの首の辺りをなでる 辺りを落ちつかなそうに見渡す ハンドルにしがみつくと 全身に力が入る 体が揺られつられふらつく ● <u>気づいたこと</u> 前かがみになり下を向いている子が多い 周りの友達に手を振っている 待っている友達から「どんな感じ？」と声を掛けられる 普段よく喋る子は言葉の数が更に多くなり、静かな子は何も言わなくなる。 複雑な揺れにびっくりしている 自分が感じたことをそのまま言葉にしている ● <u>留意点</u> 前を見るように指導し、自分でバランスを整えさせる 発進時に出発してよいか乗り手に確認する 乗り手がリラックスできるよう声をかける

活動内容	子どもたちの様子
(乗って速歩をする)乗馬	<ul style="list-style-type: none"> 「怖い」、「こえー」と連発する 上手にきれいな姿勢で乗る スピード感に驚く ハンドルにさらにしがみつくと 気持ちの余裕がなくなる ● <u>気づいたこと</u> 周りの友達が、乗り手が揺れている様子を見て笑う 「落ちちゃう」と叫ぶ割には、自分でバランスをとっている 慣れてくると「もっと長く」、「もっと速く」と要求してくる 駆歩がもっと速いことを説明すると、「これ以上ゆれるのか!？」と聞いてくる 自分は速歩をしなくていいとスタッフに伝える人もいる ● <u>留意点</u> 歩きの変換時には乗り手の確認を取り、スムーズに変換するよう心がける 乗り手の様子に合わせ、速歩を入れるか入れないかを判断する
(ポニーと歩く・サポートをする)乗馬	<ul style="list-style-type: none"> 乗っている子に声をかける 後ろの方でとぼとぼ歩く ポニーの顔から離れて歩く 馬の様子を気にしないで歩く ● <u>気づいたこと</u> ポニーの歩く速さを気にしないことが多い 歩き終わると無造作に引き綱を離してしまう 乗り手の希望に合わせ、立ち位置を変えたり、歩く速さを変えたりしている ● <u>留意点</u> 乗り手と二人一組となり交代して行うようにしている 引き綱を必要以上にたるませないようにし、次の人に渡すよう指導する
(ポニーの紹介)他	<ul style="list-style-type: none"> 名前を連呼する 間違えて覚える 音で聞いても覚えていない ● <u>気づいたこと</u> なぜその名前なのか由来を聞く子が多い 自分たちなりの呼称をつけてしまう ● <u>留意点</u> ポニーの性格や特徴も合わせて説明する
(えさの紹介)他	<ul style="list-style-type: none"> 初めて見る馬のえさに驚く えさを興味深そうにさわる 食べれるか聞いてくる 「〇〇は食べないのか」と聞いてくる ● <u>気づいたこと</u> どのくらいの量を食べるか聞いてくる 「おいしいのか」と聞く ● <u>留意点</u> 可能な場合は飼いつけも行う

活動内容	子どもたちの様子
(準備・後片付け)その他	<ul style="list-style-type: none"> ・進んで手伝う ・文句を言いながら手伝う ・手伝う気はあるが出遅れる ・道具を見ながらこれは何に使うと判断しつつ運ぶ ● <u>気づいたこと</u> ・ほとんどの子が嫌がらずに活動している ・駆け足で荷物を運ぶ子が多い ・馬糞に近いもの（馬糞を入れる袋、てみ等）は人気が低いが、必ず自分から運ぶ子が出てくる ● <u>留意点</u> ・全員で協力し、すばやく終わらせるようにする

(4) 工夫したこと

【事業開始初期】

平成10年の事業開始時は、ほとんどの子どもたちにとって馬（ポニー）と関わるのは初めてのことであり、ポニーを目の当たりにして「大きい」とか「怖い」というように反応することが予想された。

そのため、子どもたちにとって第1回目となる体験活動では、活動の最初にニンジンを食べさせたり、ボロ掃除を行う場面を比較的ゆったりととることで、ポニーについて考え、生きた動物であることを強く印象付けさせる時間となるよう心がけた。そしてブラッシングなどの一連のポニーに関わる活動をした後に、引き馬による体験乗馬を行い、ポニーと過ごす時間の楽しさを強く感じてもらい、ポニーとの心理的な距離を近づけるように計画した。

その結果、ポニーにさわれない、乗れないという子どもを、年間を通じて1、2名に程度に抑えることができた。

また、ポニーに近づいてさわると、ポニーに乗るときには必ずポニーに「よろしくね」と手で軽く首を叩き、挨拶をするようにと指導した結果、ポニーに対して自然に挨拶ができる子どもが増えたと同時に、挨拶の際、スタッフに対して「ポニーの機嫌はどう？」とか、「怖くない？」と会話のきっかけとなる言葉も発せられる様になった。

これらから、ポニー、スタッフともすんなりと子どもたちに受け入れてもらい、2回目以降の体験は、よりスムーズに行えるようになった。

【事業の組み方】

2時間から1時間という限られた時間の中で、子どもたちにいかに集中力を持続しつつ、ポニーと過ごす時間を楽しめると考えのもと、「待つ」時間ができるだけ発生しないように心がけた。

具体的には、多人数で活動しているときは、ボロ掃除をする班と、ブラッシングをする班にわかれ、時間によって入れ替えたり、乗馬の待ち時間中に引き馬の練習をさせる

などである。

また、年に1、2回の活動であっても、回数を重ねるにつれ子どもたちのポニーに対する緊張が薄れ、ポニーの後ろを気にせず通る、わざとポニーの嫌がる行為をしてみる、乗馬の際挨拶を忘れるなどのことが活動中見られた。

このため、活動の開始時には必ずポニーと関わる時の注意事項を確認すると同時に、ポニーはおとなしいが安心してはいけないということ、ポニーの体格の大きさやその性質から不幸にも事故が起こる可能性もあることを説明した。また、乗馬しているときにも、ハンドルから手を離してみる、目をつぶってみる、手を真横に広げ体をひねってみるなど、技術的難易度を少しずつ上げ、子どもの興味が増す内容となるよう心がけた。

【活動場所に対して】

施設で活動する際のメリットは、馬に関わる多様な活動が比較的安全に行えるということと、馬が日常を過ごしている場所と言うことで、子どもたちがある意味よそ者の状態になり、より緊張感が生まれてくることである。

このため、平成10年の事業開始時には、可能な限りバスを運行することで施設での活動を多く用意し、子どもたちがポニーとの関わりで必要なルールを印象深く吸収できるよう心がけた。

一方、学校で活動する場合は、子どもたちが安心して活動できるように、ポニーを安全につないでおくことが求められた。

これに対しては各学校の校庭に必ずあった鉄棒を活用し、コーンで仕切りをつくることで対応した。

写真7 【学校でポニーを繋ぐ】



コーンを使って1頭ごとにポニーを仕切る

(5) 体験学習に関する反応

年度末に各校の先生方に集ってもらい意見交換会を行い、ポニーと一緒にいるときの子どもたちの感想と、先生から眺めて感じたこと、日常の学校生活との相違点等につ

いて感想を聞いた。

子どもたちから

- ・楽しかった
- ・面白かった
- ・怖かった
- ・かわいかった
- ・高かった
- ・大きかった
- ・暖かかった
- ・目が大きかった
- ・馬と仲良くなれて嬉しい
- ・馬も怒るし、怒ったら噛まれる
- ・後ろは危ない
- ・脚を持ち上げるのが自分には難しい
- ・急に動くことがある
- ・肌触りがいい、きもちいい
- ・思ったようには動いてくれない
- ・嫌がることはしてはいけない
- ・馬も性格が違う

先生から

- ・大半の子どもたちが真面目に、注意力を持って活動していたように思われる。
- ・大型の動物にも関わらず子どもたちはすんなりと受け入れていた。
- ・楽しんで活動している様子で、いい笑顔を見せる。
- ・ポニーへの理解、愛着が深まった。
- ・乗馬の待ち時間をなんとかしてほしい。
- ・同じ活動の繰り返しではなく、今後は更なる変化が必要だ。
- ・ポニーではなく大きな馬にあこがれているようだ。また、男子は駆歩をしてみたそうだ。
- ・裸馬に乗せてもらって初めて子ども達が笑顔を見せる理由が分かった。
- ・慣れてくると不注意な行動が出てくるようだ。
- ・ふれあい活動の種類をもっと充実させてほしい。
- ・雨天の場合は中止になってしまうが、子どもたちは雨でも「ポニーどうしているかな」と気にしている様子が見られた。雨が降っても何か活動ができないか。
- ・施設での活動をもっと行いたい、移動手段の確保が難しい。

(6) スタッフが感じたこと

ほとんどの子どもたちにとって、年に1、2回。しかも乗馬に関して言えば1回につき1分程度という体験学習であったが、すべての子どもたちが回数を重ねるにつれ、自分とポニーとの距離を縮めることができているように感じる。

これは、子どもたちがポニーとの活動で注意すべき点を

聞いた上で、実際の体験を通じて気をつけなければいけない約束事を肌で感じているからであると思われる。

また、これまでの事業回数を重ねるうちには、ブラッシングの際に噛まれたり、足を踏まれたりする事故が、怪我をするまでには至らなかったものの数回発生した。本来ならスタッフとして未然に防ぐべきことであるが、その場面に直面したときの子どもたちの反応が、ただ驚くというものから、「なぜ噛まれたのか」、「自分が問題ある行動をとらなかったか」というように、事故の原因、背景についても考えるようになり、子どもたちが受けるショックが軽減されてきたように感じた。このような変化も、この体験の場を通じてポニーの特性が子どもたちに理解されつつあるということではないだろうか。

(7) 今後の課題

子どもたちとポニーとのふれあいの質を高めることが今後も第一に求められていくが、これまで回数を重ねるにつれて子どもたちの知識と能力が向上し、これまで以上に乗馬的な技術指導を取り入れないと物足りないような言葉を見せる場面が出てきたり、体格的に大きくなるにつれ、ポニーだけによる事業では物足りない様子が出てきた。

また、生き物を扱う都合上、ポニーをいい状態で管理する能力とそのためスタッフのスキル向上も今後更に求められていく。

問題点

- ・スタッフ数の不足から、同時に複数のポニーを動かすのが困難。
- ・体が大きい子どもたちには、ポニーが小さい。
- ・常に危険性が伴う活動なので、安全面への更なる配慮が必要。
- ・施設での活動を希望したときは、移動手段の確保が困難。

7 特殊学級における取り組み

『たいよう馬の杜』の事業開始時より、乗馬や厩務作業を各学校の体験学習として行っている中でポニーと過ごす時間に、子ども達の活動意欲や自立した行動を促す力を高める効果があることをうかがうことができた。この事業を開始する当初から、村内小学校に在籍する障害のある子どもの教育にポニーを活用することを重要な柱とした。内容として、単にポニーに乗るということを行うのではなく、ポニーのいることに伴う作業や世話の実施を含め、総合的な体験型の学習機会ととらえて展開して試行することになった。これらについては、必要に応じ国立特殊教育総合研究所と協議したり経過の資料を提供することにした。また、近年日本各地でも障害のある子どもたちに対して馬を用いた指導が効果をあげているという報告をうけ、

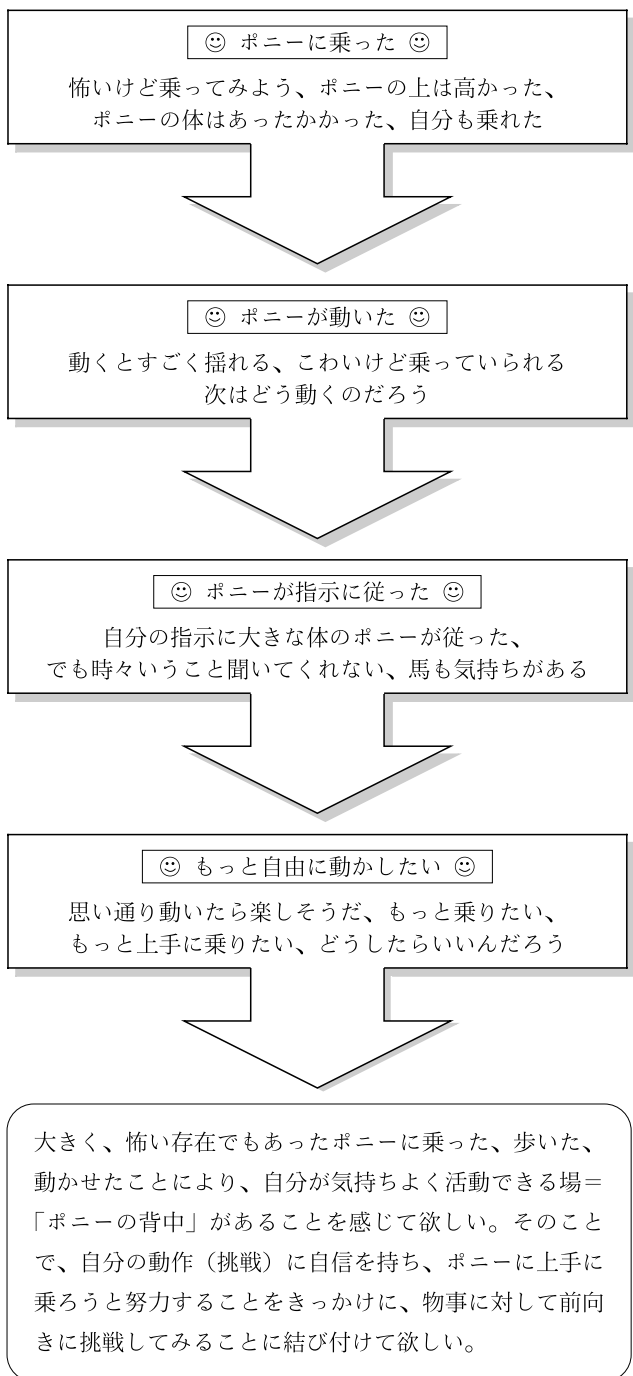
本村においても特殊学級の子どもたちに対してポニーを用いた指導の時間を設け、定期的、継続的に行うことで子どもたちの本来持っている力を伸ばす助けになればという願いのもと事業を開始するに至った。

(1) ねらい

村内の特殊学級に在籍する子どもたちは自閉的傾向、知的発達の遅れ等がみられ、対人関係、社会性、コミュニケーション能力に困難がある。

このような参加者の状況から、以下のことを期待した。

【期待する気持ちの変化】



特殊学級を対象とした事業は、活動の多様性と子どもたちの安全性の確保の点からすべて施設において実施することにした。

事業の参加者数は、1回について3～6名と少人数であったので、ワゴン車により子どもたちと先生を乗せ送迎することが可能であった。

活動内容については、基本的に体験学習の施設における事業と同じであるが、参加する子どもたちの数が少人数であるため、ボロ取り等の活動時における一人あたりの作業量は非常に大きくなっている。時間については、送迎の時間も含め2時間半から3時間程度とし、通常よりも長めに設定することでゆったり活動ができ、途中で休憩の時間を随時入れることができるよう配慮した。

【活動内容モデル】

集合・あいさつ・注意と今日の活動説明

↓ (5分)

ボロ掃除 (馬小屋・放牧場)

↓ (30分)

ブラッシング

↓ (15分)

蹄掃除

↓ (10分)

休憩

↓ (20分)

馬装

↓ (5分)

乗馬・引き馬

↓ (35分)

後片付け

↓ (10分)

えさやり

↓ (10分)

集合・感想をきく・あいさつ

(3) 実施状況

特殊学級を対象とした事業は、スタッフが子どもたちと関わる経験を積み、習熟度を高めてからのほうが期待する効果が大きくなるであろうとの判断により、『たいよう馬の杜』事業開始後1年を経過した平成11年度から開始した。これまでの実施回数は表5の通りである。

年度ごとに実施学校や人数に違いがあるが、これは子どもたちが卒業してしまい学級の在籍人数が著しく減少したり、雨天により延期とした結果、未実施になってしまったこと等によるものである。

表5 【特殊学級での事業実施回数】

学 校 名	平成13年度		平成12年度		平成11年度	
	実施回数	対象人数	実施回数	対象人数	実施回数	対象人数
白鳥東小学校	6	5	6	6	9	5
上島東小学校	—	—	—	—	7	3
大洋中学校	—	—	3	4	—	—
合 計	6	5	9	10	16	8

(4) 子どもたちの様子

ポニーとの出会い、乗ってみる等の場面における特殊学級の子どもの様子は、通常の体験学習のときに見せる子どもたちの様子とは大差はなく、スムーズに事業を行うことができた。また、参加人数が少なく、ゆったりと活動を行える事から、一人あたりのポニーとの関わりの時間が長くなり、結果的にポニーとの関係をより深めることができている様子であった。

写真8 【蹄の裏の説明をきく】



【印象に残った子どもたちのつぶやき】

ポニーとの出会い

- ・大きいなあ
- ・こんにちは
- ・かわいいなあ
- ・きゃあー
- ・目が大きいなあ
- ・乗ったら楽しそうだ
- ・今日は機嫌どうかなあ？
- ・今日は上手に乗れるかなあ
- ・このポニーはオス？
- ・このポニーはおかあさん？

ポニーにさわると

- ・あったかいねえ
- ・きもちいいねえ
- ・フカフカするよ

- ・毛が抜けるよ
- ・うわあー
- ・あっちの馬のが柔らかいなあ
- ・よろしくね
- ・どこをさわると気持ちいいの？

ニンジンを与える

- ・おいしいかい？
- ・いっぱい食べるなあ
- ・こらっ、だめでしょ（横取りしようとするポニーに）
- ・もっと欲しい？
- ・よだれがついたあ
- ・こわーい
- ・手を食べるなよ

ブラシをかける

- ・気持ちいいかい？
- ・毛がぬけるう、気持ち悪い
- ・きれいになったかなあ？
- ・よしよし
- ・こっち向くなよ（ポニーの顔が）
- ・〇〇君、ちゃんとやりなよ（遊んでる友達に）
- ・メロンちゃん！（ポニーの名前を呼ぶ）

ボロ掃除をする

- ・くさーい
- ・きたなーい
- ・おえっ！
- ・これは俺のボロ！（友達が取ろうとして）
- ・やだー
- ・いっぱいにとってきれいにしよう
- ・これは捨てる？（馬小屋の汚れたおが屑を）
- ・早くやろう
- ・ちゃんとやってよ！（道具で遊ぶ友達に）
- ・おわったあ
- ・きれいになった
- ・つかれた

蹄掃除をする

- ・難しいよ
- ・手伝ってよ！（友達に）
- ・いっぱい取れた
- ・足を動かすなよ
- ・取れないよ（つまったごみが）
- ・うわあ（ポニーが足を動かして）
- ・きれいにとれた

引き馬をする

- ・ちゃんと歩いてね
- ・行っくぞお
- ・こわーい
- ・さあ、レモンちゃん歩きますよ

- ・こらっ、そっちじゃないよ
(思わぬ方向にポニーが行って)
- ・しゅっぱあーっ！
- ・こっち来ないでよ！(引いている自分の方に)

○ ポニーに乗るのを待つ

- ・○○君、楽しい？(乗っている人に)
- ・早く乗りたいなあ
- ・あっちに行っていていい？(興味のある自動販売機に)
- ・あぁー、負けてしまった。もうだめだ！
(乗る順番を決めるじゃんけんで負けたので)
- ・つぎ僕だよ。
- ・こわいかぁ
- ・メロンちゃん！ オレンジちゃん！(名前を呼ぶ)
- ・今日は手を離して乗るよ

○ ポニーに乗ってみる

- ・うわぁ！
- ・たかーい
- ・気持ちいい
- ・きゃー
- ・こわいよぉ
- ・動いちゃやだ
- ・もっと早く歩いて！
- ・○○ちゃん、気持ちいいよ。
- ・速歩するの？
- ・落っこちそうだよ(揺れを感じて)

○ 送迎のワゴン車の中で(行き)

- ・今日は誰に乗るのかなぁ
- ・いい天気よ良かったね
- ・僕は今日、手を離して乗るんだ
- ・この前行ってきたんだよ
(施設のある『とっぷ・さんて大洋』に)
- ・かわいそうだから、朝ご飯を少しにしたよ！
(ポニーに乗るとき自分が少しでも軽いようにと)
- ・私は、今日をずっと楽しみにしていました
- ・チェリーは大きくなった？(産まれた子馬に)
- ・怖いかなぁ

○ 送迎のワゴン車の中で(帰り)

- ・あぁー、楽しかった
- ・いっぱいニンジン食べさせたよ
- ・また乗りたいなあ
- ・気持ちよかった
- ・ポロ取りの絵を描くよ
- ・今日の給食何かなぁ

(5) 工夫したこと

【スタッフの関わりと準備】

ポロ取り等の活動時は、最初に道具などの使い方を実際

に見せながら説明するだけに留め、子ども達の動作に必要な以上に介入することは避け、なるべく自分たちの力でその作業を完了させる場面をつくるように心がけた。その際、スタッフは常に子どもたちの言葉を聞くことができる場所にいるようにし、子どもたちの質問等には素早く反応できるようにした。学級の先生については、子ども達と同じ作業を体験してもらい、表情やつぶやき等を観察してもらった。

対象となった特殊学級の子どもたちは、身体的な障害はもっていなかったため、施設においてバリアフリー的な準備は特に必要としなかった。

【子どもたちの意思】

活動内容については、基本的に前出のモデルに基づいたものであったが、子どもたちが「○○をしてみたい」という発言をしたときには極力それを実現するよう配慮した。

【具体例1】

ポロ取り作業中、馬小屋に敷いているおが屑が少なくなっているのを見て、「おが屑を足してあげたい」と発言。

対 応 ⇒ 軽自動車の荷台に子どもたちを乗せて、おが屑を取りに行き、自分たちで馬小屋にまいて平らにならせた。

いつものポロ取り作業より、大きな達成感と充実感がある様子であった。

【具体例2】

ワゴン車で施設に向かう途中、「今日は天気が良くてきもちいいなあ。海に行ったら楽しいだろうなあ」と発言。

対 応 ⇒ ポロ取りの作業終了後、ポニーを連れて海に行き砂浜で引き馬と乗馬を行った。

「楽しい」「気持ちいい」という強いイメージが残ったようである。

【休憩時間】

毎回3時間程度と、かなりの長時間に及ぶ活動であったので途中に20分程度の休憩を入れるようにした。

この時間は、子どもたちが持ってきた飲み物と持ち寄ったお菓子を食べる時間となり、子どもたちはリラックスした雰囲気の中で自分が感じたことやしてみたいことを発言する場となった。また、スタッフも席を共にすることで子どもたちとのコミュニケーションを深めるのに役立てた。

(6) 報告された子どもの変化

事業後、担任の先生から寄せられた感想は、「明るい笑顔で活動している」、「積極的に行動している」というように、学校での日常の場面よりも生き生きとした表情を見せ

ているというものが多かった。

また、事業後子どもたちの様子に以下のような変化が見られたとの報告があった。

- ・初回の事業から楽しく活動することができたらしく、不登校の子は、「ポニー活動のある日なら来るよ」と発言し、その日は自ら登校できるようになった。
- ・他の学習時間では、活動に参加しようとしなかったことが多かったが、ポニースタッフに指示された活動はきちんとできており、対人の壁があまり感じられなかった。
- ・「今、ポニーはどうしているかな？」と学校で気にすることが多くなった。
- ・授業中に文字を自分から書こうとしなかった子が、ノートにいつの間にか「ポニー」という文字を書いていた。
- ・ポニー活動の様子を絵や作文で、表現力が豊かになっているようだ。
- ・海に行って乗馬したことが非常に印象深かったらしく、そのことをよく話している。
- ・ポニーの体重を質問して聞いた結果、重さのイメージがわきやすくなったようだ。

(7) スタッフの感想

特殊学級の子どもたちとは重点的に関わったことと、休憩時間をはじめとしてコミュニケーションを図る場面が多かったことから子どもたちの意思や気持ちの変化を強く感じることができた。そのせいか他の事業よりも充実した指導が行えた。

印象深かったのは、小学校の時に2年間事業を経験し、卒業していった男子と、ポニーを中学校に連れていった体験学習において再会したとき、彼が、「私は小学校でポニーをやったことが大変楽しかった。こうしてまたポニーと逢

絵1 【彼が小学校時代に描いた絵】



平成12年12月作成
芝生の上でポニーを引くスタッフと、よこにいる自分を描いていると思われる

えてすごく嬉しい」とポニーをなでながらしっかりと口調で語っていたことである。

その様子から、ポニーと過ごした時間が、非常によいイメージで彼の記憶に残されていることを感じ、彼らにとってインパクトのある時間であったことを再認識した。

(8) 今後の課題

体験学習における課題と同様、活動内容の一層の充実とスタッフのスキル向上はもちろんのことである。一方で、参加している子どもたちの対人関係や、コミュニケーション能力の改善という部分で効果を求める場合には、ある程度まとまった人数の中での活動が望ましい。しかし、現状の1校ごとの事業は、対象となる人数がもともと少ないがためその部分での効果はあまり期待できないといえる。また、在籍人数の状況によっては、事業の継続も困難になる可能性がある。

これらのことから今後は複数校の特殊学級事業を同時に実施することも今後検討していく必要があるといえる。

8 白鳥東小学校こころの教室・学び方教室

前項で報告した、特殊学級のポニー事業実施校のうち、初年度である平成11年度から継続して事業を行うことができたのが白鳥東小学校である。

この学級の児童たちは過去3年間にわたりポニーと継続的に関わり、その成長を見てくることができた。

(1) 在籍児童の特徴

在籍していたのは、自閉的傾向3人、場面緘黙1人、学習障害2人の計6人の児童で、異学年である。

知的発達の状態としては、中度から軽度の遅れが見られ、対人関係や社会性の障害、言語やコミュニケーションにおける障害、興味の限局性や執着的行動も併せ持っていた。

表5 【児童の実態】

学年	名前	実態と活動の実施期間
4年	A子	こころの教室、自閉的傾向 平成11年度から3年間
6年	B男	学び方教室（平成11・12年度は心の教室） 平成11年度から3年間
6年	C男	学び方教室 平成12年度から2年間
6年	D子	こころの教室、緘黙 平成11年度から3年間
6年	E子	こころの教室、自閉的傾向 平成11年度から3年間
中学1年	F男	こころの教室、自閉的傾向 平成11年度から2年間

※ F男については、平成13年3月に小学校卒業

(2) 実施回数

毎年、1学期と2学期を中心とする期間で月1回実施を目標にこれまで21回の事業を行ってきた。実施予定は、白鳥東小学校の体験学習の予定案に含め、年度当初に年間計画をたてている。

○平成13年度

- ・在籍児童：A子、B男、C男、D子、E子（計5名）
- ・実施日：5月11日、6月11日、7月17日、10月26日、11月22日、12月18日（計6回）

○平成12年度

- ・在籍児童：A子、B男、C男、D子、E子、F男（計6名）
- ・実施日：4月8日、5月19日、6月20日、10月18日、11月9日、12月15日（計6回）

○平成11年度

- ・在籍児童：A子、B男、D子、E子、F男（計5名）
- ・実施日：5月11日、5月15日、6月5日、7月3日、10月2日、11月6日、12月4日、1月12日、2月5日（計9回）

(3) 活動の内容

活動のスタイルとしては、スタッフが用意したワゴン車で朝学校まで迎えに行き『たいよう馬の杜』へ向かう。施設で特殊学級の活動内容モデルと同様の活動を行い、昼の給食前までに学校に送り返すというものである。

【活動予定】

8時30分	学校昇降口集合
8時40分	学校出発
8時45分	たいよう馬の杜到着
8時50分	体験学習開始
	↓ 特殊学級・活動内容モデルに準じた活動
11時40分	体験学習終了
11時45分	たいよう馬の杜出発
11時50分	学校到着

※学校と施設の往復は、スタッフがワゴンを運転する。

(4) 活動時の様子

【スタッフと会う】

- ・スタッフと顔を合わせたときに自発的に、「おはよう」、「今日お願いします」とあいさつをしてくる。
- ・楽しみにしていた様子であり、早くポニーにあいたいよなそぶりを見せる。
- ・「今日は天気がよくてよかった」など、その日活動できることを喜んでいる。

A子のつぶやき

ポニー、ポニー！、よろしくおねがいします、私は、○○

○です（自己紹介をする）

B男のつぶやき

○○先生おはようございます（スタッフに対して）

C男のつぶやき

早く行こう

E子のつぶやき

チェリーちゃん大きくなったかなあ（子馬のこと）、おはよう先生（スタッフに）

F男のつぶやき

私はすごく楽しみにしていました、早くポニーに乗りたいです

【施設に向かう車内】

- ・今日やりたい活動や、気になっているポニーのことを各自活発に話す。
- ・先生が彼らの会話に加わり、さらに話題が弾むと同時に、活動の注意を確認しあう。
- ・「暑い」、「寒い」というようにその日の天気具合や学校で流行っていることなどをいろいろ話す。

A子のつぶやき

うわあ、いい天気！

C男のつぶやき

俺、今日は手を離して乗るよ、今日は、スポーツドリンク持ってきたんだ

D子のつぶやき

チェリーちゃん元気かなあ、ポニーどうしてるかなあ

F男のつぶやき

私は、ボロ掃除を一生懸命やります、ん〜♪（アニメの主題歌を鼻歌で歌っている）

【あいさつ・作業の説明】

- ・集合して話をきく。A子は違う場面に興味をもっていている様子。
- ・作業の説明をするとき「はい」と返事をし、内容を思い出している様子。
- ・みんながそろると、「私は、○○○です。よろしくおねがいします」と、自己紹介になってしまうときがある。（一番最初の事業で自己紹介をした影響か）

A子のつぶやき

よろしくおねがいします、私は、○○○です（自己紹介をする）

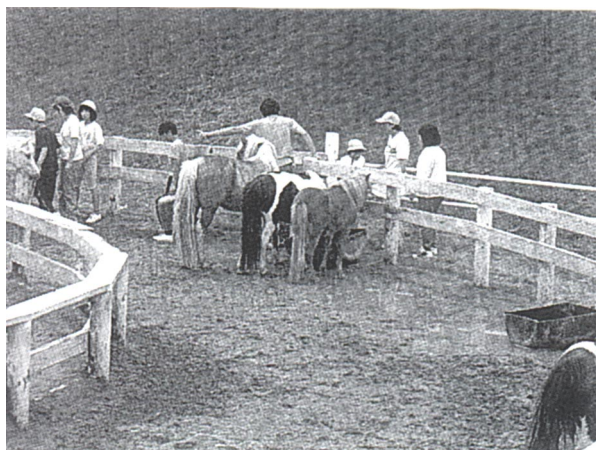
B男のつぶやき

まず、ボロ掃除からするんだよ

C男のつぶやき

早くやろう

写真9 【説明が終わり丸馬場に入る児童たち】



【ボロ取り】

- ・掃除の際に、尿のにおいやボロを敬遠する言葉がでてるが、活動そのものはきちんと行う。
- ・男子グループ、女子グループに自然と分かれて活動しているが、A子、F男の作業に対する集中が持続しにくい。
- ・熊手、てみ、ビニール袋の3つの道具を用いた活動であるが、自分たちなりに分業しようとしたり、効率のよい作業の進め方をしようと努力する姿勢も見られる。しかし、熊手を持っている児童は、ボロを飛ばして遊んだりしやすい。
- ・B男、C男は非常に積極的に作業を行っている。D子、E子は静かに、しかし確実に作業を進める。
- ・F男は作業に嫌悪を示し、「やだっ」と言い、何も作業ができなくなる時もあった。
- ・A子は作業をやめてしまい、自分の好きな場所に行く。

A子のつぶやき

うわぁ、こんなにたくさん（ボロを見て）、掃除しましょ、よいしょ、よいしょ、きたなーい、やだー（熊手を離して）

B男のつぶやき

うわぁ、いっぱいしてんなぁ、これは俺のボロだよ、端のほうにいっぱい落ちてるなぁ

C男のつぶやき

俺やるよ（終わってない馬小屋の掃除を）、うわっ、柔らかい、気色わりい、オガ掘ったらボロが出てきた

D子のつぶやき

ここにも落ちてるよ、きれいにしよう

E子のつぶやき

いっぱいしてるなぁ、きれいにしましょね、くさっここが汚い、〇〇君、ボロ踏んでるっ

F男のつぶやき

そっちの道具がいい（友達の使っている道具を見て）、早くポニーに乗りなぁ、まだ終わらない、おえっ

【ブラッシング】

- ・みんなが楽しそうに、リラックスした状態でブラシをかけている。肌触りを楽しんで、抱きついたりしている。
- ・お気に入りのポニーに向かって「気持ちいいかい」と語りかけている。
- ・「お腹のほうもやるの」、「お尻のほうもやるの」とスタッフに聞いてくる。
- ・「毛が抜けるなぁ」、「ホコリがいっぱい出るなぁ」とその様子を言葉にして発している。
- ・D子はポニーの顔がやや怖いらしく、友達と一緒にないとブラシをかけようとししない。
- ・A子、F男ともこの作業は比較的続けられる。いい笑顔を見せる。

A子のつぶやき

レモンちゃん（ポニーの名前を呼ぶ）、きれいにしましょ

C男のつぶやき

はぁ、気持ちいい（ポニーに顔をつけて）、ほらっ、いっぱい出るよ（ホコリを叩き出して）、動いちゃうよ（ポニーが）ここはどうブラシかけるの（毛並みが変わる場所で）

D子のつぶやき

こわいよう、そっちに行きたくない（ポニーの顔の方へ）

E子のつぶやき

きれいにしましょね、こらー、動いちゃ駄目でしょ、よしよし

F男のつぶやき

あったかーい、僕はあっちのポニーのほうが好きです

写真10 【ブラッシング風景】



【蹄掃除】

- ・比較的難しい作業。B男、C男は積極的にやろうとするし、できない友達がいると自分と交代することを申し出たり手伝おうとしている。
- ・A子はほとんど興味を示さない。
- ・F男は作業はするが、少してこずると自分でやめてしまう。

- ・D子はスタッフが介入すれば作業ができるが、一人で怖がって脚を持つとはしない。
- ・E子は自分のペースで仕事ができる。また、ポニーが脚を動かして抵抗すると、「こらっ」というように叱る。

B男のつぶやき

いっぱい詰まってるなあ、これはとりにくいよ、僕がやるよ（脚が上がらない友達に）

C男のつぶやき

うわぁ、脚動かすなよ（ポニーに）、重いなあ（脚が）、終わったよ

D子のつぶやき

こわい、これでいいの（スタッフにやる所を見せて）

E子のつぶやき

こらっ、脚あげろ、だめでしょ（脚を上げるのを抵抗するポニーに）、はぁ、いっぱい取れた

F男のつぶやき

はぁ、くたびれた、早くポニーに乗りなあ

【休憩時間】

- ・家から持ってきた飲み物と持ち寄ったお菓子を食べながら、リラックスした状態で会話をしている。
- ・「今日は何に乗るかな」とその後乗馬することを楽しみにしている
- ・行儀の悪い食べ方をしている人に先生が注意したり、スタッフが学校で何が流行ってるかなど話かける。

A子のつぶやき

いただきます、おいしかった

B男のつぶやき

手を離して乗りたいなあ

C男のつぶやき

速歩いっぱいしようよ、これ食べていい（残っていたお菓子を）、今日はこれもってきたんだ（飲み物を取り出して）

D子のつぶやき

天気がよくてあったかくていい

E子のつぶやき

チェリー大きくなったねえ

F男のつぶやき

次乗るんですか

【引き馬】

- ・各自交代しながら引き馬の練習をする。
- ・B男、C男は先を争ってやろうとする。E子も積極的に引き綱を持って歩かせることができる。3人とも上手。
- ・A子、F男は引き馬することは比較的気に入っているようだが、最後まで綱を持っていて次の人に渡すことができない。止まる場所に来るとすーっと手を離してしまい、自分の行きたいところに行ってしまう。

- ・D子は引き馬は上手にできるのだが、一人でいることが不安な様子。そばにスタッフがいないと動こうとしない。

A子のつぶやき

いくよー、レモンちゃん（ポニーを呼ぶ）、わぁ、歩いてるよぉ

B男のつぶやき

走りたいなあ、僕がやるよ（引き馬を最初にする人を選ぶとき）、こら、ちゃんと歩けよ（急にポニーが止まって）

C男のつぶやき

それえ（走り出しながら）、次僕がやるんだよ（順番を待つとき）

D子のつぶやき

こっち向かないでね（ポニーが）、嘸まないかなあ、大丈夫かなあ

E子のつぶやき

ほらっ、歩け、行きますよ、ちゃんと歩きなさいね

F男のつぶやき

うわぁ、歩いています、どこで止まるんですか

【馬に乗るのを待つ】

- ・ブラッシングをしたり引き馬をしたりして自分の順番を待つ。しかし、地面に落ちている石等で遊んでしまうときもある。
- ・F男は乗る順番にこだわりがあるらしく、最初に乗ることを希望する。しかし、じゃんけんで決めた結果後のようになってしまうと落ち込んでしまう。
- ・A子も乗ることにに対して積極的。一番は誰にするか決める前に、「はいっ」と手を上げるときがある。
- ・E子は順番にさほどこだわりはないらしく、「後でいい」と言うときもある。
- ・その他の児童については、馬場の柵に座ったり、友達が乗る様子を眺めたり、言われた活動をして待っていることができる。

A子のつぶやき

〇〇ちゃんが乗る（自分が一番に乗ると言う）

B男のつぶやき

早く乗りたいなあ、乗り心地はどう（乗っている人に）

C男のつぶやき

〇〇君、楽しい（乗っている人に）、僕、速歩をいっぱいしたいなあ、僕はもっと速く歩かせていいよ（スタッフに注文）

E子のつぶやき

先に乗っていいよ（順番を友達に譲る）

F男のつぶやき

あぁー、負けてしまった（順番決めて一番になれず）、もう、だめです（ 〃 ）、乗りたいありません（ 〃 ）、一番に乗れていいなあ

【乗馬】

- 全員楽しそうに、明るい笑顔で乗っている。最初は鞍の前部についているハンドルを握るが、慣れるにつれそこから手を離したり、目をつぶって乗る。また、速歩を入れる。
- B男、C男とも普段は非常に活発だが、馬に乗ると言葉が少なくなる時がある。また、そういう時はスタッフの指示が伝わりやすい。
- A子は乗った瞬間に早く歩いて欲しいそぶりを見せ、体を揺する。とてもいい笑顔を見せる。
- F男は乗ると多少緊張する様子を見せるが、不快ではない様子。慣れてくるにつれて言葉が出たり、鼻歌を歌ったりする。
- D子は、スタッフがそばにいたのでスムーズにポニー乗れるが、自分がポニーに対して恐怖心を言葉で伝える。
- E子は、きわめて真面目な表情で馬に乗っている。集中しておりスタッフの指示にすぐ反応する。ただ、少し照れがあるようで、「上手だねえ」とスタッフが言うとかえって姿勢が前傾して体の力を抜いてしまう。
- 速歩を入れると、「きゃー」、「うわぁ」というような叫びが大きくなるがバランスそのものが大きく崩れることはない。
- B男、C男は速歩ではもっとスピードを上げるのを要求してくる。また、お互いを意識しているらしく目をつぶったり、手を離したりするのを相手がすれば、自分も必ずやろうとする。
- A子は速歩になるとさらに叫びを上げる。しかし、顔は笑顔であり楽しんでいる様子。手を離したりするのは好きではないらしく、その姿勢を持続できるバランスはあるがすぐにやめてしまう。
- B男、C男、D子の姿勢とバランス感覚はみんなの中で優れている。特にD子は「怖い」とは言うものの、非常に姿勢が安定しており見ていて不安がない。
- E子は、手を離す姿勢も非常に恥ずかしらしくすぐにその姿勢をやめてしまう。
- F男は乗馬中あれこれ活動するのは好きではない。自分の好きな姿勢をいろいろ試す。また普段はよく話すのだが、言葉がほとんど出なくなるときがある。

A子のつぶやき

きゃー、行くよー、楽しい、落ちるぅー

B男のつぶやき

気持ちいい、うわぁ、揺れるぅ、それっ、もっと走れ（速歩時）、あぁ、落ちちゃうよ（〃）

C男のつぶやき

すごいや、手を離していい、これも出来るよ（手を離す）、速歩にしている

D子のつぶやき

こわい、ゆっくり歩いてね、速歩はしなくていい

E子のつぶやき

はぁー、乗ったよ、よしよし、歩け歩け、行けえ（速歩時）

F男のつぶやき

やっと乗れました、ん〜♪（鼻歌）、速歩はしますか

【えさやり】

- 乗ったポニーやブラシをかけたポニーたちを中心に自分の好きなポニーににんじんをやる。
- 最初のうちは怖がってあげられなかったり、ポニーが口いっぱいになってしまい食べられない状態なのにさらに食べさせようとしていた。徐々に上手にあげられるようになる。
- A子は「きゃー」と叫びながらも上手にあげることができる。また徐々に叫びも減る。
- B男、C男とも上手に食べさせることができる。手に持ったニンジンがなくなるとさらにニンジンをあげたいと要求する。
- D子は当初は食べさせることが出来なかったが、友達やスタッフの姿を見て、徐々にできるようになる。しかし、「こわい」と時々ささやく。
- E子は多少乱暴な言葉遣いになっているときがあるが、仕草そのものはていねいにできる。
- F男はポニーの口の感触に驚きがある。感じたことを言葉にする。

A子のつぶやき

きゃー、うわぁ、くすぐったいよ、レモンちゃん（ポニーを呼ぶ）

B男のつぶやき

でっかい口だなあ、はぁ、終わっちゃった（ニンジンがなくなると）、あっちのポニーにもあげていい

C男のつぶやき

きゃは、くすぐったいよ、うわぁよだれ、もうおわたたよ、給食何かな、もっとやっていい、ニンジンちょうだい

E子のつぶやき

ほらっ食べる、おいしいかい、よだれー、手まで食べんなよ、こらっもっと食べる

F男のつぶやき

あぁよだれがついた、うわぁ、あぁー、なめられてしまいました

【学校へ向かう車内】

- みんな今日の活動で印象的だったことを話し合う。行き車内よりも会話は活発。
- 学校の給食を楽しみにしている様子。
- 次回を楽しみにしているような言葉もでる。

A子のつぶやき

いっぱいニンジンあげたよ、かわいかった

B男のつぶやき

楽しかった、また来月だね

C男のつぶやき

今日の給食は〇〇だよ

E子のつぶやき

チェリーちゃん大きくなってねえ

F男のつぶやき

あぁ、終わってしまいました、次回もがんばります

表6 【全体を通した児童の様子】

名前	活動の様子
A子	当初はスタッフ等の指示が通りにくい場面も見られたが、彼女なりにポニーとの時間を楽しんでいるようである。また、各種作業はあまり大事でないらしく、ポニーそのものに興味がいつてしまい、ポニーのそばでたたずんでいる場面もしばしば見られた。 彼女にとり一番大事なのは乗ることであり、その時間は非常に生き生きとした表情見せ、スタッフの指示にもよく従っていた。自分から、「〇〇したいの」というようにスタッフに語りかけてくる場面も見られた。
B男	すべての作業を積極的に行っており、作業を進行する上で中心となる児童。ポロ取り、引き馬など率先して行い、手順を覚えることも早かった。 しかし、道具を扱う作業の時にはそれで遊んでしまったり、ポニーが嫌がるような行動をして、その反応を試しているかのような場面も見られた。また、思うように作業が出来ないと若干パニック気味になるようなところもあった。乗ることも上手であるが、C男に対してライバル心があるらしく常に相手の少し上の行動をとろうとしていた。
C男	ポニーに関することをよく質問し、その特性を理解しようとしているのが印象的。作業は素早く、一生懸命やるが雑なときもある。また、早く終わらせて先に休んでしまうときもある。 体を動かすことが好きなので、暇を見つけては施設にある芝生の斜面を滑って遊んでいた。 乗るときは集中しており、スタッフの指示に従おうとする姿勢が見て取れ、実際上手に出来ていた。活発な性格からか、速歩が非常に好きであり、そのスピード感を楽しんでいると同時に、更なる速さを求めているようなところもあった。
D子	おとなしい児童であり、すべての作業を慎重に行っている。当初はスタッフに対してほとんど話さなかったが、徐々に自分の気持ちを伝えようと語りかけてくる場面が見られるようになった。 ポニーに対しての恐怖が、特に顔に対してあるようで、そばに寄るのはスタッフがいないと出来なかったり、さわったり乗ったりするときも「こわい」と話すことが多かった。 しかし、乗馬の際の姿勢は非常に安定しており、バランスを崩すようなことがなかったので女子の中では最も難度の高い活動が出来ていた。

E子	当初からスタッフとのコミュニケーションを多くとることが可能で、自分の気持ちやポニーに対しての欲求を言葉にしていた。 ポニーの性別に興味があるようで、「これはオス」、「これはメス」と体の違いを目で確認しながらみんなに伝えていた。その延長からか、子馬に対しての思い入れも深いようで車内での話題によくのぼり、また世話もよくしていた。 6人の中では体格が恵まれていたので、しっかりと乗ることが出来ていたが、スタッフの指示に対する「照れ」の気持ちが邪魔をしていた。
F男	感情のバランスがやや激しく、気持ちがのっているときはよく作業をしてくれるが、そうでないときはほとんどできなくなってしまう。 ポニーを好きなようで、やさしい口調で語りかける場面がよく見られ、乗っているときも落ち着いた表情を見せることが多かった。ただ乗る順番には強いこだわりがあるらしく、 自分の世界があるようで、鼻歌を歌って気持ちよさそうにしているときがある一方、乗っているときは何かに集中しているかのように、何も声を発しなくなる場面がしばしば見られた。

(5) 工夫したこと

【乗馬の指導】

事業を数年度にわたって実施することが予想されたことから、乗馬指導の目標は、「一人で乗ることが出来る」ということに設定し、長期的展望で指導にあたった。

引き馬による乗馬に始まり、手を離して乗ること、目をつぶって乗ること、馬の上で体操をすることを反復して練習し、バランス感覚を養うことを最初に行った。これを2年間にわたり継続して行った結果、馬への恐怖心よりも、乗馬することの楽しさ、自信の気持ちの方が勝ってきた様子が見られるようになったので、調馬索による乗馬でスタッフによる手助けと児童の距離を徐々に遠ざけ、平成13年度の後半の事業では全員が一人で乗馬し、速歩発進まで出来るようになった。

【ポニーの使い分け】

1回の事業について2頭のポニーに乗り、それぞれのポニーでの活動目的を分けた。1頭は比較的小さなサイズのポニーとし、児童がしたいと思う乗り方をさせるようにし、スタッフからの働きかけは抑えるようにした。もう1頭は最も体高のあるメロンを使用し、スタッフからの乗馬的指導を中心に行う時間とした。

【D子への指導】

事業当初からポニーに対して「こわい」と発言すること

が多く、ブラッシング、引き馬等、直接ポニーと関わる活動に対しては消極的な姿勢が見られた。

そのため、彼女がポニーと関わる時にはそばにスタッフか先生がいるよう努め、そのちいさなささやきをひろえるよう心がけた。スタッフがいれば、「こわい」発言も減り、活動も上手に出来たので、乗ることの上達も早かった。

しかし、年度が終了し、新年度の事業が始まるといったように、数ヶ月にわたりポニーと接しない期間があると再び「こわい」と言うように気持ちが逆戻りしてしまうため、その際はゆっくりと今までに出来たことを繰り返し指導し、その恐怖心をほぐす事に努めた。

写真 11 【成長したチェリー】



施設に遊びに来た園児ににんじんをもらう

【子馬の誕生】

事業開始年の平成11年7月31日、飼育していたアプリコットが子馬を産んだことは、この事業を進めることで非常にプラスに作用した。

児童たちは子馬の成長を楽しみにしており、毎回少しずつたくましくなっていくチェリーの姿をよく観察していた。男子の児童にとってはよい遊び相手であり丸馬場の中で一緒に走り回り、女子にとってはより「かわいいがる」という行為をしやすい存在になっていた。

産まれてまもなくから、子どもたちに容赦なくさわられることでチェリーにとっても子どもと関わるポニーとして資質が向上したように感じた。

(6) スタッフが感じたこと

馬に対する「こわい」という気持ちに個人差はあったものの、参加した児童たちは全員ポニーと過ごす時間の快さを感じつつ、自分がしたいこと、自分の今の気持ちを表現していたようである。それは、スタッフに気軽に声をかけ、自分が活動する様子を見せようとアピールしたり、移動の車や休憩時間の会話で生き生きと話をしている様子から見

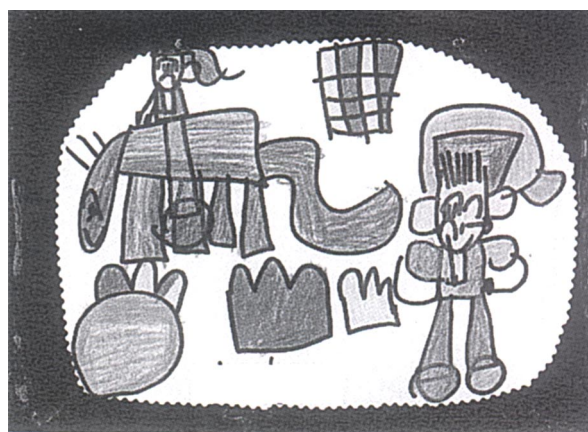
絵 2 【A子の描いた絵】

こわいのせんせい



平成 12 年 12 月作成

大きく自分とスタッフが書かれている

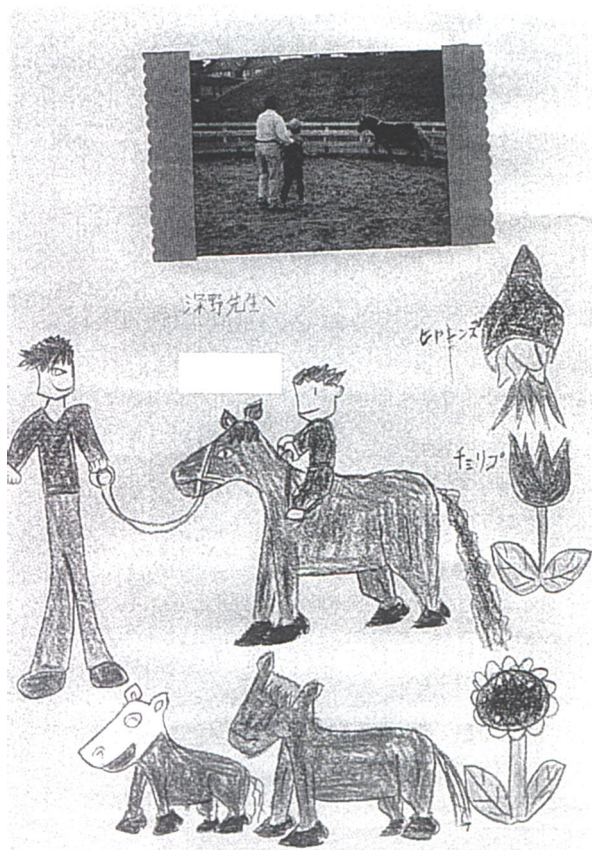


平成 13 年 12 月作成

場所の様子が加わり、描きたいものの線がはっきりしたて取れた。

また、毎年度の最終活動の時間に児童たちからメッセージと絵のプレゼントをもらうのだが、その絵で描写された活動の様子から、1年を経た児童の表現力が確実に増していることを感じた。

絵3 【B男の描いた絵】



平成12年12月作成

ポニーに乗った自分とそれを引くスタッフ、
周りのポニーが書かれている



平成13年12月作成

手を離して乗る自分が描かれている。ポニーの脚部の
表現が豊かになっている

(7) 今後の課題

3年間の実践を通じ、(1)当初しり込みする様子が見られた子どもたちが、徐々にしかし確実に積極的かつ意欲的にポニーのいる場所にやってくるようになり、作業や乗馬に積極的に取り組んだり子どもが自ら活動を工夫していく変化が見られた、(2)話し言葉だけではなく作文や絵画などにおいても、表現を引き出し育てる大きな素材(活動)となった、(3)ポニーが媒介となってスタッフとの関係が強く形成されていった様子が絵からわかる、(4)子どもたちにとってポニーに乗ることは作業を含む全体の活動の一部として捉えられている、などのことが言える。ただ、ポニーとの触れ合いを通じてこれら培われたことをどのような方法で評価するか、また継続的な展開をどのように工夫したらよいかについては今後の課題である。

最大6名と小集団での活動ではあったが、児童の実態が幅広かったために、全員で同じ作業をするという活動形態が最善であったかは疑問が残る。今後はもう少し個別的な働きかけも考えなければならない。しかし、在籍児童のうち4人が3月で卒業してしまい、来年度に残るのは1人だけになってしまうことから、現在の白鳥東小学校だけによる実施の形も見直さなければならない。複数校の同時実施を含め、次年度に向けた方針づくりが求められている。

また、卒業し大洋中学校に進学していく児童が多いことから、何らかの形で特殊学級の体験事業を継続して実施できるように、各校との連携を図っていくことも重要である。

第 IV 部

教育にとっての動物の存在の意味

滝 坂 信 一

盲・聾・養護学校における動物とのふれあいに関する調査
—全国調査の結果にみる実態と展望—

滝 坂 信 一
笹 本 健
當 島 茂 登
徳 永 亜希雄

教育にとっての動物の存在の意味

滝坂 信一

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

もともと我が国の幼稚園や保育園、小学校にはウサギ、チャボ、アヒルなどの動物が普通に飼育されていたし、子どもたちが家畜をはじめ動物に触れる環境は日常生活の中にくらでもあった。しかし、動物と触れ合うことの意義や重要性が言われながら、子どもの暮らしとこれら動物との距離はますます広がっているように見える。まして学校という場に動物との日常的なふれあいが位置づけられるということは、決して容易なことではなくなってきている。以下では、学校教育における動物飼育や動物とのふれあいの意味と絡ませながら、「教育における動物」についての今日的意義を考えてみる。

1. 学校における動物飼育

岡山市立開成小学校のインターネットホームページ(以下、HP)を見ると、同校には「開成小ふれあい動物ランド」があり、<金ケイ、チャボ、七面鳥、クジャク、ウサギ、マガモ、ヤギ、ウコッケイ、ガチョウ、ホロホロチョウ>が飼育されていると紹介されている。まず驚くのは、その動物種の多さである。飼育の目的は、

- ① 命の尊厳さ、神秘さに気付いて命を大切にすることを養う。
- ② 肌で動物に触れて、温かさを感じることによって、互いの連帯感、人類愛、生物への親しみを感じる。
- ③ 世話をすることにより、勤労意欲や労働の大切さを知る。

だという。中央教育審議会答申「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機―」(1998)は、「子どもたちが身に付けるべき「生きる力」の核となる豊かな人間性とは、

- i) 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- ii) 正義感や公正さを重んじる心
- iii) 生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- iv) 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- v) 自立心、自己抑制力、責任感
- vi) 他者との共生や異質なものへの寛容

などの感性や心である」と述べている。

開成小学校の動物飼育に関する3つのねらいはこの内容

に対応しており、現在動物飼育を行っている多くの小学校で考えられているねらいと共通していると想像できる。この取組みは、「学校は、子どもたちに何をどのような形で提供する場としてあるのか」について行われている一つの問題提起である。そして、この実践は学校が「知識偏重」の教育を見直す必要に迫られているということと、これら i)~vi)に挙げられた内容を育む環境が家庭や地域社会において脆弱になってしまったために学校が意図的に引き受けざるを得なくなっているということ、そしてその一環として動物飼育が導入されているということの意味している。しかし、学校五日制と新学習指導要領実施を機に話題となっている「基礎学力」重視とこういった取組みとの間をどのように調整し社会的な認知を得ていくかについては、今後大きな障壁が立ちあがる可能性がある。

2. 他の生命存在とともに暮らす

戦後社会は、機能的な側面や効率を重視して<生産―流通―消費>というシステムを整備し、消費者には口に入る食物の元の姿は見えなくなった。魚は切り身でしかなく、肉は部分にさばかれてパック詰めされ、私たちが食として他の生命を取り込むことによって自らの生命を得ていることを実感する機会はほとんどなくなってしまった。言い換えれば、生命と食が分離し、生命は観念的なものになってしまった。また、核家族化や少子化の進行によって、兄弟姉妹の誕生や親族の死の場面に遭遇することも少なくなった。子どもたちは「愛される」、「世話をされる」という経験はあっても、育ちの中で自分自身が他の存在を「愛する」、「世話をする」という経験をもつことが非常に難しくなっている。また、相手を変える(変えさせる)のではなく、こちらがあり方を変える(調整する)ことによって、相手とのよい関係を作るという体験が難しくなっている。すなわち、地域社会において子どもの精神生活を育む人的なまた環境的な条件自体が解体してしまった。

さて、飼育されている動物は、自力で生きていくことができない。餌をやることも、飼育舎を掃除することも飼育する側に依存し、飼育する側は継続的な取り組みを必要とする。すなわち、学校で動物を飼育することを考えれば、それは教職員と子どもたちに<「不自由」=思うようにならない>体験を強いる。動物の飼育は、相手である動物に飼育する側が合わせていく、言わば「添っていく」行為に

他ならない。保護され依存を基盤に生活しており、自らが依存される体験をもつことが非常に難しくなっている現在の子どもたちにとってこの経験は非常に大きな意味を包含している。

3. 細分化された学習から「総合的な活動」からの学習へ

「子供に[生きる力]と[ゆとり]を」とした中央教育審議会(第一次答申、1996)は、これからの学校が目指す教育として、「[生きる力]の育成を基本とし、知識を一方的に教え込むことになりがちであった教育から、子供たちが、自ら学び、自ら考える教育への転換を目指す。そして、知・徳・体のバランスのとれた教育を展開し、豊かな人間性とたくましい体をはぐくんでいく」とし、「[生きる力]が全人的な力であるということ踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手だてを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる」として、<横断的・総合的な学習>を推進する必要があるとした。

以下に、動物の飼育を通して行われた教育実践例を挙げる。

(1) 開成小学校のアイガモ農法

平成12年度、5年生の子どもたちがアイガモ農法に取り組んでいる。発端は、社会科の学習のなかで「自分たちの手でのお米作りがしたい」という声が起こり、話し合った結果「福祉に役立つお米にしよう」と意見がまとまったことだという。さらに、安全なすなわち無農薬の米にしようということになり、子どもたちはアイガモ農法に挑戦することになる。話し合いから、

- 田んぼを借りる
- 苗を手に入れる
- 電気柵を取り付ける
- ひなを取り寄せる
- 卵を取り寄せる
- とり小屋を造る

といった計画が出され、地域の方から田を借り、アイガモの卵からひなをかえすところから活動が始まる。春、子どもたちは田植えをし、孵卵器を借りてきて卵から7羽のひなをかえす。さらに21羽のひなを取り寄せ、外敵からひなを守りさらにひなが逃げ出さないように電気柵を取り付け、大きなとり小屋を造る。夏休みには、世話当番を決めて毎日餌やりをしている。名前までつけられたアイガモ達の「仕事」によって、子どもたちは秋に240kgの米を収穫することになる。その米は「うまい安全カモバンザイ」と名づけられて1kgずつ袋詰めされ、家から持ち寄った不要

品の販売も含めた「5年生のアイちゃん市場」フリーマーケットを開いてかなりの収益をあげる。また、米は地域のお年寄りや施設のお年寄りに配ったり、保護者やお世話になった人を招いての「おにぎりパーティー」を開いている。この子どもたちは、平成13年度にも引き続きアイガモ農法に取り組んでいる。

(2) 長野県伊那小学校の飼育活動

伊那市立伊那小学校では、総合学習や総合活動の場所としてつくられた「ともがき広場」にヤギやヒツジを飼育している。平成10年度には2年生が24kgで借り受けた牝豚の、発情を経て出産準備に至るまでの飼育に取り組んでいる。そこには、季節に合わせた飼育場所の工夫から健康管理、これらを行うのに必要となった体重測定や飼育の資金集めなどに伴う計算や豚の提供者であり飼育の相談相手である畜産家とのやり取りに必要な手紙書き、また「ブタさんの歌づくり」や絵画など様々な学習過程生れ展開されている。

また、特殊学級の子どもたちの取り組んだポニーの飼育は、一人の子が「ともがき広場」でヒツジに乗ろうとしてかなわなかったことがきっかけになっている。餌や水をやり、ブラッシングをし、馬糞を片付け、乗るなかで、ポニーへの愛着が表現や観察する力を育て文字や数量、時間の学習を動機づけていく。いずれも、子どもたちが地域の人々に働きかけ、提供や貸与を受けた動物たちである。

また、平成13年度には、2年生が「羊さんと気持ち良く生活できるようにしよう」をテーマに3匹の羊「太陽」「ゆうき」「孝ちゃん」と名づけた夏休み明けから飼育し始めている。子どもたちは、このなかで、なかなか思うように散歩してくれない羊たちにどうしたらいいのか頭を悩ませ、工夫していくことになる。

これら二つの実践を辿って気づくことは、子どもたちが出会った動物に強く引かれていくという事実であり、そこから生れた子どもたちの発想と意欲が重視され活動の出発点となっていることである。活動が始まり、次々と子どもに課題を投げかけていくのは動物の存在と触れ合いそのものであり、課題に気づくのは子どもたち自身である。教師におおよその見通しはあっても、その都度に生じる個々の課題は予め予測できず、答えも予め準備されていない。子どもたちはアイガモを、豚を、ポニーを見つめ、育てたい、触れ合いたいという意欲に導かれながら様々な学習機会を得ていくことになっている。この学習形態は決して教科書では実現しない。

4. 養護学校での実践

長野県木曾養護学校の高等部1年生は、6月に行われる7日間の作業実習を在来種木曾馬を保存する牧場「木曾馬の里」で行っている。学年最初の作業実習を牧場で行うのは、

1. 仔馬が生まれている
2. 夏毛に変わっており美しい
3. 気温が暑すぎない(梅雨にもなっていない)
4. 適度な人数の一般客がくる
5. 乗馬の活動で、外乗ができる

といった環境の中で、子どもたちが作業に意欲的に取り組み、作業をすることの意味を実感するためだという。この学校は、牧場の協力を得ながら行ってきた生徒の馬との様々な触れ合い場面の様子からこの活動を開始している。平成14年度には、「生徒の興味関心と作業遂行力に応じて作業内容に多様性を持たせる」ことを工夫し、次のような活動を組んでいる。

活動の手順：

- ① 個々のルートで牧場へ(9時半)
- ② 厩舎清掃(馬房、通路)
- ③ 第1グループ：昼食づくり*
第2グループ：馬房へおが粉敷き、給餌・水、放牧馬への給餌。
- ④ 乗馬、引き馬、馬の手入れ、放牧
- ⑤ 昼食(職員を含む)
- ⑥ 乗馬
- ⑦ スクールバスにて学校へ移動(14時半)
* 1回目：具だくさん焼きそば
2回目：カレーライス
3回目：五平餅、キュウリ、ナスの浅漬け、味噌汁
4、5回目：味噌汁(お弁当持参)
6回目：おにぎり、味噌汁

障害のある子どもたちは、多くの場合保護者からばかりでなく多くの人々からの強い庇護の下に育っている。他方、自閉症や重度障害のある子どものように、話し言葉がないなど他者にわかるコミュニケーション手段を持たなかったり、行動の意味を理解してもらえない場合、大きなストレスをかかえて日常生活を送っていることが多い。しかし、これらの子どもたちが心を寄せて動物たちに近づいていくと、私たちの社会に流通している言葉や行動の様式、態度とは全く異なるかたちで彼らはそれに応えていく。しかもそれが馬や牛といった大型動物であった場合、子どもたちを心理的に受入れ癒す力を持っている。例えば馬の背に乗る(馬が自分の背に乗せる)ということは、自分の身体と心を馬に預け、馬は相手を受け止めることを意味している。そして、このような動物たちを世話することは、庇護され

る存在から相手を保護する存在への転換をあるいはそういった相互的な関係を体験することになる。

5. 農業高校の新しい展開

「学校が家庭や地域社会にとって垣根の低い、開かれたものとなることは、学校の教育活動をより多彩で活発なものにするとともに、家庭や地域の人々の学校に対する理解をより深めることに大いに資するものと考え。」(「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」中央教育審議会 第一次答申、1996)として、今、学校は「地域に開かれる」ことを通じて再生を図ろうとしている。

農業高校の教育のなかにも大きな変化が見られる。これまでの農業高校の主な内容であった農業従事者及び農業生産物加工技術者の育成に加えて、愛玩動物飼育やアニマルセラピーに関するコースや科目が置かれるようになってきた。さらに、農業高校が持つ農場を地域の社会資源として開放し、飼育している家畜を媒介とした活動自体を教育活動に位置づける実践が見られる。以下幾つかの例を挙げる。

(1) 島根県立出雲農林高等学校

小動物・愛玩動物飼育による動物セラピー・繁殖生理・動物バイオ等について、最新の基礎的な知識・技術を学ぶ<動物工学コース>がある。

平日は「動物ふれあい広場」として幼稚園や保育所、小学校に開放し、土・日曜日は地域の人々に開放している。HPには小学生向けのページ「動物ふれあい広場 わいわいどうぶつらんど」があり、動物を紹介している。飼育動物は、ラマ、牛(ホルスタイン)、ヒツジ、ヤギ、ウサギ(チンチラ)、ウサギ、サル(アカテタマリン)、ブタ(ミニブタ)、プレーリードッグ、マーラ、ロップイヤー、ワラビー、ウサギ(アンゴラ)、サル(リスザル)、コンゴウインコ、ガン、ペリカン、オシドリ、フランスガモ、モリフクロウ、アイガモ、コウライキジ、ニワトリ(クロガシワ)、クジャクと、多岐にわたる。

(2) 茨城県立水戸農業高等学校

牛、豚、鶏、馬、犬、ウサギ、マウス等が飼育されており、「スクールパーク」として地域の幼稚園、小中学校に開放し、畜産科の生徒が「総合実習」の時間に対応している。年間2~3000人が訪れる。科目に「ペット」が用意されている。

(3) 岐阜県立大垣農業高校

平成7年度に設置された<動物科学科>は、牛や豚、ニワトリなどの家畜類の飼育・管理といった学習内容に加え、アライグマ・グリーンイグアナ・木曾馬・小鳥・熱帯魚な

どのペットと呼ばれる伴侶動物、ラット・マウス・モルモットなどの実験動物、そして地域の野生動物についての基礎知識・管理や実験など幅広い内容を扱う。

学校は地域との交流を積極的に行っており、春には近隣の幼稚園・保育園・小学校が遠足の見学場所として学校を訪れ、動物科学科のたくさんの動物と触れ合いイチゴ狩りをしたりして本校の生徒たちと過ごす。

(4) 岡山県立高松農業高等学校

畜産科学科が地域との交流として幼稚園の子どもたちの学校訪問を受け入れており、動物と触れ合う機会を提供している。また、ふれあい動物園の実施している。

この他、学校を開放するなかで教育活動が行われるだけでなく「移動動物園」として、幼稚園や保育園、小学校に出かけていくなどの学校も出てきている。

これら農業高校の取組みは、「生徒自身が日常飼育している愛着対象としての動物を市民に開示し」、「動物を媒介にして生徒と市民が交流し」、「この交流の豊かさによってさらにまたこれらの動物に会いたい（これらの動物を市民に会わせたい）と感じる」という循環をもっている。動物に出会うことそれ自体が目的になる一般のミニ動物園とはこの点で大きく異なる特徴がある。

6. 動物と触れ合う形態

学校の教育活動に関連して子どもたちが動物と触れる機会の工夫は次の3つの場合がある。そして、それぞれによって少しずつ活動や体験の内容も比重が異なることになる。

(1) 学校内で動物を飼育する

この形態は、動物が学校を住みかにするということの意味している。子どもたちは飼育される動物の生命を丸抱えすることになり、「食から排泄」、「生から死」にいたるあらゆる場面に立ち会う。併せて飼育することに伴う「不自由」を体験することになる。

(2) 学校に動物がやってくる

この形態は動物が「来訪者」になることであり、移動動物園がその典型的な例である。また、学校によっては数ヶ月あるいは数年動物の貸与を受け、ともに過ごす場合がある。前者の場合、安全性が確保され、抱いたり撫でたりして触れるという活動が中心に行われる。後者では、動物の1日の姿を見ることができ、子どもたちは日常の世話を通じて動物の健康に責任を感じることになる。

(3) 動物と触れ合うために校外に出かける

動物園、牧場、近隣の畜産農家を訪問するという場合が典型例と言えよう。この形態は子どもたちが「来訪者」になることを意味しており、飼育の専門家がいる場で動物のくらしに触れることになる。

7. 教育における動物と課題

(1) 大型動物の活用

全国の小学校3000校へ調査によると、ウサギ56%、ニワトリ39%、サカナ36%、チャボ32%、セキセイインコ21%、アヒル6%となっており、小動物が多く飼育されていることがわかる。(財団法人中央教育研究所「生活科の学習環境等に関する調査研究第三次報告」、3000校送付、1148校回収、1993) その主な理由は飼いやすさ、すなわち管理のしやすさにある。しかし、子どもたちが身体全体を動員し、また、力を合わせてかかわっていくことを考えた時に、もっと大型家畜の導入が検討されてよい。これら大型家畜の中には、馬のように子どもたちが自らの心と身体を預けることが可能な動物もいる。また、日常的な触れ合いの体験を通じて私たちの衣や食の生活を考えることになる豚や牛、ヒツジといった家畜もいる。

(2) 中学生・高校生への取り組み

社団法人日本理科教育振興協会の調査(1999)によれば、「課題研究や野外観察など多様な学習活動を通して、個性や能力を伸ばさせること」を目指して中学校に設けられている「選択理科」において<飼育・栽培>を行っているのはわずか2.7%であり、その内容は「植物栽培。動物飼育(ドジョウの飼育、観察など)」となっていて、哺乳類飼育はほとんど行われていない。しかし、自己や他者、社会的価値との葛藤ななかで自己形成をすすめる青年期にある子どもたちが、ことばを媒介とせず大型家畜を世話し働きかけることを通じてもつ心的交流の体験の意義は大きい。

(3) 生命の尊厳と保護(愛護)

飼育動物のなかで、家畜に属する動物は、もともと使役のために人間に飼われる動物である。使役の内容は、次のように分類できる。

- ① 動力：荷役、農作業
- ② 労力：盲導、警護、セラピー
- ③ 肉体の提供：食、毛皮
- ④ 存在の提供：ペット

いずれにせよ彼らは生命存在を人間に提供している。そしていずれの場合でも、彼らは私たち人間にその生命を依存しており共に在ることによって伴侶性が生ずる。そのような存在が不当に扱われることは決してあるべきではない。

この意味で、教育の場において動物飼育が行われる時、その動物たちが教職員と子どもたちにとって学校生活における「パートナー」という認識が基盤となる必要がある。

(4) 感染症や衛生面の課題

飼育動物から人間への感染症に関する社会的な意識が高まり、これに伴って教育の場から動物を遠ざける力が他方で働いている。関係者が衛生面の管理方法や感染症に関する知識をもち、適切な管理がなされることは、この領域を広げ充実させていくために欠くことができない。また、このことについて子ども自身が正しい知識と管理方法を知っていくことは、子どもたちが動物と接していくなかの必然として位置づけられる必要がある。

(5) 関係者の支援

本稿の事例で行われているように、学校近隣にある畜産農家や動物飼育に詳しい地域の人々との交流や協力を得るなかでこの活動が始められ、工夫されていくことが重要である。このような活動は、「開かれた学校づくり」の実質的なものと言える。なお、文部科学省がインターネット上に設けた『総合的な学習の時間』応援団のページには、「動物飼育について」「動物愛護について（動物飼育の指導助言）」「動物福祉について（資料提供、指導助言）」対応してくれる団体として、(社)日本獣医師会、(社)日本動物福祉協会、(財)日本動物愛護協会、(社)日本動物保護管理協会、(社)日本愛玩動物協会が挙げられている。

さいごに

本稿では、学校教育というなかで動物との触れ合い、特に飼育活動がどのように捉えられ教育活動のなかに活かされているのかを中心に事例をもとに検討した。その結果、単に「飼う」のではなく、教育素材の柱として位置づけ活動を展開している例のあることがわかった。こういった取り組みは、特殊学級や養護学校にも見られた。

さて、現代社会は、<機能>という観点に大きな価値においてシステムの開発・整備を進めてきた結果、私たちの心に荒廃をもたらすことになってしまった。学校もその例外ではなかった。それは、「わからない」(言語によって説明することが難しい、あるいは見通しが確定できない)存在(要因)を社会・学校から排除していった結果である。私たちは今、ようやくその問題の重大さに気づきつつある。

中央教育審議会答申をはじめ子どもの育ちや教育に関する議論が「心」の問題に言及する背景がそこにはある。

そのようななかで飼育される動物たちは私たちに、実は私たち自身がこの社会の在り方を見直すなかで人間性の復活を実現していかなければならない方向性を示唆し、「飼育される」ということを通じてその機会を私たちに提供している。

【引用・参考文献】

- 1) 伊那市立伊那小学校：研究紀要「うちから育つ」平成10年度、1999
- 2) 茨城県立水戸農業高等学校：
<http://www.suino.ed.jp/>
- 3) 岡山市立開成小学校：
<http://academic1.plala.or.jp/kaisei/index.htm>
- 4) 岡山県立高松農業高等学校：
<http://www.takano.ed.pref.okayama.jp/>
- 5) かいせい：岡山市立開成幼稚園・小学校、1999-2000
- 6) 片岡美春：岡山市立開成小学校第5学年総合学習指導案、1999
- 7) 岐阜県立大垣農業高校：
<http://www2.famille.ne.jp/~dainou/jindex.html>
- 8) 財団法人中央教育研究所：「生活科の学習環境等に関する調査研究第三次報告」、1993
- 9) 島根県立出雲農林高等学校：
<http://izuno.shimanet.ed.jp/>
- 10) 社団法人日本理科教育振興協会：理科教育教材の活用等に関する総合的実践研究、1999
- 11) 中央教育審議会：第一次答申、1996
- 12) 長野県木曾養護学校：公開研究発表会「木曾馬とのかかわりを活かした学習の実践から」、平成14年6月、2002
- 13) 鳩外太郎：初等中等教育における生命尊重の心を育む実験観察や飼育の在り方に関する調査研究、平成11～12年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、2001
- 14) 三澤美智代：伊那小学校の動物飼育について（私信）、2002

* 本稿は出版社の承諾を得て「滝坂信一：教育にとっての家畜の活用、農業技術体系畜産編追録第21号 p.11-19、社団法人農村漁村文化協会、2002」に加筆・修正したものである。

盲・聾・養護学校の教育活動における動物とのふれあい

— 全国調査の結果にみる実態と展望 —

滝坂信一・笹本 健・當島茂登・徳永亜希雄

(肢体不自由教育研究部)

はじめに

小中学校の教育において体験型の学習が重視され、その一環として動物との触れ合いを教育活動の中に積極的に位置づける学校が出てきている。文部科学省も、「総合的な学習の時間」をサポートする機関情報を提供するインターネットのなかで、動物愛護協会や日本獣医師会をリストに挙げて紹介している。

このようななかであって、障害のある子どもの学校教育においても、動物とふれあう様々な機会が工夫されていることが予測される。しかし、これらに関する全国的な調査は行われておらず、実態は明らかではない。もし行われているとすれば、それはどのような形態で行われているのだろうか、また、どのような位置づけで行われているのか。

また、近年「馬」という大型動物の障害のある子どもの教育への活用新聞や雑誌、テレビなどでも取り上げられるようになった。この領域は、西洋諸国においてはプール指導や音楽療法と並んで障害のある子どもの教育のなかで行われている。では、この内容に関する我が国の盲・聾・養護学校における認知度や取組みはどのような実態にあるのだろうか。

I. 目 的

盲・聾・養護学校の教育において動物との触れ合いはどのように行われているのかその実態と課題を探り、今後の展望に資する。また、「馬」との触れ合いや「馬」を用いた教育活動がどのように行われているかについて実態を探り、今後の展開についての指針を得る。

II. 方 法

1. 調査対象

独立行政法人国立特殊教育総合研究所が保有する特殊教育諸学校データベース(平成13年度版)をもとに、2001年4月現在設置されている全盲・聾・養護学校を対象にアンケートによる悉皆調査。学校種内訳は、盲学校71校、聾学校107校、知的障害養護学校529校、肢体不自由養護学校193校、病弱養護学校95校、計995校である。

2. 調査実施期間

2001年12月～2002年2月

3. 調査内容

①教育活動のなかで子どもたちが実際の動物に触れる機会を設けているか、②(設けている場合)それはどのような形態で行っているか、③馬を用いた指導についての知識と学校における取組みの3つの内容についてアンケート調査票の記入を求めた。なお、本調査において対象とした動物は、鳥類及び哺乳類であり、魚類や爬虫類及び昆虫等は含まれていない。

III. 結 果

1. 回収率

盲学校	93.0% (66校)
聾学校	83.2% (89校)
知的障害養護学校	74.5% (394校)
肢体不自由養護学校	76.2% (147校)
病弱養護学校	91.6% (87校)
計	78.7% (783校)

なお、知・肢併置校については、回答にあった学校種で分類した。

2. 調査項目ごとの結果

以下では、調査項目ごとに盲・聾・養護学校全体、及び各学校種に別に分けて結果を述べる。

(1) 動物と触れ合う機会

回答のあった盲・聾・養護学校全体の約61%が、何らかの形で動物と触れ合う機会を子どもたちに提供していることがわかる(表1、図1)。なかでも盲学校、聾学校は約76%の学校が動物と触れ合う機会を持っている。養護学校では、肢体不自由養護学校が約65%となっていて最も比率が高く、知的障害養護学校は約59%である。病弱養護学校は約39%に留まっている。

「動物に触れる機会」を設けていないと答えたうち、これまでそのような機会を設けたことがないと答えた学校は、全体で203校(25.9%)となっており、現在機会を設けていない学校の69.0%が、従来から実施していなかつ

表1 動物に触れる機会

	件数 (%)	設けている	設けていない	無答
盲学校	66 (100)	50 (75.8)	16 (24.2)	0 (-)
聾学校	89 (100)	68 (76.4)	20 (22.5)	1 (1.1)
知的障害養護学校	394 (100)	234 (59.4)	158 (40.1)	2 (0.5)
肢体不自由養護学校	147 (100)	96 (65.3)	49 (33.3)	2 (1.4)
病弱養護学校	87 (100)	34 (39.1)	51 (58.6)	2 (2.3)
合計	783 (100)	482 (61.6)	294 (37.5)	7 (0.9)

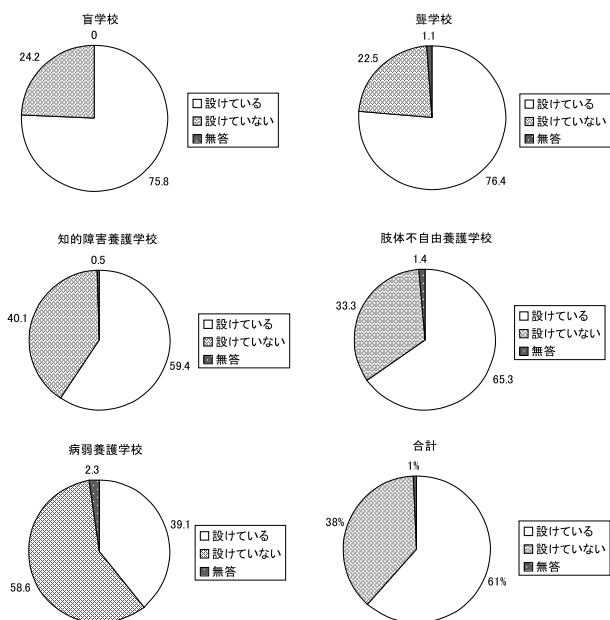


図1 動物に触れる機会

たことがわかる(表2)。

学校種別でみると病弱養護学校が最も多く、55.2%がそのような機会を設けていないと回答している。他の学校種では、肢体不自由養護学校27.9%、知的障害養護学校24.1%が20%代で続き、盲学校13.6%、聾学校11.2%となっている。

現在動物との触れ合いを行っていない学校の過去の実績の割合をみると、盲学校、聾学校、知的障害養護学校ではこれまでも実施していない割合が50~60%であるのに対し、病弱養護学校(94.1%)、肢体不自由養護学校(83.7%)では、現在実施していない学校のほとんどが、従来から動物と触れ合う機会を設けてこなかったことがわかる。言い換えれば、盲学校、聾学校、知的障害養護学校は、かつて行っていたが、何らかの理由によって動物と触れ合う機会を設けることを取りやめているところが多い。

次に、現在「動物に触れる機会」を設けていない学校の今後の計画を見ると、盲学校、聾学校を除くと、高率で今後そのような機会を設ける計画がないことがわかる。ただ、「ない」と回答したなかに数件だが、調査票の余白に「児童・生徒に興味や関心があるなどニーズがわかった場合には積極的に取り組みたい」、「総合的な学習の時間で取り上げる

表2 動物と触れ合う機会を設けたことがない

	現在設けていない -A-(%)	設けたことがない -B-	B/A (%)
盲学校	16	9 (13.6)	56.3
聾学校	20	10 (11.2)	50.0
知的障害養護学校	158	95 (24.1)	60.1
肢体不自由養護学校	49	41 (27.9)	83.7
病弱養護学校	51	48 (55.2)	94.1
合計	294	203 (25.9)	69.0

表3 動物に触れる機会に関する今後の計画

	現在行っていない -A-	今後の計画がある(/ A%) ない(/ B%)	
盲学校	16 (24.2)	5 (31.3)	11 (68.7)
聾学校	20 (22.5)	5 (25.0)	13 (65.0)
知的障害養護学校	158 (40.1)	11 (7.0)	142 (89.9)
肢体不自由養護学校	49 (33.3)	2 (4.0)	47 (96.0)
病弱養護学校	51 (58.6)	3 (5.9)	48 (94.1)
合計	294 (37.5)	26 (8.8)	261 (88.8)

可能性があるが具体的な計画はない」などの記述が見られた。

(2) 動物と触れ合う機会を設けていない理由

210校から272件の「動物と触れ合う機会を設けていない理由」の記述があった(表4)。

最も多かった「子どもの実態から」に分類したのは、「子どものアレルギー(喘息)の恐れから(病弱養護学校からの53件を含む)」の他「障害の状態から(14件)」が主なものである。次に多い「飼育管理上の問題」に分類したなかには「長期休暇中の世話」の他に、寒冷地である、住宅地である、3年前までヤギを飼っていたがエサとなる草をとりに行く際毒蛇の咬傷被害にあうおそれがあるため子どもたち自身による飼育が難しくなった、などの「周辺環境からの困難」(5件)が含まれている。また、「必要と考えていない」(34件)には高等部や理療科のみ設置しているため(10件)を含んでいる。「その他」(13件)には、要望が出ている、飼育していたことがある、魚類・は虫類を飼育している、などが含まれている。

表4 動物と触れ合う機会を設けていない理由

子どもの実態から	86 (件)
飼育管理上の問題	39
必要と考えていない	34
施設・設備の面から	21
<死>に関すること	14
近隣にそのような場所がない	12
児童数の減少から	4
予算的な面	8
特になし	41
その他	13

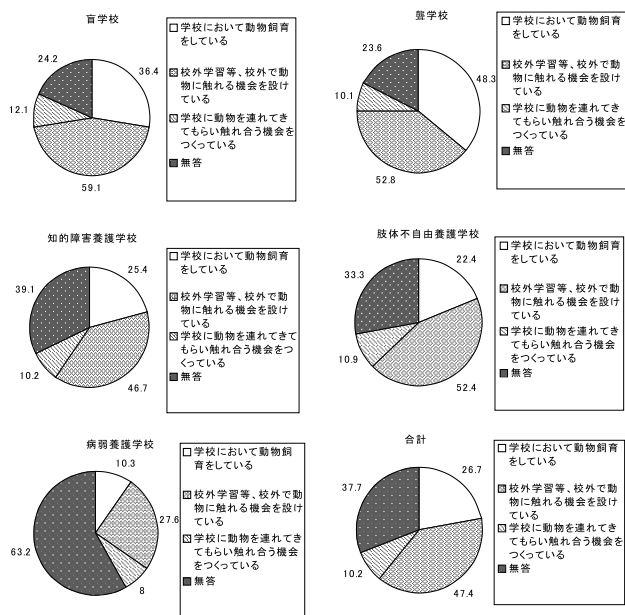


図2 機会を設けている場合

(3) 動物と触れ合う形態

「動物と触れ合う機会を設けている」と答えた学校について、どのような形態で機会を設けているかについて、

- ① 学校において動物飼育をしている
- ② 校外学習等、校外で動物に触れる機会を設けている
- ③ 学校に動物を連れてきてもらい触れ合う機会をつくっている

の3つの選択肢を挙げ、あてはまるものをすべて選んでもらった。その結果は<表5-1>の通りである。

全体では「校外学習等、校外で動物に触れる機会を設けている」と答えている学校が最も多く、触れ合う機会を設けている学校の77.0%となっている。次いで「学校において動物飼育をしている」43.4%、「動物を連れてきてもらい触れ合う機会をつくっている」学校が16.6%となっている。

これを学校全体に占める比率で見ると(表5-2)、「校外学習等、校外で動物に触れる機会を設けている」を学校種で見ると、盲学校が59.1%と特に多く。次いで聾学校(52.8%)、肢体不自由養護学校(52.4%)、知的障害養護学校(46.7%)、病弱養護学校(27.6%)の順になっている。

「学校において動物飼育を行っている」のは、聾学校では回答のあった89校のうち48.3%にあたる43校が学校において動物飼育を行っていて最も多く、次いで、盲学校(36.4%)、知的障害養護学校(25.4%)、肢体不自由養護学校(22.4%)、病弱養護学校(10.3%)となっている。

教育活動のなかで動物と触れ合う機会として「動物を連れてきてもらい触れ合う機会をつくっている」学校はいず

表5-1 動物と触れ合う形態(実施校に占める比率)

	実施校(%)	飼育	訪問	来訪
盲学校	50 (75.8)	24 (48.0)	39 (78.0)	8 (16.0)
聾学校	68 (76.4)	43 (63.2)	47 (69.1)	9 (13.2)
知的障害養護学校	234 (59.4)	100 (42.7)	184 (78.6)	40 (17.1)
肢体不自由養護学校	96 (65.3)	33 (34.4)	77 (80.2)	16 (1.67)
病弱養護学校	34 (39.1)	9 (26.5)	24 (70.6)	7 (20.6)
合計	482 (61.6)	209 (43.4)	371 (77.0)	80 (16.6)

れの学校種も10%内外と少ない結果となった。

これらを、複数選択しているものを含め場合分けしてみると、実数値は以下ようになる。

- ① 「学校において動物飼育をしている」: 92 (校)
- ② 「校外学習等、校外で動物に触れる機会を設けている」: 224
- ③ 「学校に動物を連れてきてもらい、触れ合う機会をつくっている」: 17
- ④ 「学校動物飼育」+「校外で触れる機会」: 92
- ⑤ 「校外で触れる機会」+「学校に動物が来る機会」: 38
- ⑥ 「学校動物飼育」+「学校に動物が来る機会」: 8

表5-2 動物と触れ合う形態(全体に占める比率)

	回答数	実施校	飼育	訪問	来訪	無答
盲学校	66 (100)	50 (75.8)	24 (36.4)	39 (59.1)	8 (12.1)	16 (24.2)
聾学校	89 (100)	68 (76.4)	43 (48.3)	47 (52.8)	9 (10.1)	21 (23.6)
知的障害養護学校	394 (100)	234 (59.4)	100 (25.4)	184 (46.7)	40 (10.2)	154 (39.1)
肢体不自由養護学校	147 (100)	96 (65.3)	33 (22.4)	77 (52.4)	16 (10.9)	49 (33.3)
病弱養護学校	87 (100)	34 (39.1)	9 (10.3)	24 (27.6)	7 (8.0)	55 (63.2)
合計	783 (100)	482 (61.6)	209 (26.7)	371 (47.4)	80 (10.2)	295 (37.7)

⑦「学校動物飼育」+「校外で触れる機会」+「学校に動物が来る機会」：17

3つのすべての形態で動物と触れ合う機会を設けている学校は、482校中17校であった。

(4) 学校飼育に関すること

盲・聾・養護学校で、どのような動物が飼育されているのかについて尋ねた。次いで、学校で動物の飼育を行うに当たっては、教員がどのような形で関わるかが非常に重要な要因となる。この意味から校務分掌に位置づけられているか否かを尋ねた。また、動物の健康管理や児童・生徒の衛生管理面から獣医との連携や協力関係が図られている可能性があることから、この点についても尋ねた。

① 飼育動物の種類

飼育している動物について220校から回答があり、学校種毎に分類すると以下ようになった。

最も多いのは「ウサギ」で74件である。次いで「ニワトリ」(ウコッケイを含む)が55件となっている。これをチャボの12件、クジャク2件及びキジの1件と合わせると70件である。次に多いのがハムスターの35件で、これにモルモット他類似した種(プレイリードッグ、パンダネズミ、砂ネズミ、リス)を合わせると43件である。インコの23件に他の小鳥類を合わせると30件であった。中大型動物としては、山羊が3件、ポニーが1件であった。

表6 飼育動物の種類

ウサギ	74
ニワトリ(ウコッケイ10件含む；1校は両方)	55
チャボ	12
くじゃく	2
キジ	1
ハムスター	35
モルモット	4
プレイリードッグ	1
パンダネズミ	1
砂ネズミ	1
リス	1
インコ(1校は他の小鳥も)	23
小鳥類(カナリヤ)、十姉妹、文鳥)	8
山羊	3
ポニー	1

② 飼育動物の入手先

学校で飼育している動物の入手先を尋ねた。その結果107校から回答が得られたが、「教員の持込み」が最も多く、51校あった。次いで「地域の人からの寄贈」が22校となっている。

表7 飼育動物の入手先

① 動物業者	9(校)
② 教員の持込み	47
③ 生徒の持込み	6
④ 地域の人からの寄贈	20
⑤ その他	18
①+⑤	2
①+②	1
②+⑤	1
②+③	1
④+⑤	1
②+④+⑤	1

③ 動物飼育のねらい

210校から記述が得られた。なお、記述のうち設問に対応していない4件を除き、一つの分に複数の内容が記述されていたものを分離して独立させた全252件を内容ごとに分類した結果、以下ようになった。

表8 動物飼育のねらい

生命尊重	82(件)
情操教育・情緒の安定	62
動物愛護の心と扱い方の育成。	47
自然や生き物に関心を持ち体験を広げる	26
責任感と協力の涵養(係・当番活動を通じて他)	15
教科(理科、生活科)、総合的な学習の時間	10
他の学習の導入・動機づけ	4
主体性、自発性の涵養	4
その他	2

最も多かったのが「生命を尊重する心が育つ」とするもので、次いで「情操を育てる」や「情緒の安定になる」とする内容であった。学校種別にみたとき、盲学校から「触察をして動物を知る」ことに関する体験(1件)と学習(2件)に関する記述が3件あった。

④ 教育課程への位置づけ

教育課程に位置づけているかどうかについて尋ね、75校から回答が得られた。単独の活動のなかに位置づけている学校は44件で、うち27件は「休み時間の触れ合いとして」になっている。「休み時間の触れ合いとして」を除くと、「作業学習」に位置づけているところが最も多く18件、次いで「特別活動」の16件となっている。動物と触れ合う活動を道徳と特別活動を除くすべての活動に位置づけている聾学校が1件あった。

表9 教育課程等への位置づけ

教科	6
総合的な学習の時間	9
自立活動	7
道徳	6
特別活動	16
生活単元	4
作業学習	18
休み時間の触れ合いとして	47
その他	9

⑤ 校務分掌

校務分掌に位置づけられているということは、その活動が学校全体の取組みとして行われていることを意味している。その実態について尋ねた。

表10 飼育の校務分掌

	全体件数	飼育A(%)	設けている B(A/B)
盲学校	66 (100)	24 (36.4)	2 (8.3)
聾学校	89 (100)	43 (48.3)	13 (30.2)
知的障害養護学校	394 (100)	100 (25.4)	29 (29.0)
肢体不自由養護学校	147 (100)	33 (22.4)	7 (21.2)
病弱養護学校	87 (100)	9 (10.3)	1 (11.1)
合計	783 (100)	209 (26.7)	52 (24.9)

動物飼育を行っている学校全体において校務分掌に位置づけ取り組んでいるところは約25%であった。学校種別に見ると、聾学校の30%、知的障害養護学校の29%が比率として高く、次いで肢体不自由養護学校の約21%となっている。

⑥ 獣医との連携

動物の飼育に際しては、動物の疾病や怪我への対応、児童生徒への感染症防止、繁殖の問題などから獣医の助言や支援を受けていることが予想される。そこで、その実態について尋ねた。

表11 獣医との連携

	件数	飼育A(%)	連携有B (A/B)
盲学校	66 (100)	24 (36.4)	1 (4.2)
聾学校	89 (100)	43 (48.3)	5 (11.6)
知的障害養護学校	394 (100)	100 (25.4)	14 (14.0)
肢体不自由養護学校	147 (100)	33 (22.4)	1 (3.0)
病弱養護学校	87 (100)	9 (10.3)	1 (11.1)
合計	783 (100)	209 (26.7)	22 (10.5)

学校で行っている動物飼育に関して獣医との連携を図っているところは知的障害養護学校の14件(14%)と聾学校

の5件(11.6%)を除くと、他の学校種では、各1件であった。

⑦ 動物飼育を行ううえでの課題

学校で動物飼育を行う上で課題になっていることが何かについて尋ね、238件の回答が得られた。回答の47.9%が、「長期休業中の飼育体制」が課題である。いう内容であった。次いで餌、施設、病気時の獣医に要する費用など、「飼育に関わる費用」をどうやって捻出するかに関すること(12.2%)、「動物の病気や繁殖の管理をどうするか」(8.4%)、「衛生の管理・子どもへの感染症予防」(6.7%)となっている。

表12 動物飼育上の課題

長期休業中の飼育体制	114 (校)
飼育に関わる費用(餌、施設、獣医)	29
飼育管理(病気、繁殖)	20
衛生の管理・感染症予防	16
施設・設備	8
校務への位置づけ	8
児童生徒の実態(人数、障害)	7
全体的取組みとしての調整	7
指導法	6
地域特性(苦情等)	5
日常の世話	4
教育課程への位置づけ	1
その他	1
特になし	12

(5) 動物のいる所に行く

「校外に出かけて動物と触れ合う」という活動を実施している場合、訪問先としてどのような場所が選ばれているかについて6つの選択肢を設けて尋ねた。

表13 動物と触れ合うための訪問先

① 動物園	266
② 観光牧場	64
③ 畜産牧場	21
④ 畜産農家	10
⑤ 一般農家	1
⑥ その他	109
①②	14
①③	4
①⑥	4
②③、②⑥、③④、④⑤	各1
①②⑤、①③⑥、②③④、①②③	各1

結果から、「動物園」を訪問先と選んでいる学校が最も多いことが分かる。次いで「その他」が多い結果となって

いるが、この中は「近くの公園」「小学校」「農業高校」「乗馬クラブ」などの記述が見られる。

(6) 動物が学校にやってくる

実施されている動物と触れ合う形態としては「動物が学校にやってくる」というものが最も少ない結果となったが(表・5-1, 2)、この形態を実施していない理由として挙げられていたのは「動物のいる所へ行っている」「経費がかかる」「動物を学校に連れてきてくれるような団体などを知らない(近くに無い)」の3つであった。

(7) 馬を用いた指導

本研究課題である「馬の特性を活用した指導」の盲・聾・養護学校における実施状況について、また、近年新聞やテレビ、雑誌等で取り上げられるようになってきた、「乗馬療法」「乗馬セラピー」「障害者乗馬」といった障害のある人々に対する馬を用いた対応についての認知度について尋ねた

① 馬を用いた指導、乗馬療法等の認知状況

全体でみると、6割近くが何らかの形でこの領域を知っていることがわかった。これを学校種ごとにみると、いず

表 14 馬を用いた指導、乗馬療法等の認知状況

	件数	知っている	知らない	無答
盲学校	66 (100)	35 (53.0)	15 (22.7)	16 (16.0)
聾学校	89 (100)	45 (50.6)	29 (32.6)	15 (19.6)
知的障害養護学校	394 (100)	230 (58.4)	69 (17.5)	95 (24.1)
肢体不自由養護学校	147 (100)	91 (61.9)	22 (15.0)	34 (23.1)
病弱養護学校	87 (100)	50 (57.5)	18 (20.7)	19 (21.8)
合計	783 (100)	451 (57.6)	153 (19.5)	179 (22.9)

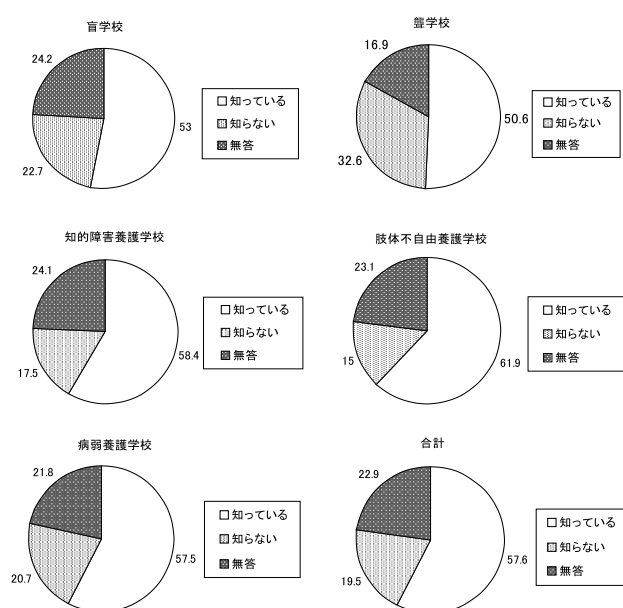


図 3 馬を用いた指導／乗馬療法等の認知状況

れでも5割を越えており、特に肢体不自由養護学校では約62%がこの領域について聞いたことがあるとしている。次いで病弱養護学校の57.5%となっている。

「知っている」と答えたなかで、どこで知ったかについて233件の記述が得られた。1件のなかに複数の記述があったため、内容ごとに分け、以下のように分類した。

表 15 馬を用いた指導、乗馬療法等の情報源

新聞記事を通じて	23 (件)
テレビ番組 (報道、ドキュメンタリー等)	112
実施・実際場面を通じて (うち合衆国1、英国2、ニュージーランド2)	100
障害児教育関連図書・雑誌等	12
研究会・研修会・学会等	8
障害者乗馬紹介ビデオ・パンフレット	9
在籍児童・生徒の保護者	3
勤務校の同僚	3
特殊教育センター所報等広報	3
その他 (映画、インターネット)	4
合計	277 件

結果から、テレビを通じてこの領域に関する情報を得ている場合と、実際に馬を用いた指導や活動を実施するなかで知っている場合とが多いことがわかる。

② 馬を用いた指導、乗馬療法等見た経験

馬を用いた指導、乗馬療法等について聞いたことがあると答えたうち、実際の場面を見たことがあるかどうかについて尋ねた。

表 16 馬を用いた指導、乗馬療法等見た経験

	件数	見たことがある (%)	見たことのない (%)	無答 (%)
盲学校	35 (100)	11 (31.4)	18 (51.4)	6 (17.1)
聾学校	45 (100)	9 (20.0)	25 (55.6)	11 (24.4)
知的障害養護学校	230 (100)	57 (24.8)	112 (48.7)	61 (26.5)
肢体不自由養護学校	91 (100)	21 (23.1)	45 (49.5)	25 (7.5)
病弱養護学校	50 (100)	9 (18.0)	30 (60.0)	11 (22.0)
合計	451 (100)	107 (23.7)	230 (51.0)	114 (25.3)

全体としては、23.7%となっており、聞いたことがあるとするうちの4分の1が見た経験を持っていることがわかる。実数でいうと、107件が見たことがあると答えている。学校種別に見ると、盲学校の31.4%がもっとも高い比率となっている。

③ 馬に乗る機会の提供

馬を用いた指導や乗馬療法等についての知識がなくても、児童・生徒に対し馬と触れ合ったり、馬に乗る機会を提供している可能性がある。そこで、そのような機会を子どもたちに提供したことがあるかどうかを尋ねた。

表 17 馬に乗る機会の提供

	件数	ある	ない	無答
盲 学 校	66 (100)	28 (42.4)	34 (51.5)	4 (6.1)
聾 学 校	89 (100)	22 (24.7)	61 (68.5)	6 (6.7)
知的障害養護学校	394 (100)	118 (29.9)	247 (62.7)	29 (7.4)
肢体不自由養護学校	147 (100)	42 (28.6)	90 (61.2)	15 (10.2)
病弱養護学校	87 (100)	12 (13.8)	67 (77.0)	8 (9.2)
合 計	783 (100)	222 (28.4)	499 (63.7)	62 (7.9)

全体で28.4%の学校が馬と触れ合ったり乗る機会を提供したことがあることがわかった。これは4校に1校を越える学校が馬と触れ合ったり乗る機会を提供したことがあることを意味している。学校種別にみると、盲学校の比率がもっとも高く4割を超える学校が実施している。これに次いで知的障害養護学校が29.9%、肢体不自由養護学校が28.6%、聾学校が24.7%となっている。

馬と触れ合ったり乗る機会の実施頻度については、108件の回答が得られた。実施頻度の高い順に示すと以下のようになる。

表 18 馬との触れ合いの実施頻度

週1時間	1 (件)
月3回	1
1隔週	1
3週間毎日	1
3～11回/年	1
年7～8回	1
年2～3回	8
年1回	87
隔年1回	5
2～3年に1回	1
トピックス的に	1
合 計	108

結果から約80%が年1回の実施であることがわかる。他方、週1回実施している学校のあることがわかる。

④ 馬を用いた指導・教育活動の実施

ここでは、予めねらいや目標をもち、馬を素材として用いた指導実践や教育活動を実施したことがあるかどうかを尋ねた。

表 19 馬を用いた指導の実施状況

	件数	実施有	実施無	無答
盲 学 校	66 (100)	1 (1.5)	60 (90.9)	5 (7.6)
聾 学 校	89 (100)	1 (1.1)	82 (92.1)	6 (6.7)
知的障害養護学校	394 (100)	32 (8.1)	328 (83.2)	34 (8.6)
肢体不自由養護学校	147 (100)	15 (10.2)	119 (81.0)	13 (8.8)
病弱養護学校	87 (100)	4 (4.6)	74 (85.1)	9 (10.3)
合 計	783 (100)	53 (6.8)	663 (84.7)	67 (8.6)

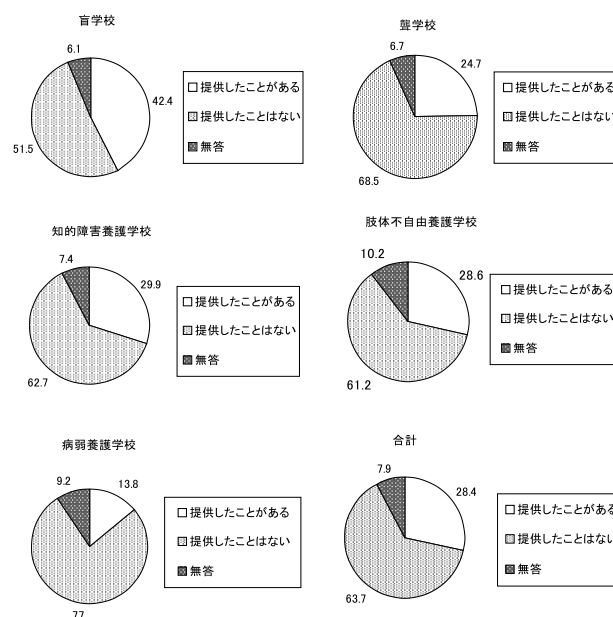


図 4 馬を用いた指導/馬に乗る機会を提供したこと

全体としては、53校(6.8%)が実施したことがあると答えている。学校種別に見ると、したい不自由養護学校の10.2%がもっとも比率が高く、10校に1校が実施した経験を持っている。次いで知的障害養護学校の8.1%となっている。

具体的な活動の内容について自由記述を求め、92件の記述が得られた。そのすべてに、「馬に触れたり乗馬を体験する」とする記述があった。

⑤ 実際場面での活動内容

「馬に触れる」形態としては「餌(ニンジン)を与える」「撫でる(触わる)」「ブラッシングをする」が主なものである。この他、直接馬に関わる活動として厩舎の掃除や飼いつけ作業を行っている学校があり「抽出児童生徒の自立活動は、厩務活動も含めた乗馬による活動。産業現場等における実習では、厩務活動。総合的な学習の時間及び生活単元学習では、馬との触れ合い、厩務活動、絵画等その子に合わせて馬との関わりを組んで活動。馬糞を肥料として使用。」との記述があった。また「写真を撮る」「観察して絵を描く」などの活動をあわせて行っている学校があった。

「馬に乗る」形態としては、ほとんどの場合馬のいる施設の職員が引く馬に乗るというかたちが取られている。しかし、継続的に実施している学校では乗馬時の活動が多様になっており、「ほとんどの児童・生徒は、スタッフまたは教師と共に乗馬している。乗馬姿勢は個に応じて様々であるが、腹臥位や座位が多い。また、子どもの状態や教師の判断で、並足、かけ足、ジグザク走行など馬の走り方に変化をもたせながら活動している。」との記述があった。肢体不自由が重度であるなどによって単独での乗馬が困難な場合の工夫が行われていることがわかる。また、「係の

方に馬を誘導してもらい、一人で乗馬する・一人で乗れない場合は、教師と一緒に乗馬する・上記でも乗れない場合は、馬車に乗る。」など、児童・生徒の状態による工夫のなされているところが9件あった。なお、15件の記述にポニーを用いているとの記述があった。

生活単元学習として、3週間、近くの牧場にでかけて活動を行った学校、農業高校畜産科との交流教育として、乗馬、牛の観察等を行っている学校がそれぞれ1校あった。

⑥ 馬事関係者との連携・協力

馬を用いた指導を行う際には、学校に高い馬の専門性を有した教職員がいる場合やその上で学校で馬を飼育しているような場合を除き、馬事関係者との連携や協力関係が不可欠である。この実態について尋ねた。〈表20〉は、馬との触れ合いや馬を用いた指導を行っている回答のあった学校に占める馬事関係者との連携・協力をしている学校数(比率)を示したものである。

表 20 馬事関係者との連携・協力

	実施校(%)	している	していない
盲 学 校	28 (100)	11 (39.3)	2 (7.1)
聾 学 校	22 (100)	4 (18.2)	1 (4.5)
知的障害養護学校	118 (100)	45 (38.1)	16 (13.6)
肢体不自由養護学校	42 (100)	19 (45.2)	5 (11.9)
病 弱 養 護 学 校	12 (100)	6 (50.0)	1 (8.3)
合 計	222 (100)	85 (38.3)	25 (11.3)

「予めねらいや目標をもち、馬を素材として用いた指導実践や教育活動」を実施しているすべての学校が、馬事関係者と連携・協力を行っていた。

⑦ 実施に要する経費支出

101件の記述が得られたが、1件は経費負担に関する記述ではなかったので除外し、100件について分類した。

分類の結果から、保護者負担が最も多いことがわかる。他方では、県がこの活動に対して予算支出をしているところが18件ある。

- i) 保護者負担 (43件)：このうち、33件には馬を用いた活動のための個人負担として徴収されていることがわかる記述があったが、残る10件については、「学級活動費」、「学級費」、「校外学習費」、「教材費」のみの記述であり、これらで集められた一部がこの活動に当てられていることが考えられる。
- ii) 県費負担 (18件)：「学校活性化推進事業」のような特別事業費のなかで用いられる場合と、「養護学校乗馬体験学習支援事業」というように馬を用いた教育活動に対して予算化されている場合、及びその他の三つに分類できる。
- iii) 就学奨励費 (11件)：宿泊学習や遠足のなかに活動が組み込まれている場合である。ただし、この場合保護者

負担が収入に応じてあるため、i)のなかに含まれると捉えることもできる。

- iv) 修学旅行費 (5件)：修学旅行に馬を用いた活動が組み込まれている場合であると考えられる。これも、iii)と同様i)に加えて考えることもできる。
 - v) 補助金 (4件)：肢体不自由児協会からの補助金が3件、ライオンズクラブからの補助金が1件あった。
 - vi) PTA・後援会費等 (4件)：PTA や学校後援会、特別会計の予算で行われている。
 - vii) 無 料 (11件)：ボランティア活動を受け入れる形で実施している学校が8件あった。具体的な記述は2件で「病院、又は乗馬施設の善意」「牧場のサービス(ボランティア)」が各1件であった。この他、農業高校の教育活動と連動して実施している学校と、博覧会場の施設を利用して実施したとする学校が各1校あった。また、地方自治体が設置している馬事施設のため経費がかからないとする学校が1件あった。
 - viii) その他 (4件)：幾つかの支出を組み合わせる場合で、以下のような記述があった。「利用料は無料・交通費については、交流教育用のバス利用費及び実費負担」、「提供に協力してくれている方々がボランティアとして活動しているので経費については無料。但し、昼食は本校で準備している。費用は、PTAの学校協力費より支出している。乗馬代は家庭より徴収。移動(タクシー代)は県費より。」「地域の方との交流『ポニー交流』の場合は無料・牧場との『乗場体験』においては有料」、「全員重心病棟に入院しているため病院の措置費から生徒分は出る。介助者は自己負担。(宿泊学習)・ライオンズクラブ助成(社会見学)」
- #### ⑧ 馬を教育に活用する意義・効果
- 馬を教育に活用する意義・効果について自由記述を求め、102件の記述が得られた。これらを、9項目に分類した。
- 分類結果から、「情緒の安定」に関する内容が最も多く、この内容は他の動物飼育と共通した意義・効果(表8参照)である。「リハビリテーション効果」や「心身のリラクゼーション」「学習」に関する内容が計28件あった
- i) 情緒の安定に関すること (24件)
 - ・特に、自閉的な子どもの情操が豊かになる。
 - ・表情が次第に豊かになってくる。
 - ・馬との一体感を持つことにより、乗馬を楽しみながら情緒の安定を図ることができる。
 - ・豊かな情操を養う
 - ・だれでも楽しめるレクリエーションであり、動物とのふれあいは、心理的安定につながる。
 - ・馬に乗るという行為で緊張するが、そのことが情緒面に何らかの影響をもたらす、よい効果が得られると思う。

- “いきいきとした”情動体験 Vitality。
 - 乗馬時の揺れを心地良く感じてくれる。(出発時と到着時の子ども達の表情が変わっている)
 - 馬に触れ合うことにより精神的安定が計られる。
 - ゆったりと馬と触れ合うことによる精神的な安定を図る。
 - 心の解放。
 - 乗馬の楽しさや馬との触れ合いを体験し豊かな情操を養う。
 - 豊かな情操を養うこと。
 - 生きている動物にふれあう機会が少ない中で、動物のぬくもりを感じ、精神的安定に寄与するのではないかと思う。
 - 馬とのふれあいを図り、豊かな情操を養うことができる。
 - 馬との一体感→動物の肌にふれぬくもりを感じる。
 - 馬に乗り、慈しむふれあいを通じて、心と身体がいやされる。
 - 癒しの効果。
 - 安心感を得る。
 - 乗馬の揺れはとても自然な揺れなので情緒の安定を図ることができる。
- ii) 「馬」という大型動物のもつ特性に関すること (15件)
- 機械の乗り物とは異なる生きものとの温かな関わり (リラックスできる要素) 様相、大きさ、体温、手ざわり、筋肉等の動き (移動時の動き)、人と馬との信頼関係 (声かけと馬の反応) 等を体感できる喜び。
 - 視覚障害児にとって実際に体験することによって、馬という動物や乗馬といった言葉を具体的に理解し、イメージすることができるようになる。
 - 視力障害のある子どもも安全に乗ることができる。
 - 大型動物への興味関心がひろがる。
 - 他の動物に比べ表情豊かである。
 - 馬は気性がおだやかで、誰でも触れることができる。
 - 馬との心のふれ合い。
 - 馬を見たり、ふれあったりすることにより、心を和ませることができる。
 - 乗馬体験による乗馬療法としてとらえています。
 - 動物 (馬) との対話…心と心、やさしい気持ち。
 - 動物 (牛や馬) に親しむ心を育てる。
 - 乗馬して高いところからの視界、ゆれの感覚など体験できること。
 - 大きな家畜を身近に見ることができる。
 - 肢体不自由の児童は寝る姿勢で生活することが多いが、馬に乗ることによって視界がかわる。
 - 身近に馬を見たり触れたりして、馬に親しみをもつ。
- iii) 経験の拡大に関すること (14件)
- これまで味わったことのない体験をさせることができる。
 - 馬とのふれあいをとおして、普段味わえない貴重な体験となる。
 - ふれあいにより心の安定をはかり、体験を広げる。
 - 馬に乗るという体験を行う。
 - 実際に乗ることができ、貴重な体験ができる。
 - 病院に入院している子どもにとっては数少ない動物とのふれ合う機会である。
 - インストラクター、現地スタッフとの関わりから社会性が育まれる。
 - 経験の拡大。
 - 経験の広がり。
 - 経験をjする。
 - 障害児の経験領域の拡大。
 - 体験の拡充。
- iv) 思いやりや生命尊重に関すること (13件)
- 動物を恐れなくなる。
 - 動物とのつきあい方が学べる。
 - 動物を知り、生きものをかわいがる心情を育てる。
 - 動物への興味、関心を高める。
 - 生き物に対する愛情を育て、生命尊重の意義を学ぶ
 - 思いやりやさしさ等の心を育てる教育に有効である。
 - やさしさやいたわりの心の育成。
 - 動物に慣れ、親しみをおぼえる。
 - 動物愛護。
 - 動物にふれ合う。
 - 動物に対するやさしい気持ちを育てる。
 - 子どもが喜ぶ。
 - 触れ合いを通して優しい心が育つ。
- v) リハビリテーションに関すること (12件)
- リラックスやバランスなど体の育ちの面。
 - 姿勢保持、平衡感覚を養う。
 - セラピー効果。
 - 感覚訓練として体のコントロールバランス感覚を学ぶことができる。
 - 馬に乗ることにより適度な緊張とリラックスが得られ、身体バランスの確保、筋肉の発達血液循環の促進等の身体的効果。
 - 肢体不自由児者の姿勢保持等の身体の使い方。
 - 機能回復訓練。
 - 乗馬により筋緊張の緩和を図ることができる。
 - 身体や脳への刺激。(馬の歩くリズムにあわせて生じる揺れ)
 - 姿勢保持に役立つ。
 - 擬似歩行体験ができる。

- ・リハビリテーション効果。
- vi) 心身のリラクゼーションに関すること（9件）
 - ・はじめは初めての経験で緊張するが、少しすると心地よい揺れでリラクゼーションになる。
 - ・動物とのふれあいを通して心身のリラックス効果を得る。
 - ・心理的、身体的リラクゼーション。
 - ・馬の温かさややさしい揺れに対して心理的、身体的な緊張がゆるみやすい。
 - ・馬とふれあうことでの情緒の安定やリラクゼーション。
 - ・心身のリラックス効果。
 - ・乗馬による心身のリラクゼーション効果。
 - ・乗馬中、馬との一体感を体験させることができる。
 - ・身体、情緒面で効果大。
- vii) 自立活動や教科学習に関すること（7件）
 - ・自立活動のねらいとして十分有効な教材である。
 - ・小学部においては、生活科、理科といった教科、また自立活動という領域において役立つことが多い。中高では理科で役立つ。
 - ・児童生徒の心身の機能を高める。
 - ・自分以外の人とのコミュニケーションをはかれる（特に自閉児、馬の呼吸に合わせる）。
 - ・コミュニケーション能力の促進（今までほとんど発語することがなかったが、ポニーを媒体としての発語から、他の場面でも発語が増えた）。
 - ・身近にいない動物とのコミュニケーションから学ぶ。
 - ・動物や人間とのコミュニケーション。
- viii) 興味・関心の拡大（4件）
 - ・子供が楽しみにしていて、目的をもてる。
 - ・児童・生徒が興味を持って活動する。
 - ・興味、関心が高まる。
 - ・生徒の興味、関心の喚起。
- ix) その他（4件）
 - ・平成12年度初めてポニーに乗ったが乗馬療法とまではいっていない。2～3割の生徒が一人30秒ほど乗っただけである。
 - ・意義や効果は知らないが、隣りにいるので、活用している。
 - ・よくわかりません。
 - ・特に馬であることにこだわっていない。

⑨ 馬を教育に活用する上での課題

馬を教育に活用する上で課題となっていることについて自由記述で回答を求めた。その結果、87件の記述が得られた。1件に複数の記述が見られたので、これを内容別に分けた結果93の記述となった。以下、これを内容別に分類した結果を示す。

最も多かったのが、「実施する施設が学校から離れてい

ること(26件)」で、このなかには、単に実施場所まで時間がかかるという内容の他、車椅子の搬送を含め交通手段の確保の困難、実施施設職員との打ち合わせ時間の確保の困難が含まれている。

2番目に多かったのが「実施費用に関すること(23件)」で、効果はわかっており継続的に実施したいが経費の面から多くを実施できないという内容である。

次いで「安全面の確保に関すること(10件)」が多かった。この他、「指導法に関すること(6件)」では、動物を恐がってしまう児童・生徒に対する指導法、座位のとれない子、緊張の強い子への指導法、全盲の生徒への指導法に関する内容などが分類されている。また、「馬事スタッフとの連携に関すること(5件)」は、指導にあたって相互の専門性をどのように活かし、実際場面をつくるかに関する内容である。以下、「教育課程・教育計画にどのように位置づけるか(3件)」、馬の体調、天候・気温、時期の問題など「実施予定に影響する要因に関すること(4件)」、「衛生面に関すること(3件)」、「設定回数の確保に関すること(3件)」、「時間にゆとりがない(1件)」、「校内の馬小屋整備(1件)」であった。

なお、「特になし」とする記述が7件、「分からない」とする記述が1件あった。

IV. 考察及び今後の課題

以下、結果から「盲・聾・養護学校における動物との触れ合い」、「馬を用いた指導」について考察する。

約80%の学校から調査票の記入・返送に協力を頂くことができたことは、この領域に関する関心が高いことを示しているのではないかと考えられる。

動物との触れ合い

動物と触れ合う機会を設けている盲・聾・養護学校が多く平均すれば約62%の学校が実施していることがわかる。なかでも、盲学校と聾学校は75%を越える学校が実施している。盲学校からの記述には、触察により実物に触れる体験を重視したいとの内容が複数見られたし、できればライオンなどの猛獣といわれる動物にもふれさせたいとの記述も見られた。

他方、病弱養護学校は実施率が約39%と低い結果となっているが、これは児童生徒の疾患、病院併設であることが大きな理由となっている。なお、知的障害養護学校よりも肢体不自由養護学校の実施率のほうが高くなっている結果は注目すべき点である。

現在動物との触れ合いを行っていない学校から得られた内容を見ると、肢体不自由養護学校と病弱養護学校を除く学校は以前に行っていた経過をもつところが4～5割存在

している。これらは、何らかの理由で動物の触れ合いを実施しなくなったわけだが、その背景は、＜動物と触れ合う機会を設けていない理由＞の記述内容に求めることができる。

それによれば、一つは「子どもの実態から」があり、障害状態の重度化が考えられる。また、動物飼育を行っていた学校の場合「飼育管理上の問題」も実施を取りやめた大きな理由となっていることが推察される。これは、現在動物飼育を行っている学校が課題として挙げている内容として格段に多いことから見ても分かる。

さて、動物との触れ合いが教育活動にどのように位置づけられているかだが、＜ねらい＞には「生命尊重」「情操教育・情緒の安定」「動物愛護」「体験を広げる」などに関する内容が多数を占める。また、動物飼育について教育課程との関連をみると「休み時間の触れ合い」が最も多く、校務分掌に位置づけられている学校も聾学校の48%となっている他は多くない。これらから、動物との触れ合いが子どもたちにより影響をもたらすことは多くの学校(教員)に認識されているが、その意義づけについては必ずしも具体的ではないこと、従って行事的に行われたり一部の教員が行うに留まっており教育活動に組織的な取り組みとして行われている例が少ないことなどが推察される。

しかし、特に動物飼育に関していえば「保護される」「世話をされる」存在になりがちな障害のある子どもたちが立場をかえて「保護する」「世話をする」という体験を継続的に行うこと、そのなかで出生や育ちそして死に立ち会うということは大きな教育的意義があるのではないかと思われる。これらは、学校自体で飼育を行うことが困難である場合近隣の畜産農家などの環境がある場合、協力してもらうことがかなえば「地域交流」として定期的に行うなかで工夫することもできよう。

また、いくつかの学校からの回答にあったように教科学習(記述があった「理科、生活科、美術」以外にも考えられる)や総合的な学習の時間、作業学習の素材としても動物との触れ合いは活用できよう。さらに、多くの学校が関心を寄せる「動物との触れ合い」を行っていくためには、

飼育施設の担当者、獣医等の専門的な知識・技術をもつ人々との連携が必要になってくる。これらの人々との連携により学習内容はより豊かになるし、動物飼育に関し課題として挙げられていた「(ウサギ、ハムスター等) 増えすぎて困る」「感染症の予防」などに適切に対応でき動物愛護の点からも充実させることができる。これらの意味で、動物との触れ合いの教育(学習)的意味を教職員集団、可能であれば子どもたちを含めて議論し積極的に位置づけていくことが必要と思われる。そのことを通じて、課題として挙げられている「経費の問題」も学校として対応を工夫することができよう。

馬を用いた指導

今回の調査から、全体の約58%が「馬を用いた指導、乗馬療法等」について聞いたことがあると答えており、その認知度が非常に高いことがわかった。さらに、馬と触れ合ったり乗る機会を提供している学校についても4校に1校を越える比率で実施していることがわかった。これは、「馬は特別なものである」、「障害のある子どもの教育になぜ馬が必要なのか」といった観念を越えて実際に行われており何らかに意義が感じられている、あるいは明確になっていることによって行われている可能性があることを否定できない。

ただ、実施頻度をみると、毎週定期的を実施している学校、ポニーを飼育している学校はあるが、多くは年1回から数回となっている。これは、実施場所の少なさや経費的な問題が大きな要因になっている。各地に県や市町村がこの活動に対して予算措置をしたり直接に馬のいる施設運営をする場所が出てきている。また、各地で協力ボランティア団体も活動を展開している。

諸外国においてプール指導や音楽療法などと並んで障害のある子どもへの対応として取り組まれている馬を用いた指導をより普及させるためには、この領域に関する実際的な検討が実践の中で行われ、我が国の実態に合った形態が開発されていかなければならない。

今後の課題と展望

調査結果から、回答のあったうち6割に近い学校が「馬の特性を活用した指導」を知っていることがわかった。さらに、何らかに馬との触れ合いの機会を設けている学校が4校に1校を越えていることもわかった。これらの結果は、私たちの予想を大きく越えたものであった。しかし、馬と触れ合ったり、馬に乗るといった機会がどのような教育的な意味をもつのか、指導に活かしているのかといった点については、多くの場合必ずしも十分な検討がなされていないことが推察された。他方では、週1回の実施によって成果を挙げている学校も見られた。

また、調査から6割を超える盲・聾・養護学校が動物との触れ合いを何らかの形態で教育活動に組み入れていることが分かった。児童生徒の健康面の理由から実施が困難な病弱養護学校を除くと、実施率は7割を越える。しかし、動物との触れ合いが子どもたちにとって大きな意義があるとしながらも、必ずしもその活動方法や評価法が確立された上での実施になっていないことがうかがわれた。この点は今後の大きな課題であると思われる。

本研究を通じて、馬を用いた障害のある子どもに対する指導は、次の三つの側面から捉えられることがわかった。

(1) 乗馬に伴う身体運動を活用した身体操作に関する

学習の側面。

(2) 馬という人に親和性が高く、乗るといふかたちで心身を任せる機会を提供できるという特徴を持つ動物を媒介とした対人関係や社会的なスキルの学習という側面。

(3) 広く馬のいる環境の多様性を様々な学習素材として扱うという側面。

これらの実際的な方法や留意点については本報告書に示した通りである。しかし、その活動方法や評価の観点及びこれに基づく評価方法の開発が課題として残された。

最後に、「馬を用いた障害のある子どもの教育」について今後の展望を考えてみる。諸外国においてこの領域はプール指導や音楽療法と並んで障害のある子どもの教育の分野に定着している。しかし、今なお馬が文化的に一般的な身近なものとして存在しているドイツやイギリスなどのヨーロッパと異なり、日本においてこの領域が発展していくためには、障害のある子どもの教育に関する専門家、馬の調教の専門家、獣医師、厩舎作業指導者、馬事関係者などによるチームアプローチの行われることが最も実際的と言える。その積み重ねの中で指導及び理論の体系化が図られていくことが必要である。

一般研究「障害のある子どもへの馬の特性を利用した指導に関する研究」報告書

障害のある子どもの教育に馬の特性を活かす

－自立に向けた心身一元的な指導に焦点をあてて－

発 行 日 平成 15 年 3 月 31 日
編 集 ・ 発 行 独立行政法人 国立特殊教育総合研究所 肢体不自由教育研究部
所 在 地 〒239-0841 神奈川県横須賀市野比 5 - 1 - 1
電 話 046-848-4121 (代表), 046-849-9447 (研究部直通)